
相棒&仮面ライダーディケイド 傍迷惑な殺人

秋月真水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相棒&仮面ライダーディケイド 傍迷惑な殺人

【Nコード】

N9893H

【作者名】

秋月真氷

【あらすじ】

二週間で九人が、原因不明の衰弱死を遂げた。彼らに共通点はなく、都民はその病への恐怖に震えていた。「どんな細かい点も、気になってしまう。僕の悪い癖」：警視庁特命係の杉下右京が、その死に疑問を抱く。「なるほどな。大体分かった」：仮面ライダーディケイド、門矢士は世界を写し取る。会うはずの無い者達が出逢った時、その瞳は何を見る：？撮影会社と役者つながりだけで書こうと思った作品です。ファンフィクションだからこそ出来る物語をお楽しみ下さい。…そろそろ、行きますか。

プロローグ（前書き）

この作品は、東映のドラマ「相棒」と、特撮「仮面ライダーディケイド」のクロスオーバー作品です。

時間軸と致しましては、「相棒」はシーズン6終了後からシーズン7の間、「ディケイド」は「RXの世界」と「アマゾンの世界」の間くらいとなっております。

途中、齟齬が生じる可能性もございますので、ご指摘等頂ければ幸いです。

：それでは、絶対にあり得ない、「傍迷惑な殺人」の幕開けです。

プロローグ

東京都、某区。

そこで最近、奇妙な「死に方」が流行した。

手っ取り早く言えば衰弱死なのだが、原因は不明。最初は新種のウィルスの可能性も示唆されたが、検査の結果それは無いと発覚。

死者にも共通点が無いことから、都民はその原因不明の「死」の影に怯えていた。

「またですよ右京さん」

「はい？」

濃い緑のジャンパーを着た短髪の男性が、自席で紅茶を嗜んでいた眼鏡の男性に声をかけた。

体育会系そのもののジャンパーの男性に対し、右京と呼ばれた眼鏡の男性は、どちらかと言えば知的な印象を受ける。

「原因不明の衰弱死。この二週間で九人目です」

言いながら、ジャンパーの男性は右京の後ろにあったテレビをつける。

その箱の中では、女性アナウンサーが新たな死者を悼みながらも、最近流行しているこの「現象」を専門家に問いかけている。

画面の端には、赤字で人々の恐怖を煽るような文句が書かれていた。

「いたましいですねえ。僕達は病に対しては、あまりにも無力です。そう思いませんか、亀山君」

心底残念そうに、右京はジャンパーの男性、亀山にそう言葉をかけた。

…警視庁、特命係。

字だけを見れば格好良く見えるが、実際は「人材の墓場」と呼ばれる部署である。

「特に命令が無い限り何もしない」のが、特命係のスタンスなのだが、最近は自己判断で動くことも多く、上層部から煙たがられている存在だ。

所属人数は二名。眼鏡の男性：杉下右京警部と、その部下であるジャンパーの男性、亀山薫巡查部長。

たった二人ではあるが、彼らが解決に導いた事件は数知れず。知的かつ細かい所を見落とさない推理力の持ち主である右京と、熱血漢で人情味溢れる亀山の名コンビである。

今のところ、大きな事件も起こっておらず、彼らが動くようなこともないのだが：やはり、心痛の種はあった。

最近流行の、「原因不明の衰弱死」である。

先程亀山が言った通り、この二週間で既に死者は九名。その症状は、現代医学では手の施しようが無かった。

「ねえ、右京さん。俺思うんですけど、やっぱりこれって何かの陰謀じゃないですかね？ なかなか検出されないウイルスとか」

「それなら、真っ先に医療関係者が亡くなっているはずです。しかし、今の所そう言った報道はされていません」

「あ、そっか」

右京に言われ、亀山は再び低く唸る。

病なら、原因があるはずだ。しかし、その原因が分からない。ウイルスなら右京の言った通り、医療関係者が二次感染者として現れるはずだが、現段階では、そのような情報は無い。

患者が昏睡状態になってから、亡くなるまで、およそ丸一日。多少の個人差はあるが、その衰弱の早さは異常とも言えるものだった。

「よ、暇か？」

そう言って「特命係」の部屋に顔を覗かせたのは、黒縁眼鏡の、やや額の広いひょうきんそうな男：組織犯罪対策部組織犯罪対策五課長、角田六郎。階級は右京よりも上の、警視。

とてもそうは見えないが、薬物や銃器関係を取り締まる課の長である。

ちよくちよくここに顔を覗かせ、勝手にマイカップを置いてこの部屋のコーヒーを飲むのが、もはや日課と化している。

その彼が、亀山の視線の先：テレビの画面を見ると、ややオーバーにも見えるリアクションで、がっくりと肩を落とした。

「ああ、これ？怖いよねえ、この病気で亡くなった人達、前日まではいたって普通に生活してたって言うんだからさあ」

「課長、詳しいっすね」

「そりゃあね。五人目の被害者がウチの町内会の会長さんでさ。ジヨギングの最中に発症したんだって」

元気な人だったのになあ、とコーヒーをすすりながら角田はどこか寂しそうに呟く。

彼も、警察官だ。人が：まして付き合いのあった人物が亡くなったことが、やはりいたましく感じるのだろう。

「正体不明ってのが、また怖いよねえ」

くわばらくわばら、と呟きつつ、角田はずずっと音を立ててコー

ヒーを飲み干した。

行儀が良いとは決して言えないが、半ば日常と化しているので特に咎めることはない。

…この時の彼らは、予想していなかっただろう。

この原因不明の衰弱死が…傍迷惑な殺人であるなどとは。

＊

「今度の世界は…何なんだろう？」

写真館のホールらしい。プロ仕様のカメラが中央にあり、脇には暗室らしい部屋も見受けられる。

そんな場所で、うーんと唸りながら、垂れ目気味の青年が呟く。

彼の名は小野寺ユウスケ。またの名を、仮面ライダークウガ。

グロンギなる戦闘種族と戦い、その時に知り合った無二の友人に付いて、共に「異なる世界」を旅する「異邦人」である。

その彼が見上げているのは背景ロール。

先日までは「暗い空に銀色の要塞と、大地に刺さった銀色の杭」だったのだが、今は「灰色の、角地に合わせた造りの建物と、クリスタル製らしいチェス盤」と言う、何とも言えない取り合わせ。

その絵に、心当たりなど勿論、無い。

「この建物…どう見たって警視庁だよなあ…」

「そうみたいですネ」

ユウスケの言葉に頷いたのは、長い黒髪の少女。この写真館の看板娘である光夏海だった。

そんな彼女の後ろには、彼女の祖父である光栄次郎が、いつものお気楽な笑顔で朝食を用意している。

「ところで…土君はどこ行っただんですか？」

「俺ならここだ」

夏海の言葉に答えるように現れたのは、ユウスケよりも背の高い、首からマゼンダ色のトイカメラをぶら下げた青年…門矢士。またの名を仮面ライダーディケイド。

数多の世界を巡り、世界を救う旅の最中である…の、だが。

「今回のその格好…何？」

不審その物の顔でユウスケが問いかける。が、本人も今一つ分からないらしく、その服…白衣の裾をはためかせた。

医者、だろうか。少なくとも、同じ白衣でも科学者には見えない。

「身分証がある。…これだ」

「えーっと…『監察医・門矢士』…監察医い!？」

「ああ。どうやらこの世界では、死体を見るのが仕事らしいな。それにしても…俺はやはり、何を着ても似合うな」

素っ頓狂な声で身分証と持ち主を交互に見比べるユウスケに対し、自己愛に満ちた感想を鏡の前で吐きながら、士は背景ロールの絵をじっと見つめる。

警視庁と、クリスタルのチェス盤。そんな絵の描かれた世界で、監察医となって、一体何をしろと言うのだろう。

「この世界には、どんなライダーがいるのかな？」

「さあな。会ってみれば分かるだろ」

どこことなく楽しそうな表情で言ったユウスケに、冷たく返しながらも、士はどこか不安げに外を見つめる。

奇妙な不安が、彼の胸に過ぎる。

が、それを誤魔化すように、士は真っ直ぐに玄関へと赴き…

「ちょっと出かけてくる」

「あ、俺も行く!」

「待って下さい、私も行きます!」

士の後をユウスケと夏海が追いかける。彼を1人にしておくと、何をしでかすか分からない。それに…大ショッカーなる存在も明らかに始めたのだ、用心するに越したことは無い。

「花の里」と書かれた看板を通り過ぎながら、彼らはとりあえず、背景ロールの建物…警視庁へと、歩き出して行った。

プロローグ（後書き）

こんにちわ。秋月真氷と申します。

この度は、当作品をご覧頂き、誠にありがとうございます。

＊

今まで、ホラーとも呼べないホラーをポツリポツリと投稿して参りましたが、今回特撮好きが高じ、このような作品を執筆させて頂くこととなりました。

＊

とは言え、通常の刑事ドラマである「相棒」と、リアルではあり得ない「仮面ライダー」とのコラボレーション。個人的にもどうなるのか、戦々恐々としております。

＊

ネタは新鮮なうちに！と言う思いからの投稿ゆえ、多少無茶な展開などあるかもしれません。その時はご容赦下さい。
それでは。

今後もお付き合い頂ければ、幸いに存じます。

特命係―1―不可思議

「…気になりますねえ」

何かの資料に目を通していた右京が、視線を上げるや否や、ぽつりとそう呟いた。

「気になるって…何がです、右京さん？」

「例の、原因不明の衰弱死です。ここを見て下さい」

コーヒーをカップに注いでいた亀山の問いに答えると、右京は持っていた資料の、ある部分を指し示す。

それは、亡くなった者達が、最初に発見された場所。

「えーっと、一人目は喫茶店の前、二人目は商店街、三人目は駐車場で、四人目は高層ビルの屋上、五人目…ああ、課長の町内会の会長さんですね、この人は牧場前の路上…」

右京に言われた通り、亀山はそれぞれが発見された場所を読み上げていく。

喫茶店、商店街、駐車場、屋上、路上、森、東京タワー前、駅のホーム、お化け屋敷と噂される家の前。そのどれにも、これと言った共通点は見つからない。

「はあ…見事にバラバラですねえ…」

「おかしいと思いませんか？」

左手で「1」を作るように軽く人差し指を立てながら、右京は亀山に問いかけた。

：しかし、見事に何の関連も無さそうな九つの場所に、右京は何かを見出したらしい。その「何か」が何なのか、亀山には分からないのだが：

「九人もいれば、誰か一人くらい、屋内で倒れてもおかしくは無いと思いますか？」

「あっ！確かに！言われてみれば皆屋外ですよ！けど：偶然じゃ無いっすかね？」

確かに、屋外と言う共通点は見出せる。九人と言う数字は少なくは無いが、偶然で片付けることも、決して出来ない訳では無い数字でもある。

「それに、もう一つ」

「まだ、何かあるんですか？」

「ええ。彼らは人気の少ない所で見つかっています」

「あ、ホントだ」

屋上や森、お化け屋敷前は元々人気の少ない所だし、他の場所も人通りが多い訳では無いが、或いは人気の少ない時間帯に見つかっている。

人の少ない屋外。共通点と言えなくは無いが、決定打とも言えない。

だが：この僅かな共通項から、新たな何かを発見できるかもしれない。

「けど：これ、どう言うことなのでしょう。皆、見つかる程度には人気のある場所で倒れてるってことですよね。何か意味があるのかなあ：」

困ったようにガシガシと自分の後頭を掻き毟る亀山に、右京は表情を崩さずに紅茶を一口飲み：もう一度資料を見つめる。

職業も年齢もバラバラで、冒険家に始まって、家事手伝い、雑誌記者、フリーター、研究員、和菓子屋店員、料理研究家、高校生、そしてバイオリニスト。

その職業と、見つかった場所を見比べながら、右京は不思議そうな：と言うよりは、不審そうな表情になる。

「亀山君、不自然だと思いませんか？」

「えーっと：誰も屋内で見つかっていないことが、ですか？」

「いいえ」

亀山の問いを否定し、右京はホワイトボードへ何かを書き込む。

それは、亡くなった面々の職業と発見場所。上段に職業、下段に発見場所を書き記すと、講師のようにペンでコンコンとホワイトボードを軽く叩いた。

「見て下さい。三人目：雑誌記者の方までは、見つかったもおかしくない場所で見つかっています」

「ああ、はい」

「しかし四人目：フリーターになると、一気に奇妙になる」

「あ、確かに、高層ビルの屋上なんか、どうやって：」

「方法が全く無いとは言いきれませんが、やや不自然です。そして、問題は六人目：和菓子屋店員が見つかった場所です」

「確かに！何で和菓子屋の店員が森なんかにいるんだ！？」 冒険家の人がここで見つかるならまだしも：」

指摘されれば、その違和感を拭いきれなくなる。

皆、人気の少ない場所：しかも屋外で発見されたこと、職業と発見された場所の不自然さ。

気付いてしまえば、この一連の衰弱死に、何らかの事件めいたものを感じてしまう。

「しかし、だからと言ってこれが事件だとは限りません」

「え！？だって、滅茶苦茶怪しいじゃないですか」

「何しろ、死因は不明。ただの衰弱死です。しかも、角田課長のお話では、前日までとても元気だった。つまり、監禁して弱らせた訳では無い」

「ウイルス…も否定されましたし…」

「毒物と言う可能性も考慮できますが、もしもそうなら、とつくに公表されているでしょうしねえ。お手上げです」

「うーん…本当に原因不明なんだなあ…」

右京の言葉に低く唸りながら、亀山はぐるぐると考え込む。が、なかなか案は出てこない。

…右京からも出てこないのだ、自分が考えて出る訳が無い、と、心の片隅でこっそり思うのだが、そこは諦めが悪く、人一倍正義感の強い亀山のこと、悩むことはやめなかった。

「…さて、僕はそろそろ帰ろうかと思っています」

そう告げると、右京はかけておいたスリーピースの上着を着て、札を赤く返してしまう。

「ああっ！俺も帰ります！」

それを慌てて追いかけて、亀山もまた札を返して帰路へとついた。

小料理屋「花の里」。ここは右京と亀山、そして亀山の妻である亀山美和子の行きつけの店である。

この店は右京の元妻である宮部たまきが女将として働いている、静かな場所。常に客で溢れかえっているという訳では無いが、知る人ぞ知る名店である。

「でも、怖いですよ。今流行りの衰弱死」

「そうなんですよ、原因不明ってところが特に」

たまきの言葉に、美和子がうんうんと頷きながら同意する。

実際、世間の皆が恐れている。根底の見えない恐怖と言う物なのかもしれない。

原因がわからないと言うことは、当然誰が、いつ発症するかもわからないと言うことでもあり、明日は我が身かもしれないと怯えるのは、至極当然のことであった。

「こればかりは、薫ちゃんじゃあどうしようも無いもんねえ」

「これが、本当に病気ならな」

「あら、違うんですか？」

「あくまで、可能性の話です」

冷静にそう言うと、右京はゆっくりと自分の酒を煽る。

どうやら、この話の流れを、ここで断ち切るつもりらしい。その事を理解し、たまきも、そして亀山夫妻もそれ以上は何も言わなかった。

「時に、たまきさん」

「何ですか、右京さん？」

「お隣は、いつから写真館になったのでしょうか？僕の記憶では、昨日まで確か、空き地だったと思うのですが」

かなり唐突な話の展開に、一瞬だけ亀山は間の抜けた顔をした。ほぼ毎日この店に通っているが、隣の店舗のことなど気にも留めていなかっただけに、右京のその一言に驚いた。

「え：そうでしたっけ？」

「注意力が散漫ですよ、亀山君」

「すみません」

ぺこりと亀山がわざとらしく右京に向かって頭を下げた瞬間。店の引き戸が開き、初老の男性が何やら箱のような物を抱えて入って来た。

項辺り程度の長さの、白に近い銀髪、丸い眼鏡の奥には、笑いジワの刻まれた目。

「こんばんは」

「いらっしやいませ」

はじめて来るその男性に、たまきは上品な笑顔で挨拶を交わす。それに対して男性の方も、穏やかな笑顔で深々と一礼すると、カウンターに持っていた箱を差し出した。

「しばらくの間、隣で写真館をやることになりました、光栄次郎です。ご挨拶に、これ、特製の手打ち引越し蕎麦。良かったら食べて」「あら、ご丁寧に。ありがとうございます」

どうやら、この老人は、右京の言っていた写真館の主人らしい。光栄次郎と名乗ったその老人は、蕎麦を置いていくと、そそくさと隣へ戻っていつてしまった。

特命係―1―不可思議（後書き）

当作品の書き方は、一話毎に視点が、「相棒サイド」と「ディケイドサイド」に変わります。今回は相棒サイドです。

＊

しかしながら、勿論人物の行き来はある訳でして。今回のように、最後におじいちゃんが出て来るということもあれば、ディケイドサイドで「暇か？」とか角田課長が出てくる可能性もある訳です。

＊

しかし今回困ったのは、「光写真館」をどこに置くか。一番ありえそうだったのは「花の里」だったのですが、それは流石にまずいと思ひ、隣にもって来ました。

ただ：相棒シリーズで、「花の里」の隣が空き家だった事など一度も無く、シーズン5からは周囲のお店も固定だったはずなのです。早速、齟齬です。気にしません。

＊

こんな、何か適当な感じの人間ですが、執筆は最後まで、責任もってやらせて頂きます。
それでは、次回また。

ディケイドー1…死者の共通点

かしゃりと、街の風景を撮りながら、士は周囲を見回す。

街行く人の顔にはごく当たり前の平穏があり、異形達などとは無縁の生活を送っているような気がする。

「士君、どうしたんですか？」

「…別に。ただ、平和だなと思ったただけだ」

ただ、今までもそうだったが…平和に見せかけて、何かが起きた。今回もそれが起きないとは限らない。

しかし、この世界に来てから得た情報と言えば、最近この辺りで流行している原因不明の衰弱死と、裁判官が一人辞めたとか言うくらいのも物だ。

本当に、平和だ。退屈な程に。

士がそう思ったその時。白いスーツの男が彼らの前に立ち塞がった。見た目は紳士にも見える中年男性。しかしその顔に浮かぶのは、皮肉な笑いと明らかな悪意。

…アポロガイスト。人の命を奪い、自らの命とする存在。そうしなければ、一月しかその命が保たないと言われている。

現在、その「他者の命を奪うための道具」…パーフェクターは、士がアポロガイストから奪い、未だその手の中にある。

「お前は…」

「久し振りだな、ディケイド。パーフェクターを返してもらおうか」

いきなり本題に入りながら、アポロガイスト…人間態の時の呼び名はガイ…は、ゆっくりと手を差し出しながら士達に近付く。

士達はと言うと、警戒したようにガイを睨みつけ、彼が近寄るの

と同時に同じ距離だけ後退る。
一定の距離を保ちつつ言葉を交わすその様は、どこことなく滑稽に映る。

「返したら、お前はまた他人の命を奪うだろう？」

「当然だ。私は、この世界一迷惑な存在なのだ」

「どの世界でも迷惑なんだよ！」

その言葉が合図になったように、士は自らの腰にベルト…ディケイドライバーを装着し、持っていたカードホルダー、ライドブッカーから一枚のカードを取り出した。

ピンク色の縁取りに、背景色は濃い青。写真のように描かれているのは、士が変身した姿であるディケイド。

それは、士がディケイドに「カメンライド」…有体に言えば変身するためのものだ。

一方ユウスケも、自らの腹部に手を当て、今まで存在していなかった銀色のベルト…アークルを召喚し、いつでもクウガへ変身できるように身構える。

後ろでは、夏海が二人の邪魔にならないよう、物陰に隠れている。これで戦う準備は整った。…そう思った。

だが…ガイは、口の端を歪めて、軽く笑った。まるでそれが、愚かな行為だとも言うかのように。

「何がおかしい？」

「この世界で変身することが、いかに迷惑な行為であるか、分かっている貴様らを哀れに思ったただけだ」

「何だって…？」

くっくと、噛み殺しきれない笑い声を上げ、ガイは言葉通り、心底哀れむように彼らを見やる。

一方の士達は、言葉の意味を酌みきれずに訝しげな表情を見せていた。勿論、いつでも変身できるように身構えたままではあるが。

…変身することが、迷惑な行為。

再び士の胸の内に、嫌な予感が広がる。

鳴滝と言う名の男には、「世界の破壊者」と呼ばれ、いつか出会った白いマフラーをした青年には「破壊せねばならない」と言われた事を思い出す。

自分の変身が、世界の破壊を促進させるのかも知れない……

そんな苦い思いが、士に一瞬の油断を生んだ。

その油断に乗じて、ガイは滑らかな動きで士との間合いを詰め、士の白衣の胸ポケットに入れていた銀色の何か…パーフェクターと呼ばれる「それ」を奪い取る。

「しまった!」

「フッフ…これは返してもらったぞ」

勝ち誇ったようにガイは宣言すると、再び軽く笑い…唐突に現れた銀の幕の内側へと、その姿を消した。

「待て!」

慌てて後を追うが、時、既に遅し。

ほんの刹那の差で、銀の幕は最初から存在していなかったかのようには掻き消えた。

「逃げられた…っ!」

士の悔しげな呟きは、街のざわめきに消えた。

「…どうやらこの世界も、俺の世界じゃないらしい」

あの後もしばらく周囲を探したが、ガイの姿を見つけることは出来ず、警視庁に向かう気にもなれぬまま、結局三人はここ、光写真館に戻って来ていた。

士の溜息と共に投げ出された写真達は、歪み、ぼやけ、色も元とは異なっていた。

…士曰く、「世界が自分に撮られたがっていない」ため、この様な、所謂ピンボケの写真になるらしい。

「士君、あの人、また誰かの命を奪うに決まっています」

「被害者が出る前に、早く取り返そうぜ！」

やる気満々の夏海やユウスケとは対照的に、士の方はと言うと：かなり、やる気の無さそうな表情で彼らの顔と壁にかけてある時計を交互に見つめる。

「こんな時間からか？」

士の言う通り…現在、夜の十二時。人を探すには、やや不向きな時間帯である。

人気の無い時間帯に外をうろうろして、厄介事を招きたくは無い。ただでさえ、この世界は今、原因不明の衰弱死とやらで神経質になっている節があると言うのに。

「しかし怖いね、この病氣。夏海達も気をつけるんだよ」

ずぞぞ、と蕎麦をすすりながら、栄次郎はテレビの告げる衰弱死のニュースに向かって言葉を放つ。

原因不明の衰弱死。まるで、アポロガイストに命を奪われたかのような被害者達が、この世界では二週間前から続出しているらしい。今朝で九人目だと、テレビの中のキャスターは沈痛な面持ちでその事実を伝えている。

「この病気も、おかしいよな。パーフェクターを奪われたのは今日の昼だから、アポロガイストの仕業って訳じゃないし」

「ひょっとして、この世界の『滅びの現象』がこの病気なんじゃ…」

薄ら寒そうな表情で、自分の意見を言う夏海。一方で士は、どこか納得していないような顔つきで、じっとテレビの画面を食い入るように見つめている。

「士…？」

彼につられるように、ユウスケも画面を見つめる。

特に何の変哲も無い、普通のニュース。人が亡くなったと言う事実すら、あっさりと流してしまうよう、そんな情報達が画面から垂れ流されている。

「どうかしたんですか、士君？」

「別に」

夏海の、訝しげな問いにもはぐらかすような答えを返し、士はただ黙って画面を見つめる。

特に怪しいことは何も放送されていない。せいぜい、この二週間で亡くなったと言う人物達の名が連なっているだけ。

佐渡裕輔と言う人物に始まり、風溪昭市、神前慎二、苑田匠、弘瀬数馬、橘一志、草壁宗司、櫻居亮太郎そして浅生渉と言う人物で終わる。

「…成程な、大体分かった」

「分かったって…何が!？」

「死んだ人間の共通点だ。どうやらこの原因不明の衰弱死とやらに、大シヨツカーが一枚噛んでいゝらしいぞ」

ふ、と不敵な笑みを浮かべ、まるでドラマの探偵よろしく人差し指をテレビに向かって突きつける。

…別に、画面の向こうにいる人物が犯人だと言いたい訳では無いのだろうが。

「どういう意味だよ士、共通点なんて…」

「鈍いなユウスケ。名前を音読してみろ」

「名前…? えーっと、ゆうすけ、しょういち、しんじ、たくみ、かずま、ひとし、そうじ、りょうたろう、わたる…って、ああっ!？」

「気付くのが遅すぎる気がするが、そう言うことだ」

「私達が出会った、仮面ライダーと同じ名前…!」

気付いてしまえば、これ程恐ろしいことは無い。夏海とユウスケの背中にも、冷たい物が駆け抜けた。

「ヒトシとリョウタロウだけは出会ったことが無いが、多分片方は響鬼で、もう片方がモモタロスの契約者って奴の名前だろ」

「じゃあ…次に狙われるのは…」

「『つかさ』だ…多分な」

ディケイドー1…死者の共通点（後書き）

こんばんわ。

今回はアンフェアにも程がある書き方を致しました。

そして、何となく中途半端？

＊

亡くなった方の共通項、ディケイドメンバーにも分かりやすく、今回は名前を提示。

今日まで考えていなかったので、苗字や漢字とかは全部付け焼刃です。

それに、次が「つかさ」と断言させましたが…「こうたろう」だって「だいき」だって、もっと言えば「たける」だってあり得ると言う考えに、何故至らんのだ、士達よ。

＊

名前の共通項、もう一つあります。

何気に平成ライダーの「ヒロイン」とされる方の苗字を充ててみました。

ただし、漢字は変えてあります。それに、ハナちゃん（電王）の苗字は本編では出てこなかったのですが、一応侑斗と愛理さんの子供らしいので、「桜井」を充ててみました。

だけど読めないよ、「神前」で「かんざき」は。ビバ、漢字変換。

＊

さて、迷惑な人も迷惑なブツを回収したことですし、そろそろ出会ってもらおうかと画策しています。

士の「監察医」としての立場もありますし。

＊

そんなこんなで、また次回お会い致しましょう。

連休中に更新したいなあ……

特命係―2―邂逅

亀山が特命係の部屋に到着すると、香り高い紅茶の香りと共に、それを嗜んでいる右京の姿が見えた。

毎度思うことではあるのだが、右京は一体何時に登庁しているのだろうかと思う。自分より遅く「花の里」を出ているはずなのに、いつも自分より早い時間に登庁しているように思う。

「おはようございます、右京さん」

「おはようございます」

亀山の挨拶に、軽く頭を下げて返す右京。それも、もはや日常の風景だ。

たまには右京より早く登庁してみたいと思わなくも無いが、早く来た所で、この「窓際部署」に仕事があるはずもなく、暇を持て余すだけだと思い返す。

「今日も今日とて、平和ですねー」

「結構なことじゃありませんか」

軽く伸びをしながら言った亀山の言葉に返しつつ、右京は手元のカップを置き、机の上に置いてある新聞に手を伸ばす。

これと言って大きな記事はなく、せいぜい例の「衰弱死」関連の記事が紙面を賑わせている程度だろうか。

「その病気…やっぱり、気になります…よね？」

「気になりますねえ」

そもそもこの「衰弱死」が病だと診断されたのは、最初の「被害

者」：佐渡裕輔と言う名の冒険家を診た監察医が、「怪しい点はない」と診断したからだ。

原因不明であった以上、徹底的に調査されたいのだが、原因らしきウィルスや病原菌の存在は見当たらず、直ぐに二番目の「被害者」である風溪昭市が亡くなり、更に詳しく調査したが、全くと言って良い程に共通点が見当たらなかった。

現段階で言える共通点と言えば、せいぜい昨日右京が示唆した「屋外で発見されていること」と「男性」であることくらいだ。

「そもそもこの奇妙な現象が『病気である』と判断されたのは、最初の被害者に怪しい点が無かったからです。しかし…」

「昨日も言っていましたよね、見つかった場所と職業がどうにも腑に落ちないって」

「ええ。もう一度詳しく調べてみる必要があるかもしれませんねえ…」

右京の眼鏡の奥にある瞳が、きらりと輝いたのを、亀山は見逃さなかった。

彼がこう言った表情をしたときは、大抵何らかの事件に発展することを、経験上亀山は知っている。伊達に長年の付き合いがある訳では無い。

「病」と診断されているが、右京はその診断に疑いを持っているのなら、亀山はその右京の勘にも似た考えを信じるだけだ。

「でも、遺体はとくに火葬されちゃってるんですよね？」

「しかし、昨日亡くなったバイオリニストの方…浅生渉氏の葬儀は、まだ行われていません」

「そんじゃ、行きますか、右京さん」

ぱし、と拳を掌に当て、部屋を出ようと亀山がいきりたったその

瞬間、部屋の外：組織犯罪対策五課が、急に騒がしくなった。

「な…何だ!？」

思わずその騒ぎに気圧され、亀山が声をあげた瞬間、角田が、滅多見せない渋い顔をして特命係の二人の前に立った。

「あ、課長！何かあったんすか？何か騒がしいですけど」

僅かに曇っている角田の顔を見ながら、亀山は不審そうな表情で問いかける。

部屋の外：五課の面々の喧騒も手伝って、右京の胸に嫌な物がこみ上げてきた。

そんな彼に気付いているのかいないのか、角田は軽く一つ溜息を吐くと、僅かに声の調子を落とし、深刻な口調でたった一言。

「例の病気だよ」

「はいい？」

右京の問い返しに、角田は再び溜息を吐き、今度は彼らにもわかるように、彼の知る限りの情報を口にした。

「十人目が出たんだよ、『衰弱死』の。しかも今回は交番勤務の警官だってさ」

「本当っすか!？」

「ホント、ホント。身内ってことで、今一課の連中が現場に行ってる。しかも、今までより衰弱の仕方が早かったらしいよ」

その一言に、右京と亀山は顔を見合わせ：互いに、小さく肯き合うつと、真っ直ぐに前を見据え：

「：行きましょう、亀山君」
「はい！」

無言のまま、二人は行き先を十人目の見つかった場所へと変更し、早速その現場へと向かったのであった。

警官が倒れていたと言う現場に到着した時、既にトラロープが張られており、狭い交番の中には、よく見かける顔ぶれがどこか苦しそうな顔で調査をしていた。

そんな中、入ってきた右京達に真っ先に気付いたのは、灰色のスーツを着た、垂れ目気味の男性。年齢は亀山と同じ位だろうか、彼らに気付くと眉間にきゅうっと皺を寄せ、心底嫌そうな表情を彼らに向けた。

「：おいこら亀！何で特命係のお前が、こんなトコに居やがるんだ」
「俺がここにいちや悪いんですかねえ、捜査一課の伊丹さん？」

男：警視庁捜査一課刑事、伊丹憲一の言葉に、亀山は軽口で返す。
亀山とは犬猿の仲であり、特命係を快く思っていない人物の一人である。

毎度のことながら憎々しい顔をしているのだが：何故か今日は、左の頬が、まるで殴られたように赤く腫れている様に見える。

そのせいだろうか、伊丹の表情が、いつもより余計に不機嫌そうに見えるのは。

「悪いから言っただろうが、バアカ！」
「んだとお！？」

亀山と伊丹のやり取りに気付いたのか、別の刑事：伊丹より年長の男、三浦信輔が、これまた渋い顔で右京の方に向き直り、老眼鏡をかけなおしながら言葉を放つ。

「困りますよ、警部殿」

「すぐに済みます」

このやり取りも、基本的にはいつも変わらない。

伊丹が亀山に突っかかり、三浦や、もう一人いる若い男：芹沢慶二が右京にやんわりと苦言を呈する。が、それを軽やかに無視して捜査をするのも、もはやお決まりのパターンであった。

既に事切れている制服警官に向かって手を合わせ、右京と亀山はその警官の亡骸を調べ始めた。

亡くなったのは今度も男性。

この交番に勤務する警官で、警察手帳から、「小野寺司」と言うらしい。亡くなる前の階級は巡査。見たところ、まだ二十代だろうか、若いのに残念だと言う思いが、亀山の胸に去来する。

まだまだ先の人生があっただろうに：

そんな悔しい思いを噛み締めたその時。

彼の横で、冷静な声が響いた。

「：成程な、大体分かった」

言ったのは、見たことの無い白衣の男。亡くなった巡査と同年くらいだろうか、軽く茶の入った髪に、どこか無愛想な：それでいて悔しそうな顔で、亡くなった巡査を見下ろしている。

「って、君も何で現場に入るの！？」

どうやら今まで芹沢にこの場に来る事を押さえられていたらしいが、白衣の青年は特に気にする様子も無く、遺体から視線を外すと、周囲をぐるりと見回した。

その目は、どこか睨みつけているようにも見える。

「士、刑事さんの邪魔しちゃまずいって！」
「そうですよ士君」

トラロープの向こうで、この青年の友人らしき二人の男女が、やや焦ったように声をかけているが、士と呼ばれた青年は軽く鼻を鳴らすだけで、外に出て行く気配は無い。

それどころか、交番にあるパイプ椅子を勝手に引き出し、そこにも当然のように足を組んで座ってしまう始末。

明らかに部外者であろうはずなのに、ここまで堂々と出来るのは、思わず呆れを通り越して感心してしまう。

「こちらは？」

「門矢士。監察医だ」

無愛想なその表情を崩さぬまま、監察医：門矢士と言うらしい青年は、右京の問いにそう答えると、再び視線を亡骸に戻し：

「まあ、第一発見者って奴だな」

事も無げに、さらりとそう言ったのであった。

特命係一2：邂逅（後書き）

皆様こんにちわ。

今回でようやく、土と右京さんが出会いました。

＊

しかし本当に出会っただけ。土には一体、何が分かったと言うのでしょうか。

その辺は次回もしくは次々回になりそうです。

＊

そして、「相棒」と言えばやはり「トリオ・ザ・捜一」。

伊丹さんは殴られたらしいです。

：誰にとって？それも次回分かります。多分。

＊

それでは、今回はこの辺で。

またお会い致しましょう。

ディケイドー2…新たな犠牲者

「おはよう、士」

朝、起きて。

光写真館のホールで士の視界に真っ先に入ったのは、斜に構えた1人の男性だった。

右手に大型の、水色の銃のような物を持っており、軽くその銃を上げる仕草で士を迎える。

彼の名は海東大樹、またの名を仮面ライダーディエンド。士同様、様々な世界を巡る存在だが、彼の場合士とは異なり単独で世界を巡ることができる。

何より、彼の目的は士とは大きく異なっている。

「世界を救うこと」が目的である士に対し、海東の目的は、「その世界のお宝を頂くこと」にある。自称、トレジャーハンターである。

「朝っぱらからお前の顔を見るなんて、今日は厄日らしい」
「酷いな士、僕を疫病神か何かと勘違いしていないかい？」

全く傷ついている様子も無く、海東は士の言葉をそう言って流すと、急に真面目な表情になって士の顔を見やる。

「…パーフェクターを、奪われたそうだね」

「そう言えば、お前もあれを狙ってたんだったな。ま、頑張っって奪って来い」

「士の狙っていないパーフェクターに、もう興味は無い。今の僕の狙いは…アレさ」

そう言って海東が指差したのは：背景ロールに描かれた、チェス盤だった。

「水晶で出来たチェス盤なんて、またと無いお宝さ」

軽く笑いながら海東はそう言っていると、すっと士の横を通過し、その場から立ち去ろうとする。が、すれ違い様、士はぐっと彼の腕を掴み：

「ちょっと待て、海東」

「何かな？」

「ここが何の世界か：お前、知らないか？」

士に問われ、海東は一瞬だけ黙ると：彼らしからぬ、困ったような表情を浮かべ：

「士、僕だって万能じゃない。残念ながら、僕もこの世界のことは知らないんだ。はじめてくる場所だしね」

「ちっ。いざと言う時に、使えない奴」

それだけ呟くと、士は彼の腕を放し、やれやれと言わんばかりの表情で、そのトレジャーハンターを見つめる。

海東の方は、別に士の言葉に気を悪くした様子も見せず、ひらひらと手を振りながら、今度こそ完全にその場を後にした。

「全く：あいつは一体何考えてるんだ：？」

＊

海東が出て行った、まさに刹那の差でホールに現れたユウスケと

夏海は、珍しく自分達より早くにそこにいた士を引っ張り、改めてアポロガイスト探索に出ていた。

大ショッカーが絡んでいるかもしれないこの出来事を見過ごせないと、二人はやる気満々のようである。

この日何度目かの、呆れと諦めの混じった溜息を、士がふうと吐き出した瞬間。

一瞬、ユウスケの動きが止まり…その目が、大きく見開かれた。

「士！」

「何だユウスケ、騒々しい」

「あれ…あいつ！」

うんざりしたような士の声も気に留めず、ユウスケはある一点を指差す。

その先にいるのは…自称、ディケイドにとって迷惑な存在、昨日も現れ、パーフェクターを奪った者…アポロガイストの人間態である、ガイの姿。

だが…妙な違和感がある。普段のガイは、白い服に黒い手袋、立ち居振る舞いはどこことなく紳士的なのだが、今、彼らの視線に入っているガイらしき人物は、灰色のスーツを着ており、上着を肩からかけ、だるそう…と言うか、「だるっそ」にしながら隣の若い男と歩いている。

その一歩後ろには、老眼鏡をかけた中年と壮年の間くらいの年の男性が、どこか呆れたような顔で二人を見ている。

それが、奇妙ではあるのだが、いかんせん探していた存在と同じ顔。

「アポロガイスト！」

そう認識すると同時に、ユウスケは無意識の内にガイらしきその

男に向かって駆け出し：

「おい、ユウスケ！」

士の静止も聞かず、次の瞬間にはその男の左頬を、拳で殴りつけていた。

「なっ!？」

「先輩!？」

「へ？」

殴られた男と、その隣にいた男、そしてユウスケの声が重なった。相手が本当にガイならば、今の一発は避けられたと思ったのだが：実際は鈍い音と共に、殴られた男が軽くよろめいている。

ユウスケの手にも、きつちりと自分の右ストレートが入った感触があり、信じられないと言わんばかりの表情で自分の拳とよろめいた相手を交互に見比べる。

「大丈夫ですか、先輩？」

「ってえ：いきなり何しやがる、公務執行妨害でしょっ引くぞ！」

心配そうな顔で問いかける若い男を軽く無視し、その「ガイに似た男」は殴られた頬を押さえながらも、ユウスケに向かって凄みを利かせる。

：物凄く、柄が悪い。

それだけで、この男がガイでは無いと理解できてしまうのだが：後の祭りと言うべきか、心底申し訳無さそうな顔をするユウスケを、横で士がやれやれと言わんばかりに肩をすくめた。

「：よく見る、ユウスケ。良く似た他人だ」

「す、すみません、すみません！その、知り合いに似てたものですか…」

「似てるってだけで殴りつけてくんない！」

平謝りするユウスケに、男は憤然と…と言うか、完全にユウスケの胸座を掴んで怒鳴るが、その横で、若い男が苦笑しながら、ポツリと一言。

「先輩に似てる人って…性格悪そー…」

「ああ？何か言ったか、芹沢？」

「いえ、何も」

若い男…芹沢と言うらしい…は、凄まれながらも、どこかにやついた表情でふいとそっぽを向いた。

どことなく、笑いを堪えているようにも見えるのは、夏海の気のせいだろうか。

「おい伊丹、どうしても良いが、そのままじゃ腫れるぞ」

老眼鏡の男性が、ガイに似た男、伊丹にそう声をかけつつ、どこから用意したのか、濡れたハンカチを渡してやる。

それをひったくるように受け取りながら、伊丹は自分の左頬を押さえた。相当に痛かったのか、僅かに顔を顰める。

「とにかく、丁度近くに交番がある。テメエらに事情聴取してやるから、ありがたく受ける！」

「だ、そうだ。良い経験になるんじゃないか、ユウスケ」

「土…お前、俺を売るのかよお！」

「売るも何も、俺の制止を聞かなかったお前が悪い」

ユウスケの苦情など何のその。

言うが早いか、目と鼻の先にある交番へ向かって、伊丹はユウスケの腕を引っつかんでズンズンと歩き出す上、その先導をするように、士も我先にと交番へと向かう。

そして、交番に入った瞬間。士はその入り口で倒れている、一人の警官を見つけてしまった。

「何立ち止まって…ああっ!？」

急に止まった士を不審に思ったのか、伊丹が彼の後ろから覗き込むようにして…同じ物を、見つける。

一見すると、眠っているように見える。だが…その呼吸は弱く、今にも止まりそうな雰囲気。

「ナツミカン、救急車を呼べ！」

「は、はい！」

士の指示に、夏海は大きく頷き、持っていた携帯電話で救急車を呼ぶ。その間、士とユウスケは倒れている男に声をかけつつ、応急処置を施す。

だが…警官の呼吸はどんどん弱くなっていき、鼓動の間隔も徐々に長くなっていく。

「おい、これって最近流行ってる衰弱死じゃないのか!？」

老眼鏡の男が、慄いた様に呟く。その瞬間…警官の鼓動が、止まった。

「士君、今救急車が…」

「もう遅い」

がくりと項垂れながら、士は小さく夏海に言葉を返す。ユウスケや、伊丹達三人も、悔しそうにその拳を握り締めている。

そんな中、士は気付いた。警官の首にある、小さな傷跡と、その脇に書かれた、大ショッカーのマークに：

ディケイドー2…新たな犠牲者（後書き）

こんにちわ。

今回はディケイドの2、別名「トリオ・ザ・捜一との邂逅」をお送りいたしました。

：伊丹さんを殴ったのは、ユウスケでした。

＊

そして、ちょっとだけ海東登場。

彼の狙いは、とりあえず右京さんのチェス盤です。

＊

海東も何でも知っている訳では無いと思うので、この世界がどこなのか、分かっていると言いう設定を設けてみました。

どこの世界へ行っても、「この世界だ」と分かっている上に、標的まで定める彼ですが、今回は「ここはどこか分からないけど、お宝は頂く」つもりだそうです。

＊

この話があって、前回の相棒ー2に繋がる訳ですが：はてさて、右京さんは士が気付いた「大ショッカーのマーク」に気付くでしょうか。

＊

そんなこんなで、今回は相棒サイド。

右京さんに頑張って頂きましょう。

それではまた次回。

特命係一3：被害者

「門矢士、監察医だ。まあ、第一発見者って奴だな」

軽い口調でそう言った門矢と言う青年に、軽く右京は首肯し：

「成程。警視庁特命係の、杉下と申します」

「亀山です」

自分の警察手帳を見せつつ、二人はその第一発見者に一礼すると、右京は不思議そうな表情で門矢に向かって言葉を放つ。

「監察医にしては、随分とお若くていらっしゃる」

「：だろうな。だが、監察医ってのが、ここでの俺の役割らしい。それは紛れもない事実だろ」

右京の言葉に、門矢はついと目を反らして、あっさりと彼の言葉を肯定した。

その様子は、本人自体も、監察医と言う立場にあることを疑問に思っているように、亀山には見えた。

都内の監察医は、知事によって任命された医者のことであるのだが：門矢は、普通の医者としても、若すぎるような印象がある。

まして、他人の死因を詳しく調べる「監察医」の肩書きを持つ者ともなると、それなりの経験が必要となる。必然的に、年齢もそれなりに必要になってくるのだが：目の前の「監察医」は、どう見ても20代前半くらいにしか見えない。

右京で無くとも、不自然に思うのは当然であろう。

彼の言う、「ここでの役割」という言葉が引っかかるが：それより先に、聞かねばならないことがあった。

「…成程。ところで、先程『大体分かった』と仰ってましたが、何が『大体分かった』のでしょうか？」

「この男の死因だ。衰弱死…に見せかけた薬物中毒だな。何を使っただのかは詳しく調べてみる必要があるだろうが」

「へ？」

「よく見ろ。首筋に薄くだが、傷痕が残ってる」

訝る亀山に、門矢はすっと人差し指を、無くなった巡査の首筋に向ける。

それにつられるように、二人は…ついでに後ろで聞いていた伊丹達も…その指の先を注視し、気付いた。

門矢の言う通り、首筋には、薄くだが赤い傷痕…もつと言ってしまえば、注射痕のような、何かに刺された痕が残っていた。

よく見なければ気付かない程度の物だが、あると分ければ気にかかって仕方の無いもの。

「それじゃあひょっとして、最近の原因不明の衰弱死も…殺し？」

「……その可能性が、格段に上がりました」

屈めていた体を起こし、右京と亀山は真剣な表情で互いに頷きあう。

九人目の被害者である浅生渉の亡骸を確認しなければ分からないが、もしも同じ様な傷痕があったならば、一連の衰弱死は、連続殺人事件に発展する可能性が、格段に跳ね上がるのだ。

互いにそう考えたのか、二人はその場を後にしようとして…ふと、右京の視界の端に、何かが映った。

「右京さん？」

立ち止まった右京を不思議に思ったらしい。車に向かおうとしていた亀山が振り返り、きょんとした顔で右京の視線を辿る。

「亀山君」

「はい？」

「このマーク、君は分かりますか？」

「マーク…？ああ、ひょっとして、これですか？」

そう言って亀山指し示した先にあるのは、双頭の鷲と地球をモチーフにした正体不明のマーク。

地球の部分には、「DCD」と描かれており、それを鷲の尾羽らしきものが刺し貫いているようにも見える。少なくとも、良い意味があるようには見えなかった。

まして、遺体の脇に描かれているのだ。なおのこと不吉な印象を抱かせる。

「『赤いカナリヤ』…じゃないですよね？」

「亀山君には、これがカナリヤに見えますか？」

「…見えません」

鳥と言えば、国際的な過激派テロリスト、「赤いカナリヤ」の名前が浮かぶのだが、右京の言う通り描かれているマークは彼らの旗印である「カナリヤ」ではなく、鷲や鷹と言った猛禽類。

どう頑張っても、カナリヤのような可愛らしい鳥には見えない。

「気になりますか？」

「気になりますねえ」

あっさりと頷かれ、亀山は大げさな仕草で呆れたように肩を落とす。

今までの被害者の傷痕より、そのマークの方が重要ですかね？

思わず、そう口に出して言いそうになるのを押し止め、亀山はマークを見ながらその場に立ち尽くしてしまった自分の上司に、どこか呆れたような視線を送る。

「警部殿、そろそろ」

そんな亀山に助け舟を出したのは、渋面の三浦。

勿論、彼に亀山を助ける気など無く、さっさと特命係の二人を追い出したいだけなのだろうが…今は、その言葉が、亀山にはありがたかった。

「…失礼。ああ、一つだけ」

「聴取なら後にして下さいませんかねえ、警部殿」

この上なく嫌そうな伊丹の言葉をもさらりと流し、右京は視線をマークから、未だにパイプ椅子にふんぞり返る門矢に移し、問いかける。

「門矢先生、こちらのマーク、ご存知ありませんか？」

「…何で俺に聞く？」

「形式的な質問ですので、お気を悪くされたのなら、申し訳ない」

「この人、細かいことが気になっちゃう癖があるもんで」

どこことなく不機嫌そうな門矢に深々と頭を下げて言う右京と、それをフォローする亀山。

そんな二人を見て、門矢は何を思ったのか。どこか慥然とした表情で右京の指したマークに視線を向けるが、すぐにそこから目を反らし…

「……さあな」

とだけ答えた。

その返答に満足げに頷くと、右京は再び頭を下げると、亀山を引き連れてその場を後にした。

＊

何の問題も無く、右京と亀山は九人目の被害者であるバイオリニストの遺体を確認させてもらえることとなった。

たった一人の遺族である義理の弟君も、詳しい死因を知ることができるのなら、と快く承諾してくれたのだ。

「兄の死因が、本当に病だと言うなら、それも仕方ないと思うんです。だけど、今の『原因不明』というのは納得できない」

悔しそうにそう言った彼…確か名は牙宰…^{きざいかい}に篤く礼を言って、二人はその亡骸を…特に首筋近辺をそつと見やった。

そして…右京の読みは、正しかったらしい。この被害者の首にも、小さな、赤い傷痕がうっすらと残っていた。

協力に感謝し、二人が浅生邸を後にすると…亀山はこらえ切れないように、言葉を紡いだ。

「右京さん、やっぱりこれ、連続殺人ですよ！」

「そのようですね」

「畜生…十人も殺されるまで気付かなかったなんて……！」

ガシガシと後頭を悔しげに掻き毟りながら、亀山は苛立ったような声でぼやく。

そんな亀山とは対照的に、右京は静かに…だが、それでも密かな

悔しさを声に滲ませながら、彼の考えを口にした。

「しかし、あのような傷痕…素人ならともかく、監察医の方が見逃すでしょうかねえ？」

「…うーん…実際、門矢先生は気付いていましたし」

「ええ。先程も言いましたが、そもそもこの奇妙な死が『病気である』と判断されたのは、最初の被害者に怪しい点が無いと診断されたからです」

宙を睨みつけながら、右京は人差し指を立てつつ、まるで教師か何かのようにそう説明しだす。

彼の言いたいことが、亀山にも漠然とだが見えてきた。

…右京は疑っているのだ。最初の被害者を診た、「監察医」を。

ならば、次に右京が向かおうとしている場所は…最初の被害者を診た監察医のいる場所。

そこに向かおう、そう、亀山が言いかけたその瞬間。男性の悲鳴が、今出てきた家から響いた。

「今の声は…!？」

声の主など、この状況下では一人。今さっき会って来た、人物で、九人目の被害者の、たった一人の遺族…牙宰氏しかない。

慌てて右京と亀山は出たばかりの家へと戻るが…そこにいたのは、亡骸の横に倒れ、衰弱しきった男性の姿があった。

しかしその体のどこにも…傷痕は、無かったのである。

特命係一3：被害者（後書き）

こんばんわ。新システム移行に伴い、なにやら使い方に違和感を覚えてる秋月です。

＊

さて、相棒サイドの3番目ともなると、そろそろ犯人像が見えてくる頃です。

亡骸に残った注射痕、そして脇に描かれていた双頭の鷲（鷹？）のマーク。

それらが指し示す物とは一体：

＊

とは言え、十一人目の被害者が出ました。

ただ：この方の名前、苗字を考えるのが億劫になったので、そのままです。

そうなると次の被害者は：

＊

今回はディケイドサイド。

ようやくバトルになりそうな雰囲気なので、バトル描写まで行けたら良いなあ…。

＊

それでは、また次回お会い致しましょう。

ディケイドー3…アポロガイスト

『…疲れた』

散々伊丹、芹沢、そして老眼鏡の男…三浦の三人から、こつてりと絞られたユウスケと、第一発見者であるが故に執拗に状況を聞かれた士は、警視庁から出てくるや否や、同時に吐き出すようにそう呟いた。

「長かったですね」

「ああ。どうやらこの世界の警察は、あの注射痕に気付いてなかったらしい」

「内部じゃ、連続殺人か、今回は見せかけの殺人かで揉めているみたい」

お陰でこの程度ですんだんだけど、と言いながら、ユウスケはもう一度深い溜息を吐いた。

自業自得とは言え、アポロガイストと同じ顔をした男に、凄く…物凄くネチネチと嫌味と小言と僻みを言われ、精神的に参っているのだ。

「でもまさか、あの三人が捜査一課の人達だとは思わなかったよな、士」

「ああ…まあな」

「心ここにあらずですね。何か、気になることでもあるんですか、士君？」

士が、何か真剣に考え込んでいたことに気づいたらしく、夏海は心配そうにそう問いかける。

彼がこんな顔をするのは、往々にして落ち込んでいる時だ。自分が「世界の破壊者」だと、そう言っている時。

だが、夏海はそうは思っていない。彼はむしろ、世界を守る者だとさえ考えている。だからこそ、彼を「破壊者」と呼ぶ存在……鳴滝と名乗る眼鏡の男性や、アポロガイストと言った大ショッカー幹部連中のことを、夏海はあまり好ましく思っていなかった。

「アポロガイストの奴が言ってただろ。この世界で変身することが迷惑な行為だって」

「ああ、そう言えば」

「でもそれは、私達の油断を誘うための嘘じゃないんですか？」

「かもな。だが……何故か引っかかる」

軽く眉を顰めながら、士は宙を睨みつけて考え込む。

きつと、真剣に思い悩んでいるのだろう。士は一人で抱え込む癖があるから。偽悪的で、口は悪いが、何よりも他人の……自分の仲間のことを第一に考える人だから。

夏海はそう思い、彼の名を呼ぼうと口を開きかけた瞬間。士はやおら彼女を見やり……

「大体、何故この俺が取調べを受けて、凶悪極まりない柑橘人類のナツミカンが逮捕されない？不公平だろう。この世界の警察は見る目がなさ過ぎる」

「……………光家秘伝、笑いのツボ！」

怒り混じりの夏海の声が響くと同時に、彼女は親指を士の首筋に突き立てる。ほんの一瞬だけ士は痛そうに顔を歪めたが……次の瞬間には、強制的な笑い声を上げさせられていた。

「なっ!?!…ははっ、あっはっはっはっはっは! ナツミカン! テメ

っ…ハハハハっ…こんなトコで、ハーハハハハハ」

「心配して損しました!」

ぶんすかと言う擬音が似合いそうなまでに頬を膨らませ、憤然と怒る夏海に、笑いと抗議の声を同時に上げる士。そしてそれを可哀想な人でも見るかのような、哀れみの視線を送るユウスケ。

そんな、彼らにとってはいつもの光景に、待ち行く人々は奇異な視線を送っていた。

＊

士の笑いもようやく収まった頃、三人は閑静な住宅街に来ていた。特に目的があって来た訳ではない。ただ何となく、足が向いたので来たと言うだけである。

「何か、やけに静かだな…」

不審そうに呟くユウスケに同意するように、夏海も薄ら寒そうな表情で頷く。唯一士だけは、笑い疲れたのかげっそりとした表情を浮かべていたが。

そんな、不自然なほどに静かな街を、しばらく歩いていたその時。周囲に、男性の悲鳴が轟いた。

「な、何だ!？」

「今の…あっちの方から聞こえましたけど…」

いきなりの悲鳴に戸惑いながらも、士とユウスケは夏海の指し示した方向へと駆け出す。妙な胸騒ぎがする。何か、とんでもないことが起こっているような…そんな予感が、士の胸の内を占めかけた刹那。

彼らの眼前に立ち塞がったのは、白いスーツを着た男性。今度こそ、真正正銘のガイ：アポロガイストその人だった。

「まさか、さっきの悲鳴は！」

「その通り。パーフェクターを返してもらったので、命の炎を奪ってやったのだ」

口の端に歪んだ笑みを浮かべ、ガイはユウスケの問いに、予想通りの答えを堂々と返した。

「フッフ：これからも私は、迷惑な存在であり、この迷惑な殺人を繰り返す。だが…」

高らかに宣言しながら、しかし士を見るガイの瞳に、ゆらりと憎悪の炎が揺れているのを、夏海は見た。

あの男は、士をここで潰す気なのだ、はっきりと分かってしまいう程、その男のまとう空気は邪悪であり、逃げ出したい衝動に駆られてしまう。

ひよっとしたら、この男にかつて、命の炎を奪われたことがトラウマになっているのかもしれない。

「ディケイド。私にとって迷惑な存在であるお前は、ここで消えてもらう。アポロ・チェンジ！」

ガイの言葉に反応するように、彼の身をぶわりと紫色の何かが覆う。

それが徐々に形を成し、ガイの姿を、太陽のような形の赤い兜、黒い服に白いマントを身に纏った怪人態、アポロガイストへと変化した。

背中に回された両手には、左に太陽を思わせる形の盾が、右に細

身の剣がそれぞれ握られている。

「悪いが、それはこっちの台詞だ。……変身！」

— K A M E N R I D E — D E C A D E —

士は一瞬だけ迷ったような仕草を見せた物の、すぐに真っ直ぐに相手を見つめて、ピンク色の縁取りのカードをベルトに差し込む。同時に電子音が響き渡り、いくつかの虚像が重なり合い、黒とピンク：公式にはマゼンダと呼ばれる色の、鎧のようなものを形成する。仮面には七本の黒い縦模様と緑色に光る目、ボディには黒に白い縁取りで、「X」にも「十」にも見えるラインが、左肩から右脇にかけて描かれている。ディケイドと呼ばれる仮面ライダーに、士はまさに「変身」した。

「フン。世界の迷惑を考えない奴め！」

「それはお前の方だろ！」

言いながら、ディケイドは腰にある、ライドブッカーをソードモードと呼ばれる、剣状の武器にしてアポロガイストに向かって、先手必勝と言わんばかりに斬りつける。

が、相手はそれを軽く剣で受け流し、体勢を崩したディケイドに向かって返す刀で一閃する。

しかしその攻撃を読んでいたのか、ディケイドは間一髪、その剣を回避すると、今度は軽く距離をとって、ライドブッカーを銃形態の武器、ガンモードに変形させてその弾丸を放つものの、それも僅かな差でアポロガイストの盾によって防がれてしまう。

：まさに、一進一退の攻防。一連の流れの後、動けないと互いに分かっているのか、場はそのまま膠着してしまった。

「お前の目的は何だ？この世界は、一体…」

「それを教えてやる程度には、私はお人よしなのだ。この世界での目的は…食いだめ、だ」

「はぁ？」

何と言うか…意外なアポロガイストの解答に、思わず素っ頓狂な声を上げるディケイド。

そこに隙が出来た。アポロガイストは兜の下でにんまりと笑うと、一気にディケイドとの間合いを詰め、その腹部を横薙ぎに薙ぎ払う。

「ぐがっ……！」

打撃に近いその斬撃に、ディケイドは吹き飛ばされ、近くの家の壁に派手にぶつかる。その口からは肺に残っていた空気と共に、悲鳴じみた声が吐き出された。案外とその一撃のダメージが大きかったのか、それとも打ち所が悪かったのか、ディケイドの変身は解かれてしまう。

そんな土をおかしそうに眺めながら、アポロガイストがゆっくりと彼に近付き、止めを刺すべくその剣を振り上げた、その瞬間。

「こっちです右京さん！派手な音がした方向！」

近くから、声がした。しかも、こちらに向かってくるような、複数の足音と共に。

「……今この世界の人間に邪魔されては厄介なのだ…命拾いしたな、ディケイド」

忌々しげにそう言うと、アポロガイストは再び銀の幕の中へとその姿を消してしまった。

「くそ…待て！」

必死に手を伸ばすが、既に銀の幕は無く、追いつくことの出来ない場所への逃亡を許してしまう。

それを見ると、士は悔しそうにアスファルトに拳を叩きつけ、相手の消えた方向を黙って睨みつけた。

「士、大丈夫か？」

「ああ…何とかな」

心配そうなユウスケに答え、立ち上がったその刹那、近付いてくる足音の主達が、その姿を見せた。

「あれ…門矢先生…？」

ポカンとした表情でそう呟いたのは、先程出会ったカーキ色のジャンパーを着た刑事…確か、亀山と言う名だったか。

そしてその後ろには、亀山よりも小柄な、知的な雰囲気を持つ眼鏡の刑事…杉下の姿も。

「何やら、事情がありそうですねえ」

周囲の荒れ具合と、士の辛そうな表情から何かを察したのか、杉下はそれだけ言うのと冷静な視線を周囲に向けたのであった。

ディケイドー3…アポロガイスト（後書き）

こんにちわ。今回はようやくバトルが（ちょっとだけ）入りました。

＊

しかし本当に今回はあっさりで終わりました。

：「な〜んかディケイド、今回は情けないわね〜」（キバーラ口調）
とか思われてたら申し訳ございません。

そもそも、何故傍観しているんだ、ユウスケよ……

＊

そしてラストに、亀山&右京さん登場。

アポロガイストとのニアミスです。惜しい、あと一寸だったのに。

それに、土の变身も見えていませんしね。まだまだ現実的な考え方から抜け出せそうにないかもしれません。

＊

さて、次回はやっぱり相棒サイド。

はてさて、どうなることやら。

海東もどこに消えたのか…近日公開いたします。

＊

それでは、次回またお会い致しましょう。

本日はこれにて失礼致します。

特命係一4：目撃者

牙幸と言う名のバイオリニストを救急車に乗せ、犯人を捜すために見送った瞬間、何やら鈍い…まるで、建物に鉄球でもぶつけた様な音が、二人の耳に届いた。

「何だ、今の音……」

あまりに派手な音に軽く身を竦ませ、恐る恐る亀山は音のした方向を見やる。

どこかで解体工事でもしているのか？ いや、それならばどこかにクレーン車のアームの様な物が見えるはずだ。しかしそれがない。

…と、なると誰かが車に轢かれたか？

右京と亀山、ほぼ同時にその考えに至ったらしい。慌てて二人とも音のした方へと駆け出していく。

「こっちです右京さん！ 派手な音がした方向！」

指差しながら先陣を切る亀山を追いつつ、右京は今の音について考えてみる。

…もしも本当に交通事故なら、ブレーキ音のようなものが聞こえたはずだ。しかし、今回はそれが聞こえなかった。

少なくとも、何か硬い物に、派手にぶつかった様な音であったことは確か。では、喧嘩の類か？ それにしては、音は派手すぎた気がする。

では、一体何が…不審に思いながらも、音のした場所…人気の無い、空き家と思しき家の前に到着する。そこで彼の視界に入ったのは…友人と思しき男性に支えられながら、よろよろと傷だらけの姿で立ち上がる、門矢の姿だった。

「あれ：門矢先生：？」

亀山の声に振り返った彼の口の端からは、僅かに血が滲んでいる。喧嘩でもしたのかと思うのだが：それにしても、どうも周囲が荒れすぎている。門矢以外にいる青年と少女の醸し出す雰囲気も、どこかギスギスしているように思えた。

「何やら、事情がありそうですねえ」

この状況を説明できるのは、目の前にいる三人くらいのものだろう。

そう思い、右京はゆっくりと門矢に近付く。

「この状況、ご説明頂けますか、門矢先生？」

「その前に、こっちの質問に答えろ」

「はい？」

口元の血をぐいと拭いながらも、門矢は不遜な態度を崩さず、真っ直ぐに右京を見つめ、問いかける。

「俺達はさっき、この辺りで男の悲鳴を聞いた。：何があった？」

暗に、自分のことよりもまず事件のこと、と言っているのだろう。

彼の目は、その年にしては様々な修羅場をくぐってきたような、強い意志のようなものを感じられる。

その意志に気圧されたのか、亀山は軽くポケットに手をつ突っ込みながら、どこか悔しそうに言葉を紡いだ。

「それが：さっき、今回の事件の十一人目が出たんです。それも今

度は、本当に原因不明」

「つまり、注射痕が無かったってことか」

軽く溜息を吐きながら、門矢は亀山の言わんとしていることをあつさりと理解したらしい言葉を放つ。

しかしその言葉に、特に意外そうな色は見えない。むしろ、無いことを知っていたかのような印象すら受ける。

「改めて。門矢先生。この状況をご説明頂けますかねえ？」

「：そうだな、俺達はその十一人目を襲った犯人と遭遇、格闘した
が逃げられたってトコだ」

他の二人の態度や、門矢の挙動から考えると、それは嘘では無さそう
だ。真実の全てを語っているとも思えないが。

しかし：ただ格闘をしただけで、ブロック塀が砕けたり、道路が
一部陥没していたり：街路樹に、銃弾のような焦げ痕が残ったりす
る物だろうか。

しかも、門矢はたった今、相手を「犯人」と断定している。と、
言うことは：彼らはその犯人を、知っているということだ。

それも恐らく、以前から。

「犯人の顔、見たんですよね？」

「まあな。あの伊丹とかいう迷惑な刑事に良く似た、迷惑な奴だ」

「……士、伊丹さんは、迷惑な人じゃないから」

亀山の問いにあつさりと応えた門矢に、横にいた青年が苦笑しな
がら突っ込む。

だが、正直：亀山にすれば、その通りだと、門矢の言葉に思わず
納得できてしまう。伊丹がいなければ解決できない事件もあったが、
圧倒的に伊丹の存在が迷惑であることの方が多い。

それと良く似た顔だと言うのだから、さぞかし厭味つたらしい目でこっちを見てくるわ、ことある毎に突っかかってくるわ、人の顔見るなり「特命係の亀山あゝ」と嫌っそんな顔と声でガン飛ばしてくるのだろう。

「あぁっ何か想像しただけで腹立ってきた…！」

「亀山君、君が何を想像したのかは、大体予想できますが、その想像はどうかと思いますよ？」

やんわりと右京に窘められても、亀山はその考えを改める気はない。

はっきり言って、伊丹はかなり迷惑な存在だと思う。

…今回の犯人とやらも、同じ性格なのかはさて置いて。

「ところで、先程から気になっていたのですが」

「何だ？」

「そちらのお二人は、先程現場にもいらっしゃいましたが…門矢先生の助手の方で？」

右京のその問いに…三者三様の、微妙な顔が帰ってきた。

門矢は心底つまらなそうな、女性の方は心外と言わんばかりに首を横に振り、青年の方は嬉しそうな顔でこくこくと頷いている。

「何で俺が、こんな凶悪柑橘人類と能天気馬鹿を助手にしなきゃならないんだ…」

「…土、夏海ちゃんに対するその表現、気に入ってるのか？」

「その前に、ユウスケは自分が『能天気馬鹿』って言われたことに突っ込むべきです」

「…で？結局お二人は？」

「ああ、俺は小野寺ユウスケって言います。士の助手です。自主的

に、ですけど」

「私は、光夏海です。：土君が家に下宿してるんで、逃げないように見張ってるだけですから！」

亀山の問いに、爽やかな笑顔で返す小野寺と、どこか困ったように顔を顰めて言った光。どちらも自己紹介からすると、正式な門矢の助手、と言う訳では無いらしい。仲のいい友人といった所だろうか。

どこことなく、微笑ましい印象を、亀山は抱いた。

「しかし、いいのか？ あんたらは捜査本部とやらに行かなくて」

「俺達、特命係っすから」

「『特に命令が無い限り何もしない』。それが僕達です」

「今は、特に命令がある訳でもないんで、俺達は自主的に、調べている所なんです」

門矢の質問に、二人が軽く笑って答えた、その刹那。右京の携帯に着信を告げる特有の振動が響く。

「失礼。：杉下です。：：：ええ。分かりました。そのように」

「今の、誰っすか？」

「刑事部長から、戻って来いと言われてしまいました」

「『命令』が下った訳だ」

「そうなりますねえ」

右京の言葉に、軽く鼻で笑いながら言った門矢に、こちらも軽くそう返し：どこか名残惜しそうな表情で、その場を立ち去った。

：戻った彼らに、内村刑事部長から、「余計な真似はするな」と釘を刺されたのは、言うまでもない：

＊

「いらっしやい」

「どうも、たまきさん」

もやもやした気分を抱えながら、いつも通り右京と亀山は小料理屋「花の里」の暖簾をくぐると、そこには楽しそうな笑顔のたまきと、アルコールで僅かに上気した顔の美和子が談笑していた。

「随分と楽しそうですが、一体何のお話をなさっていたんです？」

「美和子さんが今日、面白い人達を見かけたんですって」

右京の問いに銚子とお猪口を用意しながら、たまきは温和な笑みのまま穏やかに答える。

その言葉を継ぐように、美和子は大きく首を縦に振って：

「若い男女三人組なんだけどさ、深刻そうな話を、白衣着た男の方が茶化したらしくって」

「三角関係のもつれか？よくある話じゃねえか」

「薫ちゃん、人の話は最後まで聞きたまえ。その茶化された方の女の子が、こう…ぶすつとその男の首を指で押したんだ」

言いながら、美和子は隣に座る自分の旦那の首の横あたりに、親指をぶすりと押し入れる。

予想していなかった彼女の行動に、亀山も対処し切れなかったのだろう。なされるまま、首をぐいぐいと親指で押される。

「いででででででっ！美和子、お前、人で実演すんなって！普通に痛かったぞ、今の」

「…そう！普通はそういう反応返すでしょ。ところが白衣の男は違

「つたんだなあ…」

「と、言うと？」

「…何と、大笑いを始めちゃったんです」

「…はいいい？」

不思議そうに小首を傾げ、彼の口癖とも言える台詞を右京が吐き出したその瞬間。

「花の里」の入り口から、聞き覚えのある女性の声が高らかに響いた。

「光家秘伝、笑いのツボ！」

「ちょっ、まっ……ハハハハ、あっははははははっ、は、ははっ。
な、ナツミカン、またっ…ハハハハハハハ！」

「……すみません。騒がしくて」

「そうそう、丁度こんな感じ…って、あら？」

女性に首筋を押され、大笑いする男に、それをフォローするかの
ごとく、もう一人の男が頭を下げている。

その様子に見覚えがあったのか、美和子の方は軽くぽんと手を叩
くと…それが、彼女が昼間に見た「三人組」だと気付いたのか、き
よんとした顔で彼らを見やった。

そしてそれは、右京と亀山も同じ。何しろ入って来た、馬鹿笑いを
上げている…と言うか上げさせられているのは、昼間別れたばかり
の門矢士、小野寺ユウスケ、光夏海の三人だったのだから。

「ハハハハ、は、は…はあ。いい加減にしろナツミカン、本気で皮
むくぞ！一日二回は死ねるわ！って言うか、お前がやると爪が刺さ
って痛いんだよ！一種の凶器だぞ、それ！」

「あ…それは納得…」

「ユウスケ？」

「何でもないです、ハイ」

光に睨まれ、沈黙する小野寺。

その様子を、右京はただ、驚いたように、お猪口を持ったまま見
つめていた。

特命係―4―目撃者（後書き）

こんばんわ。

世の中台風で学校が休みだそうです、それも多分高校まで。僕の年齢になると、どうやら台風如きでは休ませてもらえそうにありません。

分かってはいましたが。

＊

さて、前回の反省も虚しく、今回もまた微妙なシーンで終了。しかも、自分に課していた枷である、「ワード文書四枚以内」がとうとう破られました。

：「花の里」のシーンを削るべきだったか…？

＊

しかし、僕個人として、どうしてもディケイドメンバーに「花の里」に現れて欲しかったので、来てもらいました。

理由は次回のディケイドサイドで。

実に下らない理由です。

＊

そして、名前だけは出てきました内村刑事部長。

一体どこから特命係が動いていることがわかったか…

一応きちんと理由はありますので、ご心配なく。

＊

それでは、次回またお会い致しましょう。

ディケイドー4…花の里

杉下、亀山の両刑事が警視庁に戻っていたのを確認すると、土もまた、写真館へ帰るべくスタスタと歩いていく。

そんな彼の後を追うように、ユウスケと夏海も歩き出す。

恐らく、あの二人が来た時点で、被害者：牙宰とやらは、病院へ運ばれていると考えるべきだろう。アポロガイストも逃げてしまっ
たし、手がかりが無い以上ここにいる意味は無い。

「なあ、土」

「何だ？」

「今回の…アポロガイストの被害にあった人の名前、『きば・つかさ』って言うんだよな」

「らしいな」

どこか考え込むような表情で言うユウスケに、特に何の感情も無い…いつも通りの無愛想な表情で土は言葉を返す。

それに慣れているのか、返された方は、特に気にした様子も無く言葉を続ける。

「今までの感じから行くと、十一人目は『だいき』か『たける』…あるいは『こうたろう』じゃないかって思ったんだけど…」

「それもそうですね…今度はまた『つかさ』って名前の人でした」

今まで予想していたのは、順番こそ違えど「出会ってきた仮面ライダーの名前」と言うルールがあった。

ところが…十人目、そして十一人目は同じ「つかさ」と言う名。

十人目の「小野寺司」に残っていた注射痕などを考えると、この事件、「犯人はアポロガイストの他に、もう一人いる」と考えた方

が妥当だろう。

アポロガイストが注射器を持って、人間をこっそり刺す所など、あまり想像できないし、そうする理由も見当たらない。

と、なると…十人目の被害者の脇に残っていた、大シヨツカーのマークから考えて、その「もう一人」も大シヨツカーの構成員である可能性が高い。

そして、今回の牙。アポロガイストに襲われたのが確定しているため、その脇にも大シヨツカーのマークがあるかもしれない。

…何しろ、大シヨツカーはかなり…目立ちたがりな印象がある。

「もしも大シヨツカーのマークがあれば…あっちの、デカイ亀とか言う方はともかく、杉何とかって奴は気付いてるはずだ」

「亀山さんと、杉下さんな」

「時々、土君は本当に人の名前を覚える気があるのかと、疑いたくなります」

二人に呆れられつつも、土は軽く聞き流して歩を進める。

そんな軽口を叩きながら、何だかんだで写真館の前に到着したのは良かったが…その扉には、一枚の張り紙がしてあった。

「何だ、それ？」

「…爺さんからか。『しばらく仮装パーティーに行ってきます。キバーラちゃんも野暮用らしいので、今日は誰もいません。栄次郎』」

紙を手に取り、読み上げる土の顔が、徐々に陰しくなっていくのが分かる。

鍵はきっちりかけられており、残念なことに夏海も合鍵は持ち歩いている。

…土の旅に付き合うようになってからと言うものの、何かにつけて爆発やら怪物による襲撃やらで走り回ることが多くなったため、鍵

を落とすと思ったからなのだが：それが、仇になった。

これでは、写真館に入れない。

「しょうがない、どこかで時間を潰すか」

「どこかって、どこでだよ」

士の提案は妥当な所なのだが、写真館のあるこの街は、所謂「飲み屋街」に近い。士達の様な二十歳そこその若者がぶらつくには、少々静か過ぎる。

それに：あまり、酒を飲むことが無いので、正直、その辺りの店に入っても、時間を潰せるかどうか：

そんな風に士とユウスケが考えている一方で、いつの間にか夏海は隣：「花の里」と言う名の小料理屋の前に立ち、今にも暖簾をくぐろうとしていた。

「って夏海ちゃん！？そこ、呑み屋さんだけど！？」

「けど、お隣さんです。事情を話せば、一晩くらい泊めて貰えると思います」

「とか何とか言いながら、ナツミカンのことだ、光家秘伝でも使って強制的に泊めさせる気なんだろ」

士のその言葉に、むっとしたらしい。

一瞬、夏海の顔が軽く歪み、次の瞬間、彼女は士の襟首を掴んで彼を思い切り引き寄せると：問答無用と言うように、がらりと店の引き戸を開け：

「光家秘伝、笑いのツボ！」

「ちよっ、まっ……」

店内に入るように押されると同時に、士の首に夏海の必殺技が炸

裂。抵抗も虚しく、彼は崩れ落ちるように笑い転げ、店内の一番近い席にもたれかかる。

「ハハハハ、あっははははははっ、は、ははっ。な、ナツミカン、またっ：ハハハハハハハ！」

「……すみません。騒がしくして」

仕方ないと言わんばかりの表情でユウスケが謝ると、女将らしき女性と先客らしき三人の男女は、呆氣に取られたようにこちらを見ていた。

その内の男二人に、ユウスケは見覚えがあった。それもそうだろう。昼間も会った顔：杉下と、亀山の二人なのだから。

「ハハハハ、は、は：はあ。いい加減にしろナツミカン、本気で皮むくぞ！一日二回は死ねるわ！って言うか、お前がやると爪が刺さって痛いんだよ！一種の凶器だぞ、それ！」

「あー：それは納得……」

「ユウスケ？」

「何でもないです、ハイ」

夏海にギロリと睨まれ、ユウスケは思わず一步後ずさる。それは、彼女の眼力故なのか、それとも彼女が用意した笑いを生み出す親指への恐怖からなのかは、微妙な所だが。

「おやおや。門矢先生じゃありませんか」

「何で、ここに？」

杉下、亀山の順に声をかけられ、ようやく夏海と士もこの二人に気付いたらしい。

夏海は恥ずかしげに、士はあからさまに不機嫌そうな表情で立ち

上がりながら、軽く一つ溜息を吐いた。

一日に三回。同じ人間と会う回数としては、偶然では済まされない。余程の縁が無ければ、こうはならないはずだ。

…ひょっとすると、こいつらがこの世界の仮面ライダーか？

ふとそんな考えが過ぎるが…どこことなく、違う気がする。杉下も亀山も、「仮面ライダー」と呼ぶにはあまりそれ相応の…命のやり取りじみた経験があるとは思えない。警察官である以上、それなりの修羅場をくぐっては来ているかもしれないが、それでも「それなり」だと思う。

そんな土の考えとは他所に、夏海は何気に自分が置かれている状況を説明しだした。

「私の家、隣なんです。」

「お隣と言うと、確か、『光写真館』でしたか。昨日、店主と仰る方が引越し蕎麦を持ってきて下さっていましたねえ」

「それ、うちのお祖父ちゃんです。それで、その…お祖父ちゃんが鍵を持ったまま出かけたみたいで…」

「入れなくなっちゃった？」

ぽんと手を打って言った亀山の台詞に、夏海は申し訳無さそうにこくりと頷いた。

そんな彼女の様子を可哀相に思ったのか、女将と思しき女性はどこことなく夏海の困惑に同調するように頷き、穏やかな声で言葉を放った。

…夏海が望んでいた、一言を。

「まあ、それは困りましたねえ。良かったら、うちに泊まっていますか？」

「良いんですか？ありがとうございます」

「……最初からそのつもりだったくせに、良く言う……」

やれやれと言わんばかりに呟かれた士の言葉は、隣にいた杉下とユウスケの耳にだけ届いたと言う…

＊

その後。二十歳も過ぎていると言う理由から、それなりに酔っ払った亀山に酒を勧められ。程よく口が軽くなった所で、客の中では紅一点、亀山の妻である美和子から、「病気」に関する情報が飛び出した。

それまでの話によると、彼女はフリーの記者で、様々な事件を追っていると言う。

時には、警察で裁くことのできない犯罪者を、記事を通じて裁くと言う行為に出ることもある。殆どは杉下に頼まれてのことだが、彼女自身の意志も、大いにあるらしい。

…自分の正義を貫くその姿勢に、既に酔っ払ってしまったユウスケが感涙にむせていた。

「あ、そう言えばさ、あの例の衰弱死。十一人目が出たんだって？」

「流石に、情報が早い」

「まあ、フリーとは言え記者ですから。今をときめく弁護士が亡くなるなんて、結構大きなニュースですよ」

「…へ？牙さんって、弁護士だったのか？」

「牙？何言ってるの薫ちゃん、十一人目は神奈川在住の弁護士、辰巳ツカサって人だよ？」

その言葉に、女将：杉下の元妻と言う宮部たまきと、言葉の張本人である美和子以外が硬直した。

「辰巳ツカサ…？」

「牙宰氏ではなく、ですか？」

「あれ？違うの？今日の夕方に倒れて、そのまま結構早く亡くなっ
たって。監察医の先生が調べたらしいけど、やっぱり原因不明だっ
て……ひょっとして、辰巳さんは十一人目じゃなくて……」

「十二人目だ」

放たれた士の言葉に、美和子とたまきも息を飲む。恐らくは、そ
の被害の大きさに。

だが……士の考えていることは、彼女達とは異なっていた。

うっすらとだが、見えてきた気がする。十人目以降……「小野寺司」
に始まる、三人の「つかさ」の共通点が。

そんな真剣な士の横顔を、杉下が鋭い眼差しで見つめていたこと
になど、気付かないまま。

ディケイドー4：花の里（後書き）

こんばんわ。今回はメインが花の里でした。

＊

某クイズ番組を見つつ、相棒の皆様がハワイ旅行をゲットしたのを見て

「アポロガイストがクイズに：！ハワイまで行って大ショッカー宣伝するのか！？」

と、一人家族の迷惑顧みずに騒いでおりました。（※あくまで「相棒の伊丹役」と言う肩書きの元で登場してました）

＊

相棒、シーズン8の放送も間近ですし、次々回辺りにちょっと特殊な一話を入れようと画策しております。

：シーズン8の第一話、見れるかなあ：（ビデオに録れ）。

＊

そんな感じですが、次回は相棒サイド。

：本当にいつになったら本格バトルが入るんだ？

では、また次回。

特命係―5―死因

「不可解です」

亀山が登庁するとほぼ同時に、右京は僅かに顔を顰めながらその言葉を落とした。

彼の目は、十一人目と十二人目：牙宰と辰巳ツカサの、「病」による被害を報じた記事に落ちたままではあるが、亀山の気配には気付いていたのだろう。

入ってくるなりいきなりそのようなことを言った上司に、思わず不思議そうな表情を向けてしまう。

「不可解って、何が？」

「十人目、小野寺巡查以降、被害にあわれた皆さん、名前が『つかさ』です」

「あ、ホントだ」

「今までは関連性など無かったのに、何故、今になって『つかさ』と言う名の方ばかりが被害に遭われるのでしょうか」

ようやく新聞から目を離し、冷静な態度で、手元の紅茶を一口とする右京に対し、亀山は半ば興奮したように目を見開く。

「まだあります。これは米沢さんに取り寄せて頂いた、今までの現場写真ですが…見て下さい」

「へ？」

「どの現場にも…残っているんですよ、あの『双頭の鷲』のマークが。昨日の牙さんの近くにも、このマークが描かれていました」

右京の指先にあるのは、確かに昨日見かけた、「双頭の鷲」のマ

ーク。それがどの写真にも、ひっそりと、だが確実に自身を主張しているように映りこんでいた。

気付いてしまえば気になるが、気付かなければただの模様にしは見えない。

これは、犯行声明なのだろうか。だとしたら…このマークの意味を知る人物が、必ずどこかにいるはずだ。

「そして、もう一つ、気になることが」

「まだあるんですか!？」

このマーク以外に、何かあるとは思っていなかったのだろう。亀山は、左手人差し指を「1」の形に立てる右京を、驚いたように見つめる。

彼は一体、どこまでこの「衰弱死」に疑問を抱いているのだろう。そして、どうしてこうも疑わしい物を見つけ出せるのだろう。

感心すると同時に、思わず呆れてしまう。

そんな亀山の様子に気付いているのかいないのか、右京は真剣な表情で彼の顔を覗き込み…一人の名前を挙げた。

「門矢士」

「門矢って…監察医の先生ですよ、えらく若い。あの方が、どうしたんです?」

「一日に三回も出会ったこと、牙氏を襲った犯人を見ていると証言しているにも関わらず、それを警察に申し出てこないこと、何より昨日の、十二人目の被害者の名を聞いた時の反応。…それらがどうにも、僕には引っかけかあるんですよ」

門矢士と言う青年が、どうやら右京の中にある、何かのセンサーに引っかかったらしい。彼を犯人だと思っている訳では無さそうだが、それでも疑うべき点はあるらしい。

正直に言えば、亀山はそうは思っていない。彼は…どこことなく、右京に似た目をしていると思う。自分の正義を貫き、それ故に何度も傷ついている…そんな、目。そんな風に思った時だった。再び二人が、刑事部長室に呼び出されたのは……

＊

「蜂、ですか？」

苦虫をまとめて噛み潰したような顔をした、白髪混じりの眼鏡の男…刑事部部长、内村完爾に呼び出されて聞かされた言葉を、思わず亀山はオウム返しに問い返していた。

内村の横にいる面長の中年男性、中園照生参事官も、内村と同じような顔をしながら、亀山の言葉に大きく一つ頷くと…

「そうだ。監察医による小野寺巡查と浅生涉氏の解剖の結果、あれは注射痕ではなく、蜂に刺された痕だと言うことが分かった」

「でも、あの痕は蜂刺されの痕なんかには見えませんでした、けど？」

「バカモン！監察医がそう判断したんだ。あれは殺人ではなく…事故だ」

内村の言葉の裏に潜む、「事件にしたくない」という意図が、二人には透けて見えた。

それもそうだろう。「病」だと信じて疑わなかったこの一連の衰弱死が、仮に「他殺」だったとしたら…

十二人も死んでいるのだ、マスコミは警察の怠慢を叩き、上層部はその責任を下に押し付けて逃げるに違いない。そんなことになれば、まず間違いなく、内村にとぼっちりが来るだろう。中園だって

憂き目を見るに決まっている。

だから、これは殺人であってはいけない。病や事故でなくてはならないのだ。

「分かったな！？分かったらこれ以上、穿^{ほじく}り返すな！」

「蜂一匹に刺されたくらいで、死ぬもんなんすかねえ？」

「アナフィラキシー・ショック、ですか」

内村への、ささやかな抵抗とばかりに呟いた亀山の問いに答えたのは、味方だと思っていた右京からだった。

それに驚いたのか、亀山だけでなく、内村と中園もきょとんと目を丸くして右京を見やった。

「ア：アナフィ：？」

「アナフィラキシー・ショック。アレルギー反応の一つです。過去に蜂に刺されたことがある方などはその毒をアレルギー物質として体が判断します。そして、もう一度その物質を投与されると、毛細血管拡張を引き起こし、ショック症状に陥ります。：下手をすると、死に至る」

軽く頷くような仕草をとりながら、右京は室内を軽く回りながら説明を始める。彼の癖である、左手人差し指を「1」の形にした上で。

「しかし、症状は全身の蕁麻疹と、喘鳴、下痢、腹痛：見た目に分かりやすいはずなんですがねえ……その監察医の先生ですが、もしや一番目の被害者：佐渡裕輔氏を診た方ではありませんか？」

「その通りだが」

「それが、どうした？」

「別の先生に、再度検死して頂くことをお勧めします」

右京の反撃に顔を更に顰めながらも、中園と内村はすぐに首を横に振り：

「それは出来ん」

「随分と即答ですね。……何か裏でもあるんじゃないですか？」

「そんな物はない！」

「そうだ！今回の監察医が都知事の甥で、次の参議院選挙に出馬する予定だとか、そんな事情は無い！」

：モロに言っちゃってますよ、中園参事官：

口には出さないが、心の中で亀山がそう突っ込んだ刹那。内村の机の上にある電話が、けたたましく鳴り響いく。まるで、さっさと出ろと言わんばかりに。

「誰だ、こんな時に！」

苛立つ内村に代わり、中園がその受話器を取った瞬間。その広めの額に、つうつと一筋の汗が流れ：

「…小野田官房長からです」

その名に、一瞬だけ内村の顔が歪む。

小野田公顕。警察庁長官官房室長：通称、官房長と呼ばれる立ち位置にいる、所謂「お偉いさん」である。

元は右京の上司であり、今だ以って右京に：と言うか特命係に厄介な仕事を持つてくることが多い、「狸」である。

特命係にとっては、味方にも敵にもなる：厄介な存在。

そんな彼が、内村に一体何を言っているのだろうか。全く予想がつかないが：少なくとも、内村にとっては良い知らせでは無いらし

い。

ささやかに口答えをしつつも、逆らえない悲しさか、きつく奥歯を噛み締めながらも、最終的には悔しげに一言。

「……………分かりました。そのように」

「小野田さん、何て？」

「…………別の監察医による、司法解剖のやり直しの指示が出た」

叩きつける様に受話器を置きながら、ニヤニヤ笑う亀山に、無然とした表情で内村は答えてやる。

「それで、その監察医って誰がやるんです？」

「それも指定された。…門矢士、とか言う奴に一任するそうだ」

その言葉に、右京と亀山が互いの顔を見合わせたことは…言うまでもない。

＊

「何か、意外な展開になっちゃいましたね？」

「そうですねえ」

不機嫌そのものの内村と、そんな彼の顔色を伺っている中園から解放され、二人はそう会話を交わしながら、特命係の部屋へ戻ってくる…

そこには、いつも通りと言うか何と言うか、角田が自分のカップにコーヒーを注いで、二人を待ち構えていた。

「お、帰って来た」

「課長…。またこのコーヒー飲んでたんですか？その内、ホント

に豆代請求しますよ?」

「そう堅いこと言うなよ亀ちゃん。折角お客さん案内してきたんだから」

「お客さん?」

「よお」

「お邪魔してます」

心当たり無く、不審気に見やった視線の先には。

偉そうに亀山の席でふんぞり返っている門矢と、興味深そうに右京のチェス盤を眺めていた夏海と小野寺の姿であった…。

特命係―5―死因（後書き）

こんにちわ。秋月です。

＊

シリーズン8放送記念と称しまして、本日も投稿。
しかも相棒サイド。

…狙ったのか？ そうなのか！？ （狙ってます）

＊

とは言え、やっぱりグダグダ感はありませんねえ。

「蜂によるアナフィラキシー（注射痕のある亡骸）と、やっぱり原因不明の病気（注射痕の無い亡骸）」

って言うのが警察の見解。でもやっぱり、上の方から圧力がかかっているらしい…

相棒には、良くあるパターンです。

＊

さて、右京に疑われているとも知らず、のこのこやって来た士達。
この後彼らは驚愕の事実を…知るんだろうか。

＊

次回はちょっと短めの番外です。

その番外は…この後すぐ（どこのTV番組だよ）！
それでは、一旦失礼致します。

番外：官房長室にて

「これで良いのかしら？」

「どうもありがとう」

小野田公顕は電話を切ると、まるで友人に話すかのような口調で、自分の後ろに立つ青年にそう声をかけた。

声だけを聞いていると、まるで日常の会話のように聞こえるが：実際は違う。

青年は小野田のこめかみに、水色を基調とした黒い線模様の銃のような物を突きつけており、部屋の外では小野田のSPらしき黒服の男達が、床に突っ伏している。

「それにしても、私を脅して何を言わせるつもりなのかと思ったら。監察医の指名ですか」

「人があそこにいると、お宝のゲットが難しいんだよ。特に士とかにいられては困る」

ひよいと肩をすくめながら、それでも青年は銃口を小野田から外すことなくさりとて言い放つ。

「撃たないで頂戴よ？まだ孫との団欒が足りないんですから」

「それは君次第かな」

「：まだ、何かあるの？」

「ああ。実は、チェス盤の他にもう一つ、欲しい物があるんだ」

銃口を向けられているというのに、小野田は特に動じた様子もない。青年も、本気で撃つ気が無いのか、やけに緊張感に欠けている。ここまで入ってくるくらいだから、腕には自信があるのだろう。

その気になれば小野田を殺すことだって簡単なはず。

それに、「お宝」と言う単語から考えると、彼は暗殺者ではなく、泥棒に近いのかも知れない。

「欲しい物ねえ。それ、私に用意できる物？」

「僕はね『特命係』のプレートが欲しいんだ」

小野田の問いには答えず、青年は爽やかな笑みを浮かべてそう言い放つ。

プレートと言えは：恐らく、部屋の外にかけてある物のことだろう。しかし：それが欲しいなら、自分の前に現れるはずもない。部屋の外から持って行けばいい。

そもそも、特命係のプレートが欲しいならば、ここではなく警視庁に赴くべきなのだが：そうしなかったのは、何か理由があるのだろうか。

「それも、ただのプレートじゃない。『緊急対策特命係』だった頃のプレートさ」

青年の言葉を聞き、小野田は軽く納得する。

今でこそ新しく作られた物がかけられているが、その昔は「緊急対策特命係」：小野田が杉下右京を部下として、ある事件を解決させるために立ち上げた組織が元であった。結局その事件が元で、「杉下右京は人材の墓場」などと言われるようになったのだが……

「へえ、杉下が割った方のプレートを欲しがるなんて、結構なマニアじゃない？」

「どこにあるのか、教えてくれないかな？」

「あれはとっくに処分しちゃったはずですよ。新しく付け替えた時に」

「ところが、君が持っているって噂を聞いたんだ」

カチャリと、自分のこめかみに押し当てられている銃が鳴る。
死ぬのが怖くないと言ったら嘘になるし、そもそも殺されるなら、
杉下を含む三人にだけと決めている。

ここで殺されるのは、小野田にとっては正直頂けないのだが…それでも、彼は飄々とした表情を崩さずに、青年の顔を見上げ…軽く首を傾げながら、ポーカーフェイスを崩さずに一言。

「根も葉もない噂話でしょ」

ところがその言葉に、青年は軽く笑うと…何故か銃口を外し、小野田の正面に立ち…

「火の無い所に煙は立たないんだよ」

「うーん、人の口に戸は立てられないか。でも、あんな物どうするつもり？」

「僕のコレクションにする。かなりのレア物だしね」

「そう。差し上げてもいいけど、自分で見つけて頂戴ね。私は案内しませんから」

小野田のその一言に、青年はふ、と軽く笑い…

「今はもう時間切れかな。そろそろSP君達が目を覚ます頃合だ」

「あら、随分と優しいね。殺さないでいてくれたんだ。ところで、今更ですけど、お宅、どちら様？」

「そうだな…」

青年は軽やかな動きで、出口の前に立つと…不敵な、それでいてどこか爽やかな笑みを浮かべて、一言。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておきたまえ」

指鉄砲を作り、それを軽く撃つような仕草を小野田に向けた後、青年は持っていた銃に何かのカードを差し込み：

「変身」

— K A M E N R I D E — D I ・ E N D —

天井に向かってその銃を放つと、そう電子音が響き、三つの虚像が青年の体を包んで水色の鎧と化した。面には黒い、スリットのようにもカードが刺さったようにも見える装飾が施されており、どことなく突きつけられていた銃と同じ模様であるようにも見えた。

「いつかきつと、プレートは頂くよ。それじゃあね」

— A T T A C K R I D E — I N V I S I B L E —

再び電子音が響き、鎧を纏った青年の姿が見えなくなる。それほどほぼ同じタイミングで、倒れていたSP達は軽く頭を振りながら、起き上がり始めた。

それを見て：小野田は、楽しそうに笑って、一言。

「仮面ライダーねえ：孫に自慢できるかしら？」

番外：官房長室にて（後書き）

こんにちわ。先程もお会いしましたね。

＊

先に、番外を持ってきました。番外なんで短いです。

＊

まあ、かなり相棒サイドな見方になりましたが…青年こと、海東が実は小野田さんを脅してました。

…ディエンドライバーは、そんなことに使うための物じゃありません。良い子、悪い子、良い大人は絶対に真似しないで下さい。

＊

しかも、小野田さんが一番最初に仮面ライダーを見ちゃうって…どうなんだろう。

＊

何気に、海東はチェス盤と「緊急対策特命係」のプレートを狙っているらしいです。それを保管しているのは、きっと小野田さんだと…僕は固く信じています。

なので、今回このような設定を設けたり…

個人の趣味って怖いですね。

＊

さて、次回はディケイドサイド。特命係に来た理由、そして…きっと米沢さんが出てきてくれると思います。

そうなれば…士達は、びっくりしてくれるはずなので。

それでは、次回またお会い致しましょう。

ディケイドー5…仮面ライダー

小料理屋、「花の里」で一泊させてもらった士達は、たまきに礼を言う、午前中から行動開始した。

被害者は十二人…恐らく、十一人目の牙宰と、十二人目の辰巳ツカサと言う人物は、アポロガイストによって命の炎を奪われた者だろう。

そう考えると、のんびりなどしていられなかった。

「だけど…これからどうするんだ士？」

「当てもなくふらふらしていても、被害は増えるだけですし…」

「お前ら…本当に当てもないと思ってるのか？」

ユウスケと夏海の言葉に、どこか呆れたような声で言いながら、士は二人の方を振り返った。

その顔は、声同様どこか呆れているようにも見える。

「何か、当てがあるんですか？」

「良いか、十人目…小野寺司って奴から考えろ。その前は一旦忘れて良い」

「あ、ああ」

びしっと人差し指を突きつけられ、その勢いに負けたようにユウスケと夏海はこくりと肯き…それに満足したように、士も一つ頷くと…

「いいか、今度は苗字と職業だ」

「苗字と、職業？」

「思い出してみろ。十人目の名前と職業は？」

「小野寺司さん。職業はお巡りさんでした」

「次、十一人目：アポロガイストと戦った時の被害者は？」

「牙宰。亀山さんが言うには、確かバイオリニストだったよな」

「そして十二人目：辰巳ツカサ、職業は弁護士だ。ここまでで何か気付かないか？」

士に言われ、二人は歩きながら考える。

小野寺、牙、辰巳：

お巡りさん、バイオリニスト、弁護士：

『あ！』

思い当たる節があったのか、ユウスケと夏海、同時に声をあげた。

「俺達が出会った仮面ライダーと、同じ苗字！？」

「士君のコスプレの順番！」

「コスプレって…一応あれは俺の役割だ！」

夏海の一言にツツコミを入れるも、士は気を取り直すように軽く咳払いをし：

「とにかく、そう言うことだ。ワタルに関しては無理があるような気がしなくもないが、多分あってるはずだ」

「それじゃあ、次に狙われるのは…」

「『ブレイドの世界』ですから…『剣立つかさ』って名前の…コック？」

「多分な」

ユウスケの言葉に、士は真剣な表情で肯き…更に歩を進める。

先程の物言いからすると、当てがあるらしいのだが…始めてこの

世界に來た身としては、そんな名前の知り合いなどいるはずも無い。ずっと行動を共にしていたのだ、士だけがその人物を知っているとは思えない。

では…何処に向かっているのだろうか。そんな思いが夏海の頭を支配した。

「人探しは、人探しのプロに頼めば良い。丁度、そういうことをしてくれそうな奴がいるだろう？」

「人探しのプロ…ですか？」

「…あ、警察！」

「そう言うことだ。捜査一課の連中には良い顔されそうに無いからな、杉下と亀山を頼ればいいだろう」

つまり最初から彼は、警視庁に向かっていたと言う訳か。納得すると同時に、すんなり会えるかどうか…若干不安に思うユウスケと夏海であったのだが…

どうやら、杞憂に終わったらしい。受付らしき場所で二人の名を告げると、あっさりと「VISITER」の札を渡され、中に案内された。

「……何か、結構奥の方にあるんだな…」

強面の刑事達がひしめく部屋の奥に、「特命係」のプレートがかけられた部屋が、所在無げにポツリとあった。

まるで、陸の孤島だ。

ふとそう思い、誰もいないその部屋を士は見回す。

「悪いねえ、今警部殿と亀ちゃん、呼び出されててさ。」
「あんたは特命係じゃないのか？」

案内してくれた、面長の、ひょうきんそうな顔をした男：確か角田とか名乗ってた：にそう問うと、彼はきよとした表情になって軽く首を横に振った。

「俺？まさかあ。特命係は警部殿と亀ちゃんだけ。俺はそっちの住人だもん」

言いながら、特命係の部屋の外：強面の男達の方を首で指す。

とてもではないが、そんな男達と一緒にいるような人物には見えない。人当たりの良さそうなおじさんに見えるのだが：

僅かに顔を顰めながら角田を見る士に、角田は飲む？とコーヒーを勧めてくる。

そんな彼らの脇では、ユウスケと夏海が驚いたように机の上の物：クリスタル製のチェス盤を眺めていた。

「これ：写真館の絵にあった奴じゃ：」

ユウスケがそう呟いた瞬間。角田ののんびりした声が響いた。

「お、帰って来た」

その声に振り返ると：そこには、飄々とした表情の杉下と、何故か苦笑気味の顔をしている亀山がいた。

「課長。またこのコーヒー飲んでたんですか？その内、ホントに豆代請求しますよ？」

「そう堅いこと言うなよ亀ちゃん。折角お客さん案内してきたんだから」

「お客さん？」

「よお」

「お邪魔してます」

軽く手を挙げて挨拶する士と、慌てて立ち上がってぺこりと頭を下げる夏海とユウスケ。

まさかこちらから来るとは思っていなかったのか、亀山はあからさまに驚いたような表情で士達を指差しながら、不思議そうな声をあげ、杉下も軽く目を見開くようにして士を見つめた。

「おやおや。門矢先生じゃございませんか」

「何で、ここに？」

「実は、この連続殺人なんですけど……」

いきなり夏海が本題に入ろうとした瞬間。

どうやら杉下の携帯電話に着信があったらしい、彼はそれを、申し訳無さそうな表情でとり……

「失礼。杉下です。……はい、どうもありがとうございます」

それ程長い用事では無かったらしく、すぐに電話を切ると……どこか困ったような表情で亀山の方に向き直り、一言。

「米沢さんです」

「何て？」

「あのマークに該当する組織を、検索して頂いていました」

あのマーク……その単語から思い浮かべられるのは、たった一つ。
：現場に残された、大シヨツカーのマークのことだろう。検索をかけていたということは、この世界ではまだそれ程大シヨツカーは表立って行動していた訳では無いらしい。

それに気付いたユウスケが、半ば無理だろうと思いつつも一応声

をあげる。

「あのっ、俺達も付いて行って良いですか？」

「え、それはちよつと…ね、右京さん？」

「僕は、一向に構いませんよ」

「ほらやっぱりダメ…ええっ!？」

まるで漫画のようなやり取りだと思いつつも、三人は杉下達に同行することを許可されたのであった。

＊

「杉下警部、お待ちしております。…そちらの方々は？」

「通りすがりの見学者だ」

「監察医の、門矢先生です」

「左様でしたか。私、鑑識の米沢と申します」

米沢と名乗った、そのぽっちゃりとした眼鏡の男は、人の良さそうな笑顔を浮かべながら士達に一礼すると、すぐに自分の机上にあるパソコンモニターに向き直った。

「早速ですが、こちらをご覧ください」

そこに映し出されているのは、言わずもがな大ショッカーのマーク。相当の驚が地球を押さえ込んでいる様に見える、マークだった。背景からすると、十番目の被害者…小野寺司の脇にあったものだろう。

「これは現場写真を元に、画像解析をかけて鮮明にした物です。こちらのマークを、データベース検索をかけました」

言いながら、米沢はその言葉をなぞるように再びデータベースに検索をかけているらしい。

いくつかのマークが候補として挙がるが、最終的には画面には赤字で「No Data」と表示されてしまった。

「残念ながら、完全に一致するマークはありませんでした」

「『完全に一致する物はない』…と言うことは、部分的に一致する物は見つかったのですか」

「はあ、それが……」

杉下の鋭い問いに、米沢は困ったような表情を浮かべながら、歯切れ悪く一つのマークを画面に映し出した。

「実は、良く似た物に、このようなマークが」

「あ、確かに良く似ています。けど、頭は一個しかありませんね」

映し出された物を見ながら、夏海は興味深げにそのマークを覗き込む。

大ショッカーのマークとは異なり、鷲の頭は一つ。他の部分も、「似てはいるが微妙に違う」といった印象を受けた。

「あれ？このマーク、どこかで見たことあるような気がするなあ…どこでだっけなあ……」

「亀山さんの年齢なら、ぎりぎり再放送世代と言った所でしょうか」
「…ああっ！これ、『仮面ライダー』に出てくる『ショッカー』のシンボルマークですよ、右京さん！」

「ええ。私も幼い頃、ライダーキックと称して近くの大人にとび蹴りを食らわせて、こっぴどく怒られたものです」

懐かしそうに…そしてどこか嬉しそうに語る亀山と米沢のその言葉に、士達は驚いたようにその目を見開いた。

…再放送、とは一体どういう意味なのだろう。何故か奇妙な予感が、彼らの胸の内を占めていく。

そんな三人に気付いていないのか、杉下は不思議そうな表情で亀山達二人を見比べ：

「はいい？」

「あれ？右京さん、知らないんですか、『仮面ライダー』？ひょっとして、『ゴレンジャー』とかも？」

「そちらは『スーパー戦隊』と呼ばれるものですな。ちなみに、現在放映されているのは『侍戦隊シンケンジャー』です」

「名前だけは知っています。確か、『仮面ライダー』も『スーパー戦隊』も、子供に人気のある、特撮番組でしたよね」

杉下の「特撮番組」と言う一言がとどめだった。

士達は完全に、ここがどういった世界なのかを、理解してしまっただ。

即ち……仮面ライダーが「実在しない」世界であると……

ディケイドー5…仮面ライダー（後書き）

おはようございます、秋月です。

＊

殆ど「特命係」的な書き方になりましたが、士達はようやくこの世界に「仮面ライダーはいない」と言うことを知ることができました。さて、これがどう転ぶのか…

＊

特命係はそんな彼らの衝撃に、気付くことができるのか。
何名か腹芸の出来なさそうな奴がいますからね、ショックを受けていることはわかって、それが「何に対する衝撃」なのかまでは…
分からなさそうですね。

＊

もはや僕自身にかけていた制限を破りまくりなので、次回は少し長くなっても予定している所まで行こうと思います。
…どこかって？それは勿論……

＊

そんなこんなでまた次回、お会い致しましょう。

特命係―6―容疑者

現場に残されたマークは、亀山曰く「仮面ライダー」と言う特撮番組に登場する敵組織「ショッカー」の物に酷似している：

そう米沢に告げられ、一瞬右京はきよとした表情になってしまった。

すると犯人は、行き過ぎたファンなのだろうか。しかし：それだけでは納得のいかない点が多すぎる。例えば：自分の横で、青い顔をして立ち尽くす門矢達三人。

彼らは確か、「連続殺人について話がある」みたいなことを、鑑識課に来る前：特命係の居室で、そう言っていたはず。

時間的にも、門矢士に再解剖の命令が行ったとは思えない。ならば、一体何を伝えに来たのか：

そんな疑問が顔に出たのか、じっと見ていたこちらに気付いたように、門矢は不思議そうに顔を歪め：

「俺達の顔に、何か付いてるか？」

「いいえ。しかし、気になったものですから」

「何が、ですか？」

気のせいだろうか。冷静そうな門矢に対し、小野寺と光は随分とうろたえている様に見える。

やましいことが無いのなら、特にうろたえる必要は無いはず。それなのに何故、彼らはあんなにも青ざめ、そわそわとしているのだろうか。

「勿論、皆さんが僕達を尋ねてきた理由です。確か、この『事件』に関して：何かあると、仰っていたと記憶しているのですが」

口元に笑みを浮かべながら、右京は人差し指を突きつけながらそう言くと、小野寺と光は思い悩むように俯く。

：不思議なことに、先程まで元気そのものだった彼らが、「ショックのマーク」を見て以降、あまり元気が無い。それどころか、何故か口を閉ざそうとしている傾向にあるように思う。

これは答えてくれないかもしれないぞお

小野寺の顔を見ながら、亀山が心の中でそう呟いた瞬間。口を開いたのは、どこか不機嫌そうな門矢だった。

「俺達が来た理由は、次の被害者に心当たりがあるからだ」

：一瞬の静寂が、その場を支配した。

右京すら黙り込んでしまうほど、それは思いがけない言葉だった。

「隠してたって無意味だからな。俺達に人探しは無理だ」

「それは、本当なのですか！」

「ああ。次の被害者は、『剣立つかさ』、コック。その次は『尾上つかさ』って高校生だ。苗字は漢字で書けるが、名前の方は分からない」

「な、何でそんなこと……」

「説明すると長くなる。だが、間違いない。……多分な」

右京の目を真っ直ぐに見つめつつ、門矢はやけに確信に満ちた声で言い放つ。

口では「多分」とつけているが、何か確固たる根拠があるのだろう。それを、今教えてくれるとは思えないが：いつか、聞ける日が来るかもしれない。

「ま、信じる、信じないはあんたらの勝手だな」

それだけ言うと、まるで用事は終わったと言わんばかりに門矢はくると踵を返す。

慌てたように、小野寺と光も一礼して…三人は、その場を立ち去って行った。

「右京さん、良いんですか？門矢先生、帰っちゃいましたけど」

「ええ。ですが、門矢先生とはいつでも会えますからねえ。今は最初の監察医：陽元先生ひのもとのところへ行くべきだと思いますよ」

右京が彼を疑っていたのを知っているだけに、亀山はあっさりと彼らを帰した右京に向かって提言するが…右京にも、それなりの考えがあるらしい。

「花の里」の隣に住んでいると言うのだから、彼らに話を聞くことは簡単だと言いたいのだろう。それよりは、疑わしいもう一人の監察医：被害者を「病」と診断し、その後あの傷痕を蜂に刺された痕：死因を「アナフィラキシー・ショック」と診断した存在、陽元かくり幽にあった方が良い。

そんな相棒：右京の考えを悟ったのか、亀山は神妙な顔で頷く。

「ああ、それと米沢さん」

「分かっております。先程名前が挙げられた人物の特定ですな。分かり次第、ご連絡いたします」

「宜しく願います」

「それじゃ、行ってきます！」

そう言うと、右京と亀山は並んで鑑識課を後にし…陽元幽の元へと向かったのであった。

＊

アポイントメントを取っていた訳でもないのに、二人は随分簡単に陽元と会うことができた。

門矢に比べれば年を行っているが、それでも若いと思う。30代後半と言った所だろうか、働き盛りのような印象を受ける。

浮かべる笑みも爽やかで、着ている白衣の「白」も、その爽やかさを強調しているように見える。

「例の『病氣』のことでここに来たとか。警察も大変ですね、僕は病氣だって言ったのに」

くすくすと笑いながら、陽元はどこか哀れむような口調で、開口一番そう切り出す。

見た目に反して、喋り方が子供っぽいような印象を、亀山は受けた。甘やかされて育ったであろうことが、容易に想像できる。

「しかし、その次に出た結果は…」

「九人目と十人目でしょ？ あれは蜂ですよ。アナフィラキシー」

「ええ、そのようにお伺いしています」

「けど、あの傷痕…そんなに腫れてませんでしたよ？」

「……偶々でしょう。大体、十二人目…神奈川の件を見た監察医だって、『原因不明』って言ったんでしょう？ これ、もう、病気で良いじゃないですか」

何かを誤魔化すように、右京と亀山の言葉にそう返ししながら、彼はゆっくりと椅子に身を沈める。

いや、「誤魔化す」と言うのは適切な表現では無いかもしれない。知っていて…そして知っている事を臭わせながらも、追求できるものかと言外に問うている印象を、亀山は受けた。

亀山ですらそう思ったのだから、右京もきっとそう思っているだろう。そう思い、彼はちらりと自分の上司を盗み見る。

奇人と言われることの多い彼の上司は、いつの間にか自分の隣から監察医の後ろにある地球儀の側で、興味深そうに立っていた。

地球儀が珍しいのかと言いかけたが……どうやら右京の視線は地球儀本体では無く、その頂点^{トップ}についている飾りの方にあるらしいことに気付いた。

それが、どうしたのだろうかと思った刹那……右京は興味深げな声で、陽元に向かって話しかけた。

「これは、『シヨツカー』のマークですねえ……」
「え？」

右京に言われ、亀山もそれを注視すると……確かに、その飾りは先程米沢に見せてもらった、「シヨツカー」のシンボルマークだ。

ぼんやりと思った瞬間、今まで上から見ていたような物言いをしていた陽元の表情が、ぱあっと輝き……心底嬉しそうな顔で身を乗り出し、彼らに問いかけた。

「あ、分かります！？ やっぱり！？ あなた達も見てた！？」

「ま……まあ、ちよびつとだけ……」

「そうか！ あ、君はどの悪の組織が好きだった？」

「え？ いや、あの……」

「僕はね、全部好きなんですよ。一番新しい『ミュージアム』まで、全部！ だけどやはり、どの組織も一番最初……シヨツカーの持つ魅力には敵わない！」

驚き、僅かに引き気味の亀山など気に留めた様子も無く、陽元は陶醉しきったように、瞳をキラキラさせて語りだした。

自分の好きなものを誉められると、周りが見えなくなるタイプの人間がいるが、どうやら目の前の監察医はそう言ったタイプらしい。

「では、先生はショッカーが、一番好きなんですね？」
「……ちよっと前までは、ね」

それまで、どこか爽やかさすら感じられた陽元のその笑みが。初めて歪にゆがんだように、右京の目には見えた。

どこか、狂気に彩られている笑みを隠そうともせず、彼は未だ陶酔しきったような表情で言葉を続ける。

だが、その言葉は…果たして自分達に向けられているものなのだろうか。

「フフ…。僕はねえ、もっと魅力的な悪の組織を見つけたんです」
「それは、どの様な？」

「…教えてあげません。流石に共有化したくない。僕だけの秘密」

顔に張り付けた笑みを、ますます歪め…陽元幽は、それ以上何も語らなかった。

＊

「何か怪しい人でしたね。こう、俺らのことを見下してるって言うか…」

「『ショッカー』……」

「は？」

唐突に上司が上げた単語に、思わず亀山は素っ頓狂な声を返す。だが、すぐに彼が何を言わんとしているのかを悟り…ああ、と声を挙げると、ズボンのポケットに手をつっ込みながら軽く頷き…

何か、随分と『ショッカー』がお気に入りみたいでしたね。

そう言おうと思ったその時。亀山の視界に、見慣れた…だがどこ

か奇妙な印象の男の姿が映った。

いつもなら軽く眉を顰め、灰色や紺といったスーツを着崩しているはずのそいつ：伊丹が、今日はきっちりと白いスーツを着こなしている。

しかも、こちらを向いているにも関わらず、まるで自分など眼中に無いかのような表情。

「おい、伊丹？」

「その声：以前邪魔をしてくれた奴だな」

「は？何言ってるんだお前」

ようやく亀山に気付いたと思ったら、訳のわからない一言を返す「白い服の伊丹」。以前も何も、彼は毎回のように特命係を邪魔者扱いしてくるでは無いか。

そんな彼に、亀山は怪訝そうにその顔を顰めると、「伊丹」は口角を皮肉気に吊り上げると、どこからか取り出した剣を亀山に向けた。

それが何を意味するのか理解できずに、ぼんやり見つめたその瞬間。その剣が亀山の体を二つに断ち切るべく振り下ろされ……

「亀山君！」

「危ない！」

声が聞こえたと同時に、亀山の体に誰かがぶつかってきたような衝撃が走る。

：実際、誰かに体当たりを食らわされたらしい。

非難混じりの視線で、亀山がその相手を見ると：何故か相手は、ほっとしたような顔で自分を見つめている。

それは、警視庁でも出逢った人物。監察医助手の……

「あ…あんだ確か、えーっと…」

「小野寺ユウスケです」

「そうそう、小野寺君！って…今の、何だ！？」

「伊丹」は亀山には目もくれず、いつの間にか自分の近くに立っていたもう一人の男…門矢士の方を、忌々しげに見つめている。

…違和感が拭えない。目の前にいる、良く知る人物と同じ顔をした男は、こんな風に、邪悪な笑みを浮かべる奴だっただろうか。

思う亀山を…そして右京をよそに、その「伊丹」は軽く嗤い…

「やはり来たか、ディケイド」

「まあな。お前が俺達にとって迷惑な存在だって言うなら、俺達はお前にとって迷惑な存在になってやるだけだ」

その門矢の言葉が、引鉄になったように。「伊丹」は両手を後ろに回すと、再び皮肉気な笑みを浮かべ…

「アポロ・チェンジ」

その姿が、変わった。

一瞬で、見慣れた「伊丹」の姿から、赤紫色の、鎧を纏った騎士のような姿に。

それを認めるや否や、門矢と小野寺は右京達を守るように前に出て…

「行くぞ、ユウスケ」

「当たり前だ！」

『変身！』

— K A M E N R I D E — D E C A D E —

どこからかそんな音が響いて……目の前の二人の姿も、変わった。

「おやおや」

「ど……どおなってんだあ!？」

感嘆したような右京の声と、心底不思議そうな亀山の声が重なったが……答えてくれそうな者は、誰もいなかった。

特命係一6：容疑者（後書き）

こんばんわ。

出来る限り水曜日に更新をしようとしたら、こんな時間になりました。

＊

…もう少し引っ張ろうかと思いましたが、そろそろ本気で裏も表も見ていないと、特命係のお二人には非常にアンフェアな形の物語になりそうだったので、今回ようやくラストに「変身」のシーンを入れました。

と、言う事は、次回はバトルです。

＊

しかし、そう易々と人前で変身していいんだろうか。そして…ガイ形態で、剣登場。

…本当に、どこに隠し持っていたんでしょう？
そもそも、そんなこと本編でもやらないっつーの。

＊

さて、こんな感じで次回に続きます。
それでは、また次回。

ディケイドー6：二度目の戦い

「…ここも、どうやら仮面ライダーのいない世界ってことらしいな」
「それどころか、怪人もいない：『シンケンジャーの世界』とは違
って、罪は人が犯すもの、か：」

警視庁から出て、どこか不機嫌そうに呟いた士に、ユウスケも真
剣な表情で言葉を落とす。

今までは、「仮面ライダー」はいなくても、怪人や怪物の類は存
在していた。不可思議な事件があれば、大体そこに異形がいて、人
間を困らせていた。

しかし今回は違う。完全に自分達「仮面ライダー」やアポロガイ
ストなどの「異形」は、本来存在するはずの無い「異物」なのだ。
今更のように、アポロガイストの言葉：「変身すること自体が迷
惑な行為」の意味を理解し、つい落ち込んでしまう。

「私達は、この世界に必要なものでしょうか」

「…：…だったら、何故俺達がここに来た？俺のやるべきことは何だ
…？」

「監察医」と言う肩書きを持っている以上、きっと自分は誰かの
亡骸を診ることになるのだろう。その時、確実にアポロガイストの
被害者だと分かる存在を診ることになったとしたら？

…正直に、「アポロガイストの仕業」とは言えないのがこの世界
だ。偽りの死因：原因不明の病であると診断せよと言うのか。

冗談では無い。そんなことを…大ショッカーの仕業と分かっ
て、みすみすそれを見逃すようなことをするのは、士の癪に障る。

あの連中の思うように、踊らされているようで。

「やっぱり：人知れずアポロガイストを倒した方が良いんでしょうか」

「出来ることならそっちの方が良いのかもしれないけど…」

今更、それが出来るのだろうか。

何しろ、少なくとも杉下と亀山の二人は、現場に残されたマークが「仮面ライダー」の中に出てくるものに似ていると知ってしまった。それに以前、士は彼らに、「犯人は伊丹に良く似た顔の男」と告げてしまったのもある。

何となく：彼らには、誤魔化しきれないような気がした。

何しろ、光写真館の隣に、彼らの行きつけの店まであるのだから。暗くなりがちな心を引きずりながら、彼らは再び当ても無く街中を彷徨うのであった。

＊

どれ程時間が経っただろう。

そんなに長くないような気もするし、随分と歩いたような気もする。時間感覚がおかしくなり始めたその時、彼らの弛んだ意識を張り詰めさせるに足る姿が見えた。

奇妙な笑みを浮かべ、ゆっくりと剣を振り上げる白いスーツを着た男と、その男にきょとんとした顔を向けて対峙する、カーキ色のジャンパーの男。そして少し離れたところにはかっと目を見開いている眼鏡の男。

剣を振り上げているのがガイで、今にもその剣の餌食になりかけているのは亀山。そしてその亀山に向かって必死に手を伸ばしているのが杉下。

そう認識すると同時に、思わず士とユウスケの体は動いていた。ユウスケは亀山に向かって体当たりを食らわせ、その凶刃から回避させ、士は二撃目が来ないように、勢い余って倒れこんだユウスケ

と亀山の二人の前に立ち、ガイをまっすぐに睨みつけた。

どうして亀山を襲ったのかは分からないが、目の前の「迷惑な存在」は軽く眉を顰め：すぐに、いつもの悪人その物と表現できる、皮肉めいた笑みをその顔に貼り付ける。

その嘲笑うかのような表情が、士にはどうにも気に食わなかった。

「やはり来たか、ディケイド」

「まあな。お前が俺達にとって迷惑な存在だって言うなら、俺達はお前にとって迷惑な存在になってやるだけだ」

自分達が来たのは偶然の賜物だが、そう素直に言ってやる義理は無い。

どちらにせよ、この男とは戦うことになるのだから。

思った瞬間、先に動いたのは：ガイ。彼は両手を後ろに回すと、自身の姿を変える一言を放った。

「アポロ・チェンジ」

もはや、迷っている暇は無い。

例えこの世界が、仮面ライダーの存在しない世界だとしても、目の前で襲われている者を：そして襲っている者を見過ごすことなどできる訳がない。

意を決し、士は腰にベルトを巻きつける。

：仮面ライダーに、変身するために。

「行くぞ、ユウスケ」

「当たり前だ！」

『変身！』

— K A M E N R I D E — D E C A D E —

電子音が響き、士はその場でディケイドへと変身する。同様に、ユウスケも、黒いスーツに赤を基調とした鎧を身に纏った、クワガタモチーフの戦士：クウガへとその姿を変えた。

「おやおや」

「ど：どおなっぺんだあ！？」

自分達の後ろで、驚いたような声を挙げる杉下と亀山を軽く無視し、二人はアポロガイストに向かって攻撃を仕掛ける。

クウガは相手の左から、ディケイドは右から、それぞれに相手の顔面めがけて自らの拳を繰り出す。だが、アポロガイストはそれを手に持っていた剣と盾で防ぐと、ディケイドの背をクウガに向かって蹴り飛ばす。

「んなあつ！？」

予想外のディケイドの突進に奇妙な悲鳴を上げつつ、クウガは慌てて彼を受け止める。

だが、そこに隙が出来た。もつれ合う二人の仮面ライダーに向かって、アポロガイストは剣を振り下ろす。

「危ねえっ！」

慌ててその剣戟を左右に分かれることでかわし、二人は再び杉下と亀山を守るように立ち塞がりながら、アポロガイストと対峙しなおした。

二対一と、数の上では有利だが：とてもその数の優位を感じられるような状態では無い。

少なくとも、今の一撃をかわされたことを考えれば、かなりの使

い手であることは分かる。

自分達の後ろでは、未だ驚いた様子の亀山と、どこか感心したような杉下が、何やら自分達に関して互いの意見を述べているらしい。
：随分と呑気なものだと思うが、実際戦っている身としては邪魔以外の何者でもない。

「ごちゃごちゃ言っていないで、そこどいてろ！」

—ATTACK RIDE—BLAST—

襲い来るアポロガイストを牽制するように、ディケイドはライドブッカーを連射しながらも、後ろにいる二人にそう言い放つ。

腰が抜けて立てない、とかそう言うことは無さそうだし、出来ることならさっさと逃げて欲しいのだが：警察官と言う職業に就いているせいなのか、むしろアポロガイストに立ち向かいそうな雰囲気すらある。

「ディケイド、クウガ。貴様らはここで倒れる運命なのだ！」

「そう簡単に死ねるか。まだ俺は、自分の世界を見つけていない！」

「俺だって：皆の笑顔を守るって、決めたんだ！だから、お前なんかに負けてられるか！」

—ATTACK RIDE—SLASH—

振り下ろされる剣を、ソードモードに変えたライドブッカーで受け止めつつ、ディケイドは勢い良く相手を後方へ吹き飛ばす。

クウガもその勢いに乗ろうとしたのか、ずっとポーズを決めると：

「超変身」

その一言と共に、クウガの色が赤から緑に変化する。

緑：ペガサスフォームの特性は、優れた感覚にある。

正直に言ってしまうえば、力で押してくる戦法が多いアポロガイストに対しては、同じくパワー重視型の紫、タイタンフォームで戦いたいのだが、切り裂くもの：剣やナイフといった刃物が、そうそう転がっている訳でもない。

武器は無くてもフォームチェンジして戦えるが、それならば赤いマイティフォームで戦うのとそう大差は無い。

「亀山さん、杉下さんでも良いです。拳銃貸して下さい!」

「な、何に使うんですか、そんな物…」

「武器にします!」

「はい?」

そう：撃ち抜く物があれば、それを分子、原子レベルで分解し、ペガサスボウガンと呼ばれるボウガン状の武器に再構成することができる。

しかし、そんなことを説明している暇は無い。こうしている間にも、ディケイドとアポロガイストの戦いはヒートアップしているのだ。

「…返してくださいよ?」

「分かってますって」

訝しげに言いながら自分の拳銃をクウガに渡す亀山に、サムズアップを返しながらそう答え、それを受け取る。

刹那、亀山の拳銃が、まるでクウガの体から何かが伝播したかのように、その姿をボウガンに変えた。

「…土、避けろおっ!」

それまでアポロガイストと切り結んでいたディケイドに向かって
そう叫ぶと、クウガは答えも聞かずにその矢を放つ。

ディケイドも、クウガのやろうとしていたことに気付いていたらしい。絶妙のタイミングでその矢をかわし、アポロガイストはかわ
しきれないと悟ったのか、盾でその矢を防ぐが…ただの矢であるは
ずが無かった。

高密度に圧縮された空気に、クウガの力である「封印エネルギー」
が加えられた矢…「ブラストペガサス」と呼ばれる攻撃、必殺技な
のだ。

矢と盾がぶつかった瞬間、盾はその力に耐え切れずにバキリと砕
け、その場に散る。

「何…!?!」

まさか砕けるとは思っていなかったのか、アポロガイストは慌て
たような声をあげ…そして、気付く。

自分の前に一直線に並ぶ、エネルギーのカードを。

「これで終わらせてもらうぞ、アポロガイスト!」

—FINAL ATTACK RIDE—DE・DE・DE・D
ECADE—

「そんな、非現実的な…」

「非現実的だろうがなんだろうが、これが俺達の現実だ」

思わず漏れた亀山の呟きに突っ込みながら、ディケイドは大きく
飛び上がり、彼自身の必殺技、ディメンジョンキックと呼ばれるそ
れを放つ。

そして…それは、アポロガイストの身をしっかりと捕らえていた
のであった。

ディケイドー6：二度目の戦い（後書き）

こんにちわ。秋月です。

＊

…まるであっさりとケリが着いたかのような終わり方？
うーん、見ようによってはそうですね。

しかしまだ続きます。

歩く陳列棚、コンプリートフォームだってまだ出てませんし。
どこまで引っ張る気なんでしょう。

＊

しかし…おかしいな、クウガは最初、ペガサスじゃなくてドラゴンにするはずだったのに。武器になりそうなものが無かったので、急遽ペガサスに変更。

多分亀ちゃんは警棒とか持ってない…と、思う。

＊

それでは、また次回お会い致しましょう。

特命係一七：現実

門矢が「変身」したピンクと黒の戦士：伊丹もどきの紫の怪人曰く、「ディケイド」と呼ばれていた存在が、光のカードを通してその怪人に「必殺技」とも言える蹴りをお見舞いした瞬間。

そこを中心に、小規模な爆発が起こった。

ガス爆発ほど酷くは無いが、花火ほど可愛くはない：と言ったところだろうか。少なくとも爆発音はかなり大きかったように思う。

だが、被害の方は：音に比べ、それ程大きくは無さそうだ。街路樹の一部は焦げ、路上を覆っていたアスファルトも僅かに削られたが、クレーター化する程では無い。

濛々と上がる煙の向こうに眼を凝らすと、そこには紫の怪人の姿から「伊丹もどき」の姿に戻った男が、膝をつきつつ苦しげに息を荒げながら、怨嗟のこもった眼差しをディケイドと小野寺の「変身」したものである「クウガ」達に向けていた。

「おのれディケイド、クウガ：やはり我々にとって邪魔な存在なのだ：！」

そう言う「伊丹もどき」の手が僅かに動いているのを、右京は見逃さなかった。

武器をもって何かをしている訳では無い。あれは：携帯電話だろうか。何やらこちらを見ながらメールを打っているように見えた。

誰かに連絡を取っている…？

右京が不審に思うと同時に、メールを打ち終えたらしい。追い詰められているはずなのに、何故か相手は：ニヤリと笑った。

右京の経験上、悪人と呼んで差し支えない人間がこう言った笑みを浮かべるのは、十中八九逃げる算段がついた時だ。

それは「ディケイド」も気付いたらしい、弾かれたように「伊丹

もどき」に向かって駆け出すが：

「ここは一旦退くのだ」

僅かの差で、相手の方が早かったらしい。銃の様な武器で「ディケイド」の足元に放つと、彼が怯んだ隙にその土煙に紛れてどこかへと逃げ去ってしまった。

「待ちやがれ！」

慌てて「ディケイド」も追うのだが：どうやら相手の逃げ足の方が速かったらしく、既に姿は見当たらない。

「くそっ！」

悔しそうに吐き捨てると、ピンク色の戦士の姿から、右京達の知る門矢の姿に戻る。いつの間にか緑色の「クウガ」も、小野寺の姿に戻って、気まずそうに拳銃を亀山に差し出していた。

：そう言えば、拳銃を貸していたんだっけ。

あまりにも現実からかけ離れた出来事だっただけに、どこか遠い：自分達とは無縁の「現実」だと思いかけていたのだが：

どうやら、それは許してもらえそうに無い。

思いつつも、亀山は軽く溜息を吐き：一縷の望みをかけて、随分と冷静な様子の右京に、縋るような視線を向け：

「あの：右京さん。これ、夢とか、無かったことには：出来ませんよね、やっぱり」

「出来ないでしょうねえ。現に、こうやって、門矢先生の放った銃弾や、小野寺さんの攻撃した痕跡が残っています」

「道路も少し抉れたしな」

右京に続いて道路を抉った張本人まで、さらりとこれが「現実」

であると言ってしまう軽く亀山は落ち込む。

今まで、色々と「ありえそうに無いけど、想像の範囲内である事件」に関わってきたが：今回ばかりは違う。

変身だの怪人だのは、全てフィクション：スクリーンやブラウン管の中だけの存在だっただけに、亀山はショックを隠せないでいた。

「それにしても、驚きですねえ」

「右京さあん、感心してる場合じゃないですって。あんなの、あつて良いんですか!？」

「僕は、超能力や幽霊と言った存在を信じています。門矢先生達も、そう言った存在なのでしょう」

「あんな子供向け番組のヒーロー：いかにも『仮面ライダー』みたいな奴もですか!？」

「『みたいな』じゃない。まんま、仮面ライダーだ」

門矢の言葉に、右京はどこか嬉しそうに目を見開き、亀山は胡散臭そうな：しかし同時に、どこか諦めたような表情で門矢と小野寺を交互に見つめた。

つい一時間ほど前までの自分なら、「何言ってるんだこいつ」くらいの勢いで見ていたかもしれない。だが、今は：あの「伊丹もどき」や、目の前で繰り広げられた戦いを見てしまった以上、それが「事実」であることくらいは分かる。

混乱したように頭を掻き毟る亀山に対し、右京はいつも通り、冷静だった。

目の前で起こったことは、事実として受け止める。門矢と小野寺が変身し、武器を用いて戦ったのは紛れも無い事実であり、彼らと敵対する存在が、逃げてしまったのもまた事実。

：以前、「伊丹に良く似た顔の男が犯人だ」と言っていたことを踏まえると、先程の「伊丹もどき」が、この連続衰弱死の真犯人と言うことだろう。

先程の「変身」などを見れば、傷痕の残らない殺し方くらい、訳ないのかもしれない。

「とにかく、詳しい話をお聞かせ願えませんかねえ。僕達には、先程の伊丹刑事に似た人物のことも含め、分からないことが多すぎる」
「え、でも…」
「それに、気になることもあります」

右京の「お誘い」を洩る小野寺を軽く無視し、彼は更に言葉を続ける。

その視線を、「伊丹もどき」のいた方向に向けて。

「気になること、ですか？」

「ええ。それを確認するためにも、皆さんにお話を伺いたいんですよ」

そう言って、にんまり笑う右京に…亀山は、僅かに不安を覚えたという。

＊

流石に特命係の居室で話を聞くのはどうかと思ったのか、警視庁の近くにある喫茶店で、右京は門矢達から話を聞いていた。

…彼らは、他の世界から来た存在であること、最初は光の住んでいた世界の滅びを止めるために旅に出たこと、「伊丹もどき」…アポロガイストと言う名らしい彼は、「大ショッカー」なる組織の幹部であること、門矢と小野寺は、それぞれ「ディケイド」と「クウガ」と言う「仮面ライダー」であることも教えてもらった。

そして…今回の一連の事件。少なくとも、「傷痕の無い衰弱死」は、アポロガイストの仕業であることも。

「あの人は、人の命を奪わなければ生きていけない体質で、仮面にある銀色の道具：『パーフェクター』を使って、人の生きる力を奪うんです」

「…成程。しかし、そうなる問題は…」

「注射痕のある被害者、ですね」

光の言葉に頷いた右京に、真剣な表情で小野寺が言葉を継ぐ。

「アポロガイストなら、わざわざ注射を用意する必要は無い。だから俺達は、もう一人、別の犯人がいると思ってるんです」

「だが、これは俺達の問題だ。あんたらが首を突っ込むようなことじゃない」

「それは、関わるなと言うことですか？」

「ああ」

突き放すように、門矢が言う。

確かに、アポロガイストの相手をする事は出来ないだろう。恐らくは足手纏いになるだけだ。

だが、「事実」の一端を知ってしまった以上、右京には…そして亀山も、見て見ぬ振りをする事など出来なかった。

「しかし、実際に先程のような存在が現れた以上、僕達も何か対策を取らねばならないのも事実です」

「って言いますけど、右京さん。俺らに何か出来ますか？」

「出来ますよ、亀山君」

「へ？」

思わず間の抜けた声を上げた亀山に…そして驚いたような顔の門矢達に、右京はいつも通りの、飄々とした顔で言葉を続ける。

自身のやるべきことを、しっかりと見据えた目を、眼鏡の奥で光らせて。

「先程の伊丹刑事に似た男性…アポロガイストさんの相手は、確かに僕達では出来ません。しかし、彼に手を貸している人間が、必ずどこかに潜んでいるはずですよ。アポロガイストさんが立ち去る間際、彼はどこかにメールをしていましたねえ」

「…してました？」

「ええ。気付かなかったんですか、亀山君？」

「すみません。呆然としていてそれ所じゃなかったです」

「連絡をすると言うことは、連絡を受ける相手が必ずどこかにいるはずです」

「はあ…って、ああっ！」

そこまで言われ、ようやく上司が言おうとしたことに気付いたらしい。亀山はかっと目を見開き、難問が解けた子供のように身を乗り出すと、興奮した表情で右京を見つめると、その勢いのまま言葉を口にした。

「相手がいるってことは、まさか！」

「恐らく、彼を支援している人間がいるのでしょう。そして、その人物は…」

「もう一人の犯人!？」

「やや、早計な感はありませんが、何らかの形でこの事件に関与しているのでしょうかねえ」

「もう一人の犯人」が、アポロガイストのような怪人とは限らないし、警察なら被害に遭うかもしれない人物を保護することだって出来る。

もしも、「人間」が罪を犯しているのなら、それを裁くべきは「

仮面ライダー」ではなく、警察だ。

ならば：彼ら警察が取るべき行動はたった一つ。

「終わらせましょう。この傍迷惑な殺人事件！」

特命係一七：現実（後書き）

こんばんわ。

＊

秋月、そろそろダウン気味です。

何とか乗り切りますが：次回の更新はいつになるか分かりません。
ご容赦下さい。

多分、来週水曜には更新：したい。

＊

何か色々問題あるような終わり方ですが、今日はこの辺で失礼させていただきます。
ではまた。

ディケイドー7..もう一人の犯人？

「終わらせましょう。この傍迷惑な殺人事件！」

喫茶店の一角で、何やらやる気満々に言い放った亀山に、呆れたような視線を向けながら士は軽く溜息を吐く。

その溜息の意味は、決して呆れただけでは無いことに、隣でアイスティーをすすっていた夏海には伝わった。

：彼はきつと、安堵したのだ。この「仮面ライダーの存在しない世界」で、自分を受け入れてくれる人物達がいたことに。それは士だけでなく、夏海もユウスケも、嬉しかった。

例えば世界が拒絶しても、その住人まで拒絶した訳では無い。ほんの僅かな：針の先程度ではあるが、それでも、彼らにとっては大きな希望の光だった。

「しかし、そうすると『もう一人の犯人』が誰なのかってことですよね」

「あ、そうか」

夏海の冷静な一言に、立ち上がりかけていた亀山が、はっとしたような顔で呟き、気まずそうに再び席につく。

こちらとしては全く心当たりが無い。大シヨッカーの構成員と言う可能性も捨てきれないが、もしもそうなら、とっくにそれも自分達を襲ってきているはずだ。それをしなかったと言うことは、杉下の言う通り、「この世界の協力者」がいることになる。

しかし：そう簡単に人殺しに協力する人間などいるだろうか。

：実際に手を下すくらいだ、協力だってするだろうが：何か、士の頭に引っかかる。そしてそれは、杉下も同じらしい。

僅かに目を伏せ、何か深く考え込んでいるような仕草をとって

るように見えた。

「けど、あんな怪しい奴に協力しようって思いますかねえ。だって、伊丹にそっくりなんですよ？」

「いや、伊丹刑事に似てることってあまり関係ないような気が…」

「いいや。俺なら協力しない。見たでしょ、あの悪人面」

「あはは…でもそうだなあ…可能性があるなら、協力してるのも怪人とか？」

「でも、この世界に怪人はいないですよ、ユウスケ」

「だよなあ…なら、怪人マニアとか？この世界では『仮面ライダー』はフィクションなんだろう？」

夏海の指摘に、うーんと唸りながらユウスケは困ったように呟いた、その瞬間。

士と杉下は、同時にユウスケに向かってその人差し指を突きつけ…

「それだ！」

「それです！」

これまた同時に、その声が重なった。

その、どこか興奮したような様子の二人に気圧されつつ、ユウスケは…そして亀山も、僅かに体をのけぞらせて士と杉下を交互に見つめた。

二人の目に、確信の色が宿っている。それを見て取ったのか、亀山も一瞬だけ思考を巡らせ…何か、思い当たる節があったらしい。驚いたように目をかっと見開き、次の瞬間には人の良さそうな印象だった顔から、プロの…まさに「刑事」と呼ぶに相応しい顔つきになり、言葉を放った。

「それって…まさか右京さん…」

「ええ。監察医：陽元幽。あの方が、もっとも怪しいと思っています」

「監察医：ですか？」

きょとんと不思議そうな表情を浮かべ、夏海は特命係の二人に問いかける。

陽元幽：初めて聞く名だが、彼らにとっては何やら重要人物らしい。こちらの不思議そうな視線に気付いたのか、亀山は軽く後頭をかきながら、こちらにも分かるように簡単な説明をしてくれる。

「あー：簡単に言うと、この事件の監察医なんですけどね、注射痕を、蜂に刺された痕だって言ったり、趣味も、凄く怪しいって言うか…」

「『仮面ライダー』に出てくる悪の組織が大好きで、最近お気に入り組織が出来たと仰っていました」

「その人が、もう一人の犯人!？」

「その可能性は、低くは無いと思いますよ。何しろ、ご自身の職場に、『ショッカー』のマークの入った地球儀をお持ちでしたからねえ、それを超える魅力的な組織…」

「大ショッカーか」

杉下の言葉を継ぎ、士はいつも通り、どこか呆れたような声で吐き出すように言う。

：考えてみれば、当然かもしれない。仮面ライダーである自分達を受け入れてくれる人間がいるのだ。敵である、大ショッカーを受け入れる人間がいても、おかしくは無い。

単純に、その人物の向かうベクトルの問題なのだろう。

悔しいが、人間には「善人」もいれば「悪人」もいるのだ。

「なににせよ、もう一度陽元先生に会う必要が出てきたようですね

え」

「けど、もう一回会って貰えますかね？何か、自分の世界に浸っちゃってましたけど」

「ええ。ですから、確実に会って頂ける方法を取ります」

亀山の問いに向かってそう言うと、杉下は奇妙な：明らかに何かを企んでいる笑顔を、士達に向けた。

＊

「君が僕の後を引継ぐ監察医？：随分と：若いね」

三十代半ば、精悍な顔立ちの男はそう言うと、まじまじと士の顔を眺めた。姿形はいい大人なのに、その仕草はどこか子供っぽい。

この男が、もう一人の犯人と思いき存在：陽元幽か。

思うと同時に、杉下達が怪しいと評した理由も納得できた。部屋のいたるところに、怪人に関する「何か」が置いてある。

古代文字の書かれた羊皮紙、スマートブレインのロゴマーク、机上にあるランプは、ラウズカードを模したものだろうか。

成程、確かにこれは：怪しい。思いながら、士は視線を陽元に戻すと、いつも通りの不遜な態度で軽く頷き：

「そうだ。アンタじゃ信用できないからってことで、俺に回されて来た」

「君みたいな若造に検死させるなんて：この街も：いや、この世界も終わりだよ」

やれやれと呟きながら、陽元は呆れたように言い放つと、机の中から検死結果の書類らしき紙束を取り出し、どすりとそこに置いた。
：杉下の言っていた、「確実に会ってもらう方法」：それは、士

が「引継ぎ」をすることだった。

実際、士は再検死を命じられている。以前の監察医に話を聞くらしいのことは、出来るはずだ。そして、どうやらその読みが当たったらしい。陽元は渋々と言わんばかりにこの部屋の扉を開け、自分達を招き入れたのだ。

まさかこうも上手くことが運ぶとは思っていなかったが：随分とこの男も慌てていたらしい。部屋中、色々なものが散乱している。まるで、何かを隠そうとしていたかのように。

「：迷惑だと思うんなら、断ればいいじゃない」

「それこそお断りだ。俺は真実を見つけ出す。アンタが隠したって言う、真実を」

「気に入らないなあ：それが君の『正義』？」

その精悍な顔を歪め、陽元はどこか、敵意の籠った視線を士達に向けた。

その顔は、今まで出会った「敵」と同じ。自分の邪魔をする者を排除したがる：子供のような思考が、見て取れた。

「だから、『正義の味方』って嫌いなんだ。正しいことをしてるんだから、他人の邪魔をしても良いと思ってる」

「私達、邪魔するつもりなんて：」

ありません、と夏海が言うよりも早く、士は彼女の言葉を遮るようにして、一歩前に進み：

「別に正義の味方を気取るつもりは無い。だが、俺は少なくとも、十人目の死体を見て、注射痕だと断定している。それを覆されたことに腹を立ててるだけだ。ま、結果として、アンタの邪魔になった訳だが」

「…本当に、君ってムカつく」

「俺も、アンタが嫌いだ」

苛立ちを隠さなくなった陽元に、士は不敵な笑みと共にその言葉を返すと…彼の前の席に、堂々と腰掛けた。

まるで、ここに居座る気満々と言わんばかりに。

「…なんで座ってるの？早く帰ったらどうなのかなあ？」

「帰りたいが、アンタに話を聞きたいって奴らがいるんでね」

士がそう言うと同時に、部屋の扉が開く。

入って来たのは勿論…杉下と亀山…二人きりの特命係だった。

「お邪魔します」

「どおも」

ぺこりと頭を下げる杉下と亀山を、呆然とした表情で眺めた後…今度はその顔を真っ赤に染めて、殺意すら籠った目で士達三人を睨みつけた。

余程、他人を入れたくなかったのだろうか。

呑気にもユウスケはそう思ってしまいが、怒っている側にとっては相当な問題だったらしい。

「この…貴様ら、グルかよ！」

バンと机を叩きながら怒鳴る様は、本当に子供のようだと思う。そんな彼の様子を軽く流し…杉下と亀山は、陽元の前に立ったのである。

ディケイドー7..もう一人の犯人？（後書き）

こんにちわ。秋月です。

来週頭に更新出来そうに無いので、今日、更新してしまいます。

＊

それにしても…ここに来て展開早いなあ…

＊

まあ、もう一度特命係の居室に戻ってもらいますが…

いかんせんこの状況。下手すると海東は一体どうなった!? って感じで終わりそうな予感がしなくも無い。

早いトコ出してあげないと…やっぱり小野田さんとペアが良いかな…

ラストバトル前の台詞が、既に出来上がってしまったっているってどうなんだろう。

＊

それでは、次回お会い致しましょう。

特命係―8―忠告

自分達の姿を見た陽元の顔が、一瞬にして引きつるのを、右京は見逃さなかった。

顔を真っ赤に染め、悪鬼のような形相でこちらと門矢達を睨みつける様は、とてもでは無いが「医者」と言う職に従事している者とは思えない。

「この…貴様ら、グルかよ！」

苛立ったように机を叩く陽元の様子を軽く無視して、右京と亀山は門矢達と目的の人物との間に立った。

門矢達が「仮面ライダー」ならば、多少陽元が怒った所で何と言うことも無いだろうが…やはり職業柄、危険な雰囲気を持つ存在と対峙した場合、その眼前に立ってしまう。

市民を守るのが、警察官の務めだと認識しているからだろう。

「……で？何か、用？」

「ええ。陽元先生にお伺いしたいことが」

「……何？」

機嫌の悪さも隠そうともせず、ふいとそっぽを向きながら陽元は右京に声を返す。

言外に「さっさと帰れ」と言っているように思えるが、そんなことを気にしていたら捜査など出来ない。それに…こう言った扱いは、特命係の二人にとっては「いつものこと」だ。

いつも通りの、読めない表情で右京は口元を緩めると、軽く首を傾げたような仕草をとって言葉を紡ぐ。

「門矢先生の見解との不一致の理由について、お教え頂けないかと思ひまして」

「…そっちの彼の検死が、未熟なだけでしょ」

「蜂に刺されると腫れませんか？」

「だから！偶々だろうって前にも言っただろ！実際に連中の体からは蜂毒しか出てこなかったよ！」

苛立ち、怒鳴るようにしながら、陽元はまるで絞め殺したがっているような視線を二人に…更にはその後ろにいる門矢達にまで向ける。

後ろにいた光が、一瞬びくついたような気配がしたところを見ると、どうやら彼女はごく普通の少女らしい。

狂気と殺意に満ちた「人間」を見るのは、ひょっとしたら初めてなのかもしれない。

思いつつ、亀山は光を庇うように場所を僅かに移動し、それに合わせる様に右京は目の前に置かれた検死記録を指差す。

「この検死記録…拝見しても？」

「やだね。」

「はいい？」

「それを見たいなら、令状を持って来いって言ってるの！僕、自分の物を勝手に見られるの、嫌いなんだよ」

「…成程」

「だが、今は俺に渡された物、つまり俺の物だ。俺が許可すれば、こいつらは見ても良いんだよな？」

にんまりと、してやったりと言わんばかりの顔をしながら、検死記録を軽く叩く門矢の言葉に、陽元は一瞬その言葉の意味を理解できなかったのか、不思議そうに首を傾げ…

すぐに、その言葉の意味を理解したらしい。

目の前に置いてある書類は、全て「門矢士に引き継いだ物」：つまり、今、書類の所有権は、門矢にあるのだ。

もしかすると、門矢が「引継ぎ」をしたのは：特命係の二人を陽元に会わせることと、もう一つ：この「検死記録」を手に入れるためだったのではないだろうか。

そう思うと、陽元の頭には、更に血が昇る。

：殺意すら湧くほどの、激しい怒りが彼を襲うが：それをぐっと堪えているのか、ギリギリと奥歯を噛み締め、拳をわななかせて耐えていた。

「君：本当にムカつくなあ！」

「良く言われる」

「~~~~！！とにかく、もう帰ってくれ！気分悪い！」

それだけ言うと、陽元は何も答えたくないと言わんばかりに、彼らに背を向け、黙り込んでしまった。

「それでは、僕達はお暇しましょう」

「です、ね。失礼しました」

ぺこりと頭を下げ、亀山がそう挨拶した直後。

右京は何かを思い出したように、ああ、と呟き：

「もう一つだけ、お伺いしたいのですが」

「……」

相手は既に、だんまりを決め込んでいるらしい。だが右京は気にせずそのまま問いを続ける。この質問が、本題だと言わんばかりに。

「アポロガイストと言うのは、何者なのでしょうねえ……」

右京のその問いに。一瞬だけ、陽元の体が跳ね上がったのを、彼は見逃さなかった。

「ご存知ですか？」

「……………GOD秘密警察第一室長。『仮面ライダーX』に登場した、GOD機関の幹部」

「ああ、そうだったのですか。それでは、この間のお話は悪戯でしようかねえ」

「この間の、お話…？」

「いやあ、実はこの間、『犯人はアポロガイストだ！』ってタレコミがあったんですけど、何者なのかなあって。でも、そっかー。『仮面ライダー』の怪人の名前かー。右京さん、こりゃハズレですよ」

ちらり、と陽元を横目で見ながら、亀山は相手の反応を窺う。

亀山は、他人を引っ掛けるとき、わざとらしいまでの笑顔を作る。もっとも、それを知っているのは長年の相棒である右京だけ。

今回のこの流れも、実はあらかじめ右京と打ち合わせておいたものだ。

：…もしも、本当に、この男が「伊丹もどき」…アポロガイストと繋がっているのなら、何らかの反応があるはず…そう思ったのだが、どうやら当たりらしい。

あからさまに陽元の落ち着きがなくなっている。勿論、今までも苛立っていたせいで落ち着きがあるとは、とても言える様な状態ではなかったが、今は明らかにそわそわしている。

それを確認すると、右京は軽く目を細め…

「ああ、これは失礼。つい長居をしてしまいました。それでは、今度こそお暇しましょう」

「ナツミカン、ユウスケ。俺達も帰るぞ」

出て行く右京達に続くようにして、門矢達もその部屋を出る。
：後に残るは、顔面蒼白な陽元幽、ただ一人。
そして完全に人の気配が消えたのを確認すると：彼は、携帯電話で、どこかへ連絡を始めたのであった。

＊

陽元の部屋から、五人が特命係の居室に戻るや否や。
彼らの視界に、二十歳前後の見知らぬ青年が、使い捨てカップでコーヒーを飲んでいる姿が目に入った。
誰だろうと思う前に、青年は右京達の後ろに立つ門矢を見つけると、軽く口元を緩め：

「やあ、士」

「げ、海東」

軽く手を上げて挨拶をする青年に、心底嫌そうな表情で小野寺が一步後ずさる。どうやら知り合いらしいが、仲が良いとはお世辞にも言えそうに無いようだ。

門矢もまた、軽く眉を顰め、海東と呼ばれた青年と、何故か右京のチェス盤を交互に見やり：

「何だ、お前の狙っている宝とやらを盗みに来たのか？」

「ふふっ。確かに目の前にあるこのチェス盤も魅力的だけど、まずはレア物の方をゲットしようと思ってね。その在り処に案内してもらうためにも、回転寿司に行く所なんだ」

「回転寿司い？」

小野寺が、海東の言葉をオウム返しにした瞬間。

今度は、彼らの後ろから：特命係の二人にとっては、割と聞き慣れた声が響いてきた。

「そ。これから二人で行くんです」

「小野田さん!？」

小野田公顕。隣の建物：警察庁の住人。特命係に厄介な仕事を持つてくる、高官中の高官。

一部では狐狸より性質が悪いと噂される、敵にも味方にもなりうる人物。

「ゴメンゴメン、待ったかしら？」

「それ程でも無いさ。目の前のお宝も興味深かったしね」

海東と言う青年と小野田は、まるで親友であるかのような笑顔で言葉を交わす。

門矢の知り合いと言うことは、恐らくこの目の前の青年も「仮面ライダー」なのだろう。

一体どこで知り合ったのか甚だ疑問ではあるが、それを聞いたら、何やら厄介なことになりそうな気もする。

「…官房長、回転寿司に行かれるのでしたら、くれぐれも皿は戻さないように」

「あら、ダメなの？」

「そりゃあダメだろ…」

右京の苦言に、本気なのかとぼけてるのか分からない表情で言う小野田に突っ込む小野寺。

「ああ、そうそう。杉下、お前今、陽元先生を突いてるんだって？」

知事から私宛に連絡が来ました」

「案外と、行動が早かったですねえ」

陽元の行動を予期していたのか、右京は特に驚いた様子も無くそう呟く。

いつの間にか小野田は特命係の居室にちゃっかりと腰を下ろし、立ったままの右京の顔を見やると…彼にしては珍しく、どこか心配そうに見える表情で言葉を紡ぎだした。

「あまり、関わらない方が良いと思いますよ」

「はいい？」

「あの人ね、今、凄く危険な団体に属してるの。今度、選挙もその党から立つみたいですよ？」

「政治がらみですか…」

「ちなみに、その政党の名前は『大シヨッカー党』だ」

げふっ！

光の呟きに、海東が返した瞬間。コーヒーを飲んでいたユウスケが、むせたらしい。極力口の中のコーヒーを吹かない様、目を白黒させながら自分の胸をトントンと叩き、ぜいぜいと呼吸を整える。そして、門矢にもその一言は意外だったのだろう。きょんとした表情になった直後、すぐに海東に向かってツツコミを入れる。

「ちょっと待て、あの連中が国政に出向くってのか!？」

「その前に、何ですか、その何の捻りも無い名前は!？」

「そう騒ぐなナツメロン。何でも、顧問に死神博士、党首に地獄大使、幹事長にはジャーク将軍、アポロガイストは幹部の一人だって話だ」

「ぱっと聞くとふざけるように聞こえるけど、かなり本気みたいですよ?これ、党員名簿ね」

そう言って小野田が差し出した「党員名簿」を眺めながら……右京と亀山は哑然とし、門矢達は頭痛を堪えるようにこめかみを押さえる。

平然としているのは、小野田と海東。そして……後ろで遠巻きに眺めている、野次馬達だけであつた。

……もっとも、野次馬にこの会話は聞こえていなかったのだらうが。

特命係―8―忠告（後書き）

こんにちわ。

昨日更新のつもりが、誤ってデータを消去してしまった秋月です。

＊

相変わらず…話の展開が強引ですね…

自分で分かっているなら、何とかすれば良いのにとわたくしも無いのですが、何とかする気は（指摘されるまで）無いようです。

＊

小野田さん＆海東、再登場。

今度は二人仲良く回転寿司に行く前らしいです。

待ち合わせ場所に特命係居室。しかも何気に重大情報握ってたりする辺りが彼らしいかな、と個人的に思っていたりいなかったり（どっちだよ）。

＊

「大ショッカー党」のネタは、確か夏の劇場版の時の宣伝か何かであつたように思います。

実際、僕は見てみたいです。選挙カーの上で演説している地獄大使や死神博士。勿論、ジャーク將軍、アポロガイストも。

…ちなみに、確実に僕なら一票入れます。小選挙区も比例も。

＊

はてさて、「相棒」にとってはおなじみの「上層部からの圧力」がかりました。

どうやって最後に持っていこうか…

そろそろ本格的に佳境に入らないといけないでありますね（何者だ、僕）。

＊

それでは、また次回、お会い致しましょう。

ディケイドー8・・「世界の破壊者」と「人材の墓場」

海東に出迎えられ、特命係の上司らしい、食えない雰囲気の方……小野田さんとか官房長とか呼ばれていたその男達が放った事実……「大ショッカー党」なる物の存在であった。

しかも、ご丁寧にマニフェスト付き党員名簿まで渡してくる始末。そのマニフェストに書かれているのは……

――全世界を、一つに纏め上げます！――

何も知らずに見る方には、「世界のリーダーになる」程度の文言に見えるだろうが……士達には、その真の意味が分かっていた。要するに連中は、「幾つもの世界を融合させて、消滅させます」と宣言しているのだ。

悪の大組織が、隠し立てもせずに堂々と選挙に出てくる。

とある宗教団体が、自ら政党を立ち上げて立候補すると言う話によく聞くんが、それと似たような感覚で、選挙管理委員会も受理したのかもしれない。

……どこまでも平和なのだ、この世界は。

仮面ライダーや怪物は、御伽噺の住人。故に、「大ショッカー党」などと言う名前も、「ああ、仮面ライダー好きの集まりか」程度に考えられたのかもしれない。

ズキズキと痛むこめかみを押さえながら、士は呆れたような視線をその党員名簿に落とした。

「……亀山君、陽元先生の名前もありますよ」

「あ、本当だ」

杉下の言葉に、我に返ったらしいユウスケが同意の声をあげた。

確かに、党員名簿の真ん中辺りに、「陽元幽」と書かれている。
：どうやら、先程会った監察医：彼が「もう一人の犯人」らしい。
と、なるとアポロガイストも彼のところにいるのかもしれない。
と、考えられなくも無いのだが：いかんせん、党員名簿には他にも一般人の名前が書かれており、「陽元犯人説」を完璧に証明する証拠にはならない。

小野田とか名乗った男の元に、圧力とも取れる電話があったと言っていたことを考えると、陽元は限りなく怪しいのだが：「クロ」だとは、断言できないのも事実であった。

「せめて、アポロガイストがああ胡散臭い監察医の所にいるとでも分かれれば、話は早いが…」

「そう簡単に尻尾を掴ませてはくれないでしょうねえ…」

士と同じことを考えていたのか、杉下も僅かに目を伏せながら、溜息混じりに言葉を継ぐ。

そんな、重苦しくなりかけた空気を壊したのは：どこか楽しげな顔をした、小野田。

彼は飄々とした顔で士と杉下を交互に見つめると、やがてくすりと小さく笑い：

「それにしても、面白い組み合わせだね」

「何がでしょう？」

どこか楽しそうにそう言った小野田に、杉下は怪訝そうに答える。
そんな彼の顔を見るのが楽しいのだろうか。小野田は珍しくその口元を僅かに緩めると、隣にいた海東とその顔を軽く見合って：

「いえね、『人材の墓場』って呼ばれてる杉下と…」
おまえ

「『世界の破壊者』って呼ばれている士が、タッグを組んでいる。」

「どちらも、あまり良い意味では無いだろう？」

海東は小野田に次いで、示し合わせたように言いながら、右手で指鉄砲を作ると、軽くそれを撃つような仕草をした。…トレジャーハンターであり、同時にスナイパーでもある、彼の癖だ。

「士君は、破壊者なんかじゃありません！何度も言わせないで下さい！」

「やれやれ。ナツメロンは随分と士を信じてるらしい」

怒る夏海に対して、どこか呆れたように海東はそう言うと、ひょいと軽く肩をすくめ：

「じゃあ、僕達はこの辺で失礼しよう。早くお宝が見たいし、それに寿司も食べたいしね」

「そう言うこと。それじゃあ私達は行きますけど、忠告はしたからね。杉下、お前にはまだまだ働いてもらう気なんですから」

死なないようにね、とだけ言い残し、海東と小野田は二人仲良くその場を立ち去ってしまった。

…「世界の破壊者」である士と、「人材の墓場」である杉下。確かにぱっと聞いた限りでは、あまり良い意味には取れない。むしろ、こちらが悪人のような気さえしてしまう。

それでも彼らは…少なくとも士は、そのまま突き進むつもりでいる。

それが、彼の持つ「正義」なのだから。

「なあ、士。どうにかして、あの陽元って人とアポロガイストのつながりを、見つけられないかな…？」

「俺も小野寺さんに同感です。右京さん、この際張り込みましょう

よ、陽元先生のところ!」

妙な所で気が合うらしい、ユウスケと亀山が、それぞれに熱の籠った声で言う。

そんな二人を、土はどこか呆れたような視線で、そして杉下は冷静な視線で見やった。

世の中そう簡単にことが運ぶと思ったら大間違いである。今さっき陽元の元を訪ね、それなりのかまかけをした。その結果、杉下達には「圧力」がかかったのだ。

：あの男は、見た目ほど愚かでは無いらしい。自分の使える権力を目いっぱい使ってきている。それを考えると、そうさっきの今で行動を起こすとは、思えない。

少なくとも、士ならそうする。相手が静かになるまでじっと待つ。

「あんたはどう思う? あいつは動くと思うか?」

「動かないでしょうねえ。動かずじっと待ち:その上で、別の人物に疑いを向ける工作を始めるでしょう」

「だろうな。俺もそう思う」

自分のカップに、高い位置から紅茶を注ぎつつ答えた杉下に、客用に用意されたパイプ椅子でふんぞり返るようにして腰掛けている士も同意した。

少なくとも、陽元が犯人の一人なら:彼はきつと、動かない。彼自身からアポロガイストと接触するようなことも無いだろう。

逆は、あるかもしれないが。

「:門矢先生、陽元先生の書かれた報告書:拝見してもよろしいでしょうか?」

「ああ:そう言や、そんな物もあったっけな。:これだろ?」

杉下に言われるまで、士は本当に報告書の存在を忘れていたらしい。脇に抱えていた青いファイルを、それごと杉下に差し出した。どうやら、改竄されているかどうかを確認するつもりらしい。

士も、渡された時にぱっと見た程度だったが、特にこれと言って大きな改竄の後は見当たらなかった。

：最初から、「正体不明の不審死」で片付けるつもりだったのだろうという印象があった。最初から、確信を持って「原因不明です！」と言っているような：そんな印象を。

そんな風に、士が考え込みそうになったその時。

眼鏡をかけた紺色の制服の男：確か、米沢とか言う鑑識が、ひょいと特命係の居室に上がりこんできた。

「杉下警部：と、通りすがりの見学者さん」

「門矢士だ」

「おや、米沢さん」

「どうかしたんですか？」

「はあ、実は：ご依頼頂いていた件で、少々厄介なことが判明致しました」

ちらりとこちらを見ながらも、米沢はどこか歯切れ悪くそう言葉を放つ。

特命係の二人は、何かを彼に依頼していたらしい。鑑識の人間に依頼すること：証拠品の鑑定か何かだろうか。

思いながら、夏海とユウスケは興味深そうに米沢を見やり、士は特に感想を抱いた様子も無くコーヒーメーカーから勝手にコーヒーを注いでいる。

「厄介なこと、ですか？」

「あのー、どれくらい厄介でしょう？」

「そうですねあ：例えて言うなら、逃げた妻を探し当てたものの、

既に再婚していたという事実を知ってしまうくらい、厄介なことです」

…どんな例えだ、それ。

心の中でのみツツコミを入れつつも、ユウスケは黙って米沢の言葉を待つ。

亀山と杉下も、そのまま続きを促すかのように、真剣な視線で米沢を見つめていた。

ディケイドー8・・「世界の破壊者」と「人材の墓場」（後書き）

こんにちわ。

約一週間ぶりの更新となりました、秋月です。

＊

それにしても中途半端に終わった感じが否めません。

相棒サイドもさっさと更新したいと思います。出来れば今日中に。

そして：そろそろ本気で解決させないといけませんね。

ダラダラと続けてきたので、空気もだれてますし。

最初からだれていると言う手痛いツツコミはなしの方向でお願いいたします。

＊

それでは、次回またお会い致しましょう。

久し振りに米沢さんを出せて、個人的に嬉しい秋月でした。
ではまた。

特命係一〇：伊丹憲一

亀山と右京、そしてこちらを注視する「見学者」達の真剣さに気圧されたのか、それとも逆に決意をしたのか：米沢は一拍呼吸を置くと、唐突に二人分の人物データを抱えていたファイルから取り出した。

そして、資料に書かれた名前は……

「例の、被害者になるかもしれないと言われた人物達です。剣立長氏、そして尾上 官氏：こちらは、その写真です」

「検索に引っかけたってことは：ひょっとして、前科持ち？」

「いえ。このお二人は：被害者としてデータが残っていました。剣立氏は経営していたレストランでの暴行騒ぎ、尾上氏は自転車を盗まれています。被害届が出ています」

確かに、米沢に手渡された資料を見る限り、前科があるわけでは無さそうだ。

写真の顔も、見るからに人の良さそうな料理人と、年頃の高校生、と言った感じだ。

「それで：厄介なことって言うのは、何なんですか？」

横からそう言ったのは、小野寺。通常部外者相手にここまで警察内部の情報を話す様なことはしないのだが、情報提供者と言うこともあり、米沢の口はいつもより数段軽くなっていた。

「それが：尾上氏はともかく、剣立氏は都内にはおりません」

「はいい？」

「都内にあった店を畳み、今は実家のある青森で小料理屋を営んで

いるようです。一国一城の主、羨ましいですなあ」

呑気に言う米沢に対し、亀山は心のうちで呟く。

確かにそれは厄介だ、と。

青森にいうというのであれば、その人物が本当に狙われているとしても、警視庁の人間は合同捜査で無い限りは越権になる。

あくまで、警視庁は東京都内の事件を担当する警察なのだ。

仮に青森県警にそのことを伝えたとして…信じてくれるとは到底思えない。

万が一犯人が青森に行つてまで、この「傍迷惑な殺人」を続ける気なのであれば、こちらは…少なくとも自分達警察は、動けない。

仮に動ける門矢達が向かったとしても…あの、瞬間移動とは思えない消え方をした「伊丹もどき」ことアポロガイストに、追いつけるかどうか……

「……そうですか。どうもありがとうございます」

「いえ、果たしてこのような情報でお役に立てたかどうか…他に何かご用命があれば、お受けしますが」

心底申し訳無さそうに言いながら、米沢はぺこりと頭を下げる。敵の多い特命係にとって、彼は数少ない味方だ。それも、根っからの。

そうだと、特命係の二人も知っている。

だからこそ…右京は、手に持っていたファイル…陽元の書いた「報告書」を差し出した。彼なら、ひょっとしたら、こちらの気付かなかった何かに気付いてくれるのでは無いか…そう思つて。

「このファイル、改竄かいざんされていないかどうか…調べていただだけませんか？」

「承知いたしました。なんだか少し前にやっていた医療ドラマのよ

うですなあ。『ホワイトタワー』でしたか」

「ああ、修正液を皆でカシャカシャ振るシーンが印象的だった、あれ！弁護士役の人が、またハマリ役でしたよねー」

「…ああ、それともう一つ、お願いしたいことが」

「何でしょう？」

「次回で構いません。白楽さんの『火炎太鼓』のDVD、今度お貸し願えませんか？」

緊張したような空気を断ち切るように…しかし言った本人は至って真面目に、右京はそう言葉を発したのだった。

「剣立氏が都内にいないと分かった今、やはり早期に解決すべきだと言う結論に達した訳ですが」

「問題は、『どうやるか』…だろ？」

「その通りです」

早めに動かないと、余計な犠牲者が増えてしまう。

そうなる前に何とかして、アポロガイストを見つけ、陽元との関わりがあるかどうかを調べなければならない。

しかし…門矢の言う通り、問題は「どうやるか」にある。

これと言って良い方法がある訳でもなく、かと言ってじっとしていられる訳でもない。

何とかしたいのに、その方法が見つからないもどかしさが、亀山を…そして右京をも、苛んでいた。

焦っても、良いことは何も無いとは分かっているのだが、既に十二人が犠牲になっている。十三人目の被害は、なんとしても防ぎたいところだ。

そんな、八方塞の状態になった特命係の居室に。

今度はあまり来るはずの無い人物が、顔を覗かせた。
その人物は、自分に気付かずうんうんと唸っている亀山を見つけると、軽く鼻で笑い…

「特命係のウサギ山あ、無い頭使ってなあに考えてんだよ？」

「亀山だっの！何か用…：か、よ…：…？」

声の主…伊丹に対し、もはや条件反射を通り越して脊椎反射の域にまで達したツツコミを亀山は返すが…その言葉の最後が、すぼんだ。

彼の目は軽く驚いたように見開かれ、そのまま固定されてしまう。同じように、小野寺と光もピタリと固まり、どこか疑わしそうな視線をこちらに送ってきている。

門矢と右京の方は、相変わらず何を考えているのか分からないが。

「ほら、固まった。伊丹先輩に白って、やっぱり似合いませんよね」「すぐに汚れちまうのになあ…」

「るせえ。たまには白も着てみたいんだよ、悪いか！？」

芹沢だけでなく三浦にまで言われ、白いスーツを着込んだ伊丹は、どこか拗ねるように言葉を返す。

しかし…あまりにも、似ている。

門矢達の追う、この「殺人事件」の犯人の一人…アポロガイストに。

柄と口調が少々悪いが、黙って立っていればアポロガイストに見えるてしまう。

…いつだったか、小野寺が伊丹を出会い頭に殴りつけたと言っていたが、今ならその理由が分かる気がする。

「あー…：お前…伊丹、だよな？」

あまりの出来事に呆然としつつも、亀山は恐る恐る…それこそふるふると震える指先でその顔を指しながら、これまた震える声で問いかけた。

その声が、笑いを堪えているとでも思ったのか…伊丹は眉間の皺を更に寄せ、下からねめつける様にしながら亀山を見やり…

「あぁん？ 亀、お前あまりの暇さにとうとうボケたか？」

「……この果てしなくムカつく物言いは、間違いなく伊丹だな。うん、安心した」

「って、何ホッとしてやがんだ。気持ち悪い」

パシリと亀山の指を叩き落とし、心底気色悪そうにそう言う伊丹。そんな彼を見つめていた門矢の顔が…そして右京の顔も…何かを企んでいるような、そんな素敵な笑顔になったのを、光は見た。

「土君…何を企んでるんですか…？」

「人聞きの悪いことを言うな、ナツミカン」

「どうやら、門矢先生と僕は今、同じことを考えているようですね」

「何すか、右京さん。考えてることって？」

「決まってるだろ。こいつ、使えないか？」

「……成程」

「おい、何だよ？ 人の顔じろじろ見やがって…」

不快そうに言う伊丹と、その横で不思議そうな顔をしている芹沢、三浦とは対照的に。

亀山は…いや、亀山「達」は、にんまり笑うと、じりじりと伊丹に歩み寄っていく。

そしてそれは、いつの間にか「伊丹包围網」と化しており、じりじりと、その輪が小さくなっていくのが分かった。

「え？おい？う…うわあああっ！？」

その日。

捜査一課、伊丹憲一刑事は、今までの人生で未だかつて上げたことの無い悲鳴を上げたが…

「結局、亀ちゃんと彼は仲が良いんだねえ…」

角田を始めとする「外の住人」は…そして三浦と芹沢も、助けられなかったと言う…。

特命係一9：伊丹憲一（後書き）

こんばんわ。

何とかエンドが見えてきました。

＊

ごめんね伊丹刑事。やっぱりやるからには、こう言った方法を取ろうと思うんだ。

クライマックスに向けたいし。

証拠が無いなら自白を取ろう！

冤罪はこうやって作られる。

…って、そんな訳無いから。

＊

それでは、次回またお会い致しましょう。

合同－1：自白と逃亡

監察医、陽元幽には、幼い頃からの夢があった。

子供の頃に見た、特撮番組。その主人公が改造人間にされるシーン。

：そのシーンに、彼は子供ながらに強い憧れを抱いた。

他人を、手術する：人でないモノに変えてしまうその映像は、それはそれは魅力的に見えた。

：それ以来、彼は「医者」と言う職業を目指すようになった。

人に手術を施すということは、その人の「自然な姿」を奪うことだと思ったから。そして何より：倫理的に許されぬ行為だと分かっているながらも、人をいつか、「改造」してみたいと思ったから。

成長するにつれ、その願望は日に日に強くなっていった。

生きた人間を勝手に改造しては法に触れる。故に、司法解剖学を学び、遺体検案が出来るような身分を手に入れた。

解剖学や監察医という仕事は、それなりに楽しかったし、改造手術が出来なくても、他人の死因を調べるのはとても興味深かった。

見るも無惨な姿になった者から、見た目では判断できない死因を抱いた者まで、彼の周囲には「死」がありふれていた。

勿論、医者として人の命を救う仕事もした。誰かの命を救い、礼を言われることも、まんざら悪い気はしなかった。

それでも：彼は時々、奇妙な虚しさを覚えた。

人の死の原因を調べ、人の命を救う。悪くはない。だが：満足も出来ない。

彼は、人の命を、弄びたかった。

幼い頃に見た、顔にペイントのある医者のように。

そう思っていた彼に：：一人の男が、姿を現した。

そして、彼に告げたのだ。：人の命は、弄んで良い物なのだと。迷惑な存在になれば、自分が憧れていた存在に近づけるのだと。

…もつと迷惑に生きて良い…
思えば、その時から……彼は、壊れていたのかもしれない……

「えーつと……」

自宅でくつろぐ陽元が持っているのは、何かのリストだろうか。
人の名前と、上の方には赤いバツと青いバツの二種類がついている。

最初の方は赤いバツが多いのだが、下の方になると徐々に青いバツが目立ち始めていた。

「『あのお方』が今は動いているとして…次は……」

独り言のように呟いたその時。チャイムが鳴った。

―何だよ、こんな時に……―

舌打ちしたい気分になりながらも、彼は玄関に赴き、ドアスコップを覗く。

外には、白いスーツを着た中年の男性が、眉間に皺を寄せて立っていた。

―あのお方だ！―

その人物を見止めるや否や、陽元は子供のように無邪気な笑顔で扉をあける。どうやらドアの前に立っていた男に対しては、警戒心が薄いらしい。

「お帰りなさい！どうしたんです、チャイムなんか鳴らして？あな

たなら、何もせずに入ってきて頂いて結構ですよ？」

一言も喋らないその男を、彼は嬉々として招きいれながら、いそいそと台所に向かい、茶の用意をする。

客人は、新しく買った茶葉を、気に入ってくれるだろうか。良い茶葉を手に入れたので、一番に呑んでもらいたい。

きっと長旅で疲れているはずだ、何か精のつく食事でも作った方が良いでしょうか。いやいや、彼が帰ってきたということは、逆に英気を養った証拠のはず、下手なことをするより、とにかく次の指示を仰いだ方が良くもされない。

考えるだけで、陽元の口元は緩む。

「……おい」

「はい、何でしょう？」

「何でそんなに嬉しそうなんだ？」

眉間に皺を寄せ、心底不思議そうに問うてくる相手に、陽元はうつとりとした視線を向ける。

相手の視線が、薄ら寒そうな物になったのにも構わずに。

「あなたは、僕の夢を叶えてくれた。それに…大シヨツカーの幹部だ」

はあ、と恍惚の吐息と共に吐き出された一言に、男が更に眉を顰めた。

珍しいこともある物だと、陽元は茶を入れながら思う。彼の知っている男は、そうそう嫌そうな顔をすることがない。

優しいとはいい難いが、それでも少なくともこんな気だるそうな顔をすることは少ない。

…唯一の例外として、彼の「敵」に出会った時は…どこか不機嫌

そんな顔をすることはあるが。

「まさか…今回も、ディケイドとか言う奴と遭遇されたのですか？」
「…いや」

相手の否定の言葉を聞き、陽元は軽く胸を撫で下ろす。

邪魔が入らなかったのは良いことだ。もしも邪魔が入ったのなら…目の前の男の「目的」は果たせなかったことになる。

それは彼にとっても…そして自分にとっても、迷惑なことなのだ。何しろ、「次」の行動に移れなくなってしまうのだから。

そう…命を弄ぶことができなくなってしまう。

「それで…次はどちらが殺しましょう？」

「…何？」

「ですから…」

恍惚の表情のまま、訝る相手を気にも留めず陽元は瞳を輝かせて、更なる言葉を相手に向かって解き放つ。

「次の、『不審死』はどちらが引き起こそうかと聞いているのです。次は確か、都内の高校生でしたよね？ だったら、いくらでも死因をでっち上げられる…だから、久し振りに、僕に殺させて下さい、アポロガイスト様」

にこりと。それはもう綺麗な笑顔で相手…アポロガイストに言いながら、陽元は待ちきれない子供のよう、机の引き出しから、何やら透明の液体の入ったアンプルと注射器を取り出してそれを手の内で弄ぶ。

アンプルは最初にアポロガイストに出会った時、もらった物だ。何でも、大ショッカーの生み出した強力な蜂毒らしく、一度も蜂

に刺されたことの無い人間でも、アナフィラキシーに似た症状を引き起こして死に至る。

これを用いて陽元が殺した人間は全部で十一人。アポロガイストがパーフェクターを奪回するまでの間、彼の指示した人間を殺し、仮にデイケイドと呼ばれる敵が現れた際に、「大シヨッカーの仕業」と思わせるために様々な工作もした。

死因を「不明」としたのもその一つ。「正義の味方」ならば、見過ごそうとはせずに真っ先に動くはず。

警察が自分に疑いを持ったところで、「蜂によるアナフィラキシー・シヨック」とでも診断すれば、納得するしかないのだ。

初期に殺した相手は既に火葬されているし、再検死できる遺体に残っているのは、紛れも無い蜂毒なのだから。

予想外だったのは、警察が動いた早さと、監察医の変更。

案外と、警察も馬鹿では無かったらしい。だがそれも、「知事の甥」と言う立場を利用して黙らせたし、やってきた監察医はあまりにも若い。検死記録を読んだところで、改竄など無いし実際に蜂毒だと認めるに違いない。

邪悪な笑みを浮かべながら、彼が思ったその瞬間。

目の前の男の顔が、まるで汚らわしい物でも見るかのように、陰しい物になった。そして：

「今のは、自白ととって良いんだな？」

「え……？」

「聞きましたか、警部殿？」

言いながら、目の前の男：アポロガイストだと思っていたその存在は、どこか嫌そうに顔を顰めながらも、玄関の扉を開ける。

そこにいたのは：眼鏡をかけた、スリーピースのスーツを着た紳士然とした男性と、濃い緑のジャンパーを羽織った背の高い男性。そしてその後ろには首からマゼンダ色のトイカメラを提げた青年と

彼より僅かに背の低い青年、そして髪の長い少女の姿。

：特命係と名乗っていた二人と、自分の後任の監察医だと言っていた青年だ。

「な…何でこいつ等が…?!?」

訳がわからないと言わんばかりに、混乱しきった表情で白い服の男と、玄関から上がりこんでくる面々を交互に見やる陽元。

そんな彼に、白い服の男は皮肉気な笑みをその顔に浮かべ：

「そう言えば自己紹介がまだでしたなあ、監察医の陽元幽先生？」

男は懷中から、金色で桜の紋が捺された黒い手帳を取り出し、苛立ったような声で言いつつも、彼にその中身を見せる。

伊丹憲一と書かれた、自らの身分を証明するページを。

「刑事…!?!?」

「そう言うことだ」

「あんた、まんまと引っかけたんだよ」

ずかずかと上がり込みながら、トイカメラの青年こと門矢士と、緑のジャンパーの男性こと亀山薫が言葉を放つ。

騙されたのだと気付いた時には既に遅く、自分の手元にあったはずのアンプルは、眼鏡の男性こと杉下右京に没収され、入り口は背の低い青年こと小野寺ユウスケと髪の長い女性こと光夏海によって塞がれている。

：完全に逃げ場を失ったのだ。

そう悟ると…何故だか、陽元の口からは、乾いた笑いが洩れた。

「何がおかしい？」

「いや…案外、自分もドジだなあと思ってたさ」

訝る伊丹に、高らかな笑い声を上げながら、彼は奇妙な笑みをその顔に貼り付けて言葉を放つ。

その笑みが、士にはまだ、何かを隠しているように映った。

「こんな所で捕まったら、殺せなくなっちゃうなあ…結構楽しかったのに」

まるで悪戯の見つかった子供のように。

何の悪びれた様子も無く陽元は自分の机に向かいつつ、彼らに言い聞かせるようにそう言った。

罪悪感などまるで無いらしい。それが分かると同時に、亀山の頭にカッと血が上る。

人を殺すのが、楽しいと。確かに目の前にいる男はそう言った。それが、どうしても許せなかった。

「あんた…監察医の前に、医者だろ！？人を救うのが本分じゃないのかよ！？」

「…：医者ってさ、生かすも殺すもそいつの腕次第だろう？だから僕は、殺したんだ」

「何だとお…」

「人間を生かしてばかりじゃつまらないだろ？だから、殺してあげたのさ。選ばれた存在である、この僕が」

ぱっと両腕を広げ、陶醉しきったように言い切る陽元を、亀山と伊丹とユウスケは怒りの籠った瞳で見つめ、士と夏海は、どこか哀れみを含んだ視線を送り、そして右京は軽く目を伏せてそれぞれの思いを飲み込んだ。

…この男は、狂っている。

少なくとも、そう思わせるには十分な「何か」を感じることができる。

医者となったその日から……いや、きつともっと根本的な所から、目の前にいる「監察医」は他人とずれているのだろう。

「けど、面白いよね。殺した相手を検死して、『原因不明です』って言っちゃえば、警察はそれを信用しちゃうだもん。見てて面白かった」

「デメエ……」

「いい加減にしろさい！」

亀山が殴りかかるよりも先に。

右京の怒号が飛んだ。

いつもは冷静で落ち着いている印象の強い彼が怒鳴ったことに驚いたのか、陽元は……そして士達も、一瞬その身を固くして、右京の方を見やった。

肩をわななかせ、眼鏡の奥の瞳は心の底からの怒りを湛えている。彼は今まで、様々な犯罪者と相対してきただろう。その中でも、恐らく目の前にいる「大シヨッカー」に魅入られた監察医は、最悪の部類に入るらしい。

右京の声は、亀山も聞いたことが無いと思う程に静かで……それでも確実に怒りを感じさせるものだった。

「あなたは、医者と言う職業を、何だと思っているのですか！人を助けるために得た知識を、己の興味のために……まして人を殺すために使うなど、本末転倒も、いい所ではありませんか！恥を知りなさい！」

部屋に、一瞬の静寂が落ちる。

普段あまり感情を露にしない分、余計に周囲の人間を驚かせたの

かもしれない。

そしてその言葉を放たれた監察医は：一瞬だけ、ぽかんとしたような表情を浮かべたが、すぐに元のどこか狂気を含んだ笑みに戻ると、軽く首を傾げ、ますますその笑みを深くし：

「己が興味のため……確かにそれもある。だけど、これは僕の『正義』へ対する挑戦なのさ！」

高々と宣言すると同時に。

彼は机の引き出しから「何か」を取り出すと、背後にあった窓ガラスを割って、外へと飛び出し、どこかへ向かって駆け出した。

その予想外の行動に、一瞬右京たちの反応は遅れるが、すぐに状況を：相手は逃げたのだと判断すると、右京がすぐさま指示を出す。

「伊丹刑事は芹沢刑事達と共に左方向を、僕と亀山君は、右方向を追います。急いで下さい！それと、緊急配備を！」

「言われなくとも分かっていますよ、警部殿！」

慌てて割られたガラス戸を開け、二手に分かれて陽元を追う刑事達。

そして：土達もまた、右京と亀山の後を追って陽元幽の後を追った。

……間違いなくそこに、アポロガイストが現れると踏んだから：

合同一1：自白と逃亡（後書き）

こんにちわ。投稿が遅れました。

＊

色々ありましたが、ようやくクライマックスに近づけました。
今回の見所は右京さんのお説教でしょうか。

＊

それでは、次回また、お会いいたしましょう。
たぶん、割とすぐにお会いできると思います。それでは。

合同一2…戦闘開始

ばれるのが、想像以上に早かった。

まさかアポロガイスト様に似た人間まで用意していたなんて。

引っ掛けられた悔しさと、追い詰められたもどかしさ、そしてほんの僅かに、捕まるかもしれないと言うスリルへの興奮を味わっている自分を感じながら、陽元はひたすら、刑事達から逃げていた。

がむしやりに逃げていたせいで、ここが何処なのかは分からない。ただ、人気の無い方向へと向かっていくだけ。

…その先が、袋小路になっていることなど、すっかり忘れた上で。追い詰められたと分かった時には、既に自分の背後にムカつく刑事二人と、同じくらいムカつく監察医が立っていた。

「もう逃げらんねーぞ、観念しろ！」

かちや、と手錠を構え、亀山がドスの聞いた声で宣言した瞬間。

陽元の前に、銀色の帳が下りて一人の男がその姿を現した。

……白い服を着た、伊丹に瓜二つの男…ガイこと、アポロガイストだ。

「アポロガイスト…！」

「出たな伊丹もどき！」

士達は警戒するように身構え、ゆっくりとディケイドに変身するためのカードを取り出す。

現れるのを待っていたとは言え、やはり警戒すべき相手。

「アポロガイスト様…！」

「ふん、ディケイドに…この世界の警察と言う物だな」

小ばかにしたように言いながら、彼が浮かべる余裕な笑みは、士達の不安を駆り立てるのには充分だった。

そんな彼らの焦りにも似た感情を読み取ったのか、ガイは何処と無く伊丹と同じように再び鼻で軽く笑い：

「まだ分かんのか。この世に必要なのは悪だ。正義など、暴走していつかは自滅する物なのだ。ディケイド、貴様が変身することも、お前達がこの男を捕まえることも、全ては暴走した：傍迷惑な『正義』なのだ！」

暴走する「正義」。

その言葉に、一瞬、亀山は顔を背ける。

―杉下の正義は、時に暴走するよ―

以前、小野田にそう言われたことがある。

真犯人逮捕のためなら、少々行き過ぎることもある。それが上層部にとって、「傍迷惑」な行為であることも重々承知しているが……

「それは違うな」

亀山の心を代弁するように言ったのは、一步前に出た士。

彼はキッと相手を睨みつけ、真っ直ぐな：誰にも曲げられない、信念の籠った瞳で、言葉を更に紡ぎだした。

「確かに、俺達の担いでいる『正義』と言う荷物は重すぎる。時に行き過ぎ、暴走もする。だが！」

一呼吸置き、士はちらりとその視線を亀山とユウスケに向けた。

まるで、ガイだけでなく…彼らにも聞けと言っているかのように。

「…俺達は一人じゃない。同じ『正義』と言う荷物を一緒に担いでくれる仲間がいる。俺が暴走しかけた時は、そいつが止めてくれる。そいつが暴走しかけたら、俺が止める。それが、仲間…『相棒』って奴だ！」

「相棒」と言う言葉は、重い荷物に棒を通し、二人一組で担ぐことから来た言葉。

そのことを士が知っていたのかどうかは定かでは無いが、その宣言にも似た言葉に、亀山は…そしてユウスケの胸に、熱い物がこみ上げる。

右京の正義が暴走するなら、亀山が止めればいい。それが、「相棒」としての、自分の役割なのだと、改めて教えてもらえたように…亀山は、嬉しかった。

そしてユウスケと夏海もまた。

士が自分を、「仲間」だと言ってくれたことが、本当に嬉しかった。だからこそ…もしも本当に、士が「世界の破壊者」になっちゃったら…自分達が、止めようと、そう決意した。

そして、そうならないように、一緒に彼の抱える荷物を担ごうと言う思いも…

「な…何なんだよ、何なんだよ何なんだよ！！お前、何だよ一体！？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

わめき散らす陽元に向かって答えると同時に、士は構えていたカードをディケイドライバーに差し込む。

— K A M E N R I D E — D E C A D E —

電子音と共に、土の周囲を灰色の残像が幾つも現れ、彼の体を黒いスーツが包む。次の瞬間、残像は消え去り全体的にマゼンダ色の鎧がその身を覆い：緑の目を持つ仮面には七本の黒い線が入り、その体に「十」をイメージさせる、白い縁取りの線。

「世界の破壊者」：仮面ライダーディケイドとして、彼はアポロガイストの前に立ち塞がった。

「通りすがりの仮面ライダー…ですか」

「ああ。通りすがりついでに、さっさとこの傍迷惑な殺人とやらに、終止符を打ってやるよ」

パンパンと軽く払うように手を叩きながら、ディケイドが右京に言葉を返す。

それが、合図になったように。

ユウスケも自らの腰に手を当て、その身を赤い仮面ライダー…クウガへと変える。

「今回、こっちは銃を持って無いっすけど…大丈夫ですか？」

「大丈夫です、そこに丁度いい武器が転がってますから」

亀山の問いに答えながら、クウガが拾い上げたのは…廃棄されたらしい鉄パイプ。

それを、バトンでも扱うかのように軽く回し：

「超変身！」

言葉と同時に、クウガの姿が赤から青に変わる。そしてその変身が、鉄パイプに伝播したかのように、分子、原子レベルで分解、再構築され…ドラゴンロッドと呼ばれる武器へと変化した。

「ユウスケ、今回は力押しで行くぞ！」

「ああ」

ちゃき、と武器を構える二人の仮面ライダーを見て、陽元は信じられないと言わんばかりにその口をぱくつかせ、ガイは忌々しげに顔を歪めると……

「やはり、ディケイドもクウガも、邪魔なのだ。……アポロ・チェンジ」

人間態から、鎧を纏ったような姿……アポロガイストにその姿を変え、ぱちんと指を鳴らす。

すると、銀色の帳が再びその場に下り……そこから、幾人もの白い仮面の兵士が現れた。

「RXの世界」で見かけた、クライシス帝国の下級兵士……チャップと呼ばれる者達である。

「士、雑魚は俺に任せて……お前は、アポロガイストを！」

「頼んだぞユウスケ！」

その言葉が合図になったように。

仮面ライダーと怪人達の戦いの火蓋が、切って落とされた。

合同－2：戦闘開始（後書き）

こんにちわ。

今回はちよつと短いです。

前回は長かったので：

＊

さて、そろそろ本当にクライマックス。

アポロガイストとの戦い、そして犯人逮捕：

どこまで次回で行けるのか、ちよつと予想がつきませんが、頑張ってみようと思います。

＊

原作に矛盾が生じないようにしないといけないのもあって、やや難しいですが：頑張ってみます。

＊

それでは、ラストスパート開始。

最後までお付き合い下さいますよう、よろしくお願い致します。

ディケイドー9…奪還、そしてクライマックスへ

現れた白い兵士達の方を相手取りながら、クウガ・ドラゴンフォームは逃げていく陽元幽の姿をその視界に捉えた。

その手に持っているのは…注射器。その中に、薬液が満たされているのが見える。

もしかすると、まだあと一人…誰かを殺す気なのかもしれない。そんな思いが過ぎり、クウガは後ろにいる特命係の二人に向けて、半ば怒鳴るように声をかけた。

「杉下さん、亀山さん！ここは俺達に任せて、あの男を追って下さい！」

「え？」

「あいつ、まだ誰か殺す気です！ひょっとしたら、誰でもいいのかもしれない！」

その一言に、後ろで亀山と杉下が顔を見合わせた気配を感じた。今の陽元は追い詰められている。確かに、もはや規則性に従う必要は無い。誰彼構わず殺す可能性が、十二分にある。

それが理解できたのか二人は逃げていく陽元を追おうと意気込むが…

「させる訳には行かないのだ！」

彼の声に、ディケイドと切り結んでいたアポロガイストが怒鳴る。同時に再び銀色の帳が下り、そこから無数の兵士チャップが、杉下達の道を阻むかのように、その姿を見せた。

まずい、と思う。

自分達仮面ライダーにとっては雑魚と呼んでも差し支えないよう

な連中でも、普通の：それも、怪人や怪物と言った存在が全くいない世界の警察にとっては、凶悪犯以上の脅威だろう。

グロンギなる異種知的生物がいた、ユウスケの世界の警察ですら、並みの怪人相手でも歯が立たなかったのだから。

ならば、ユウスケの：クウガの取るべき行動は、たった一つ。

「二人とも、俺の後ろにいて下さい！」

「何をする気…」

「亀山君、ここは、小野寺さんを信じましょう」

アポロガイストに聞かれてはまずいと判断したのか、杉下が不思議そうな表情の亀山を制し、軽く頭を下げる。

：自分達ではどうにも出来ない相手だと、わかっているのだろう。

「小野寺さん。お願いします」

「：頼んます！」

真っ直ぐな瞳で見つめられ、クウガは声の代わりにサムズアップを返し：

「うおおおおおっ！」

ドラゴンロッドを振り回し、襲いかかって来るチャップを斬り払う様にしながらなぎ倒していく。ただひたすら、一直線に。

それこそ：陽元との最短距離を走るかのように。

そのすぐ後ろを、杉下と亀山が付いて来ているのを確認しながら、クウガはチャップで出来た「壁」に穴を空け：そして、その「穴」が貫通した瞬間、杉下と亀山はクウガの前に躍り出た。

最初からクウガは、彼らをチャップの向こう側：陽元の逃げた方向へと通すつもりだったのだ。

「今です！追って下さい！」

「どうもありがとう」

「後で、あいつを逮捕したら、絶対お礼しますんで！」

冷静に言う杉下とは対照的に、亀山は力強い宣言と共にサムズアップを返すと、そのまま陽元の方へと駆けていった。

…言葉通り、相手を逮捕するべく。

その背を見送り、クウガはくると振り返ると…彼らを追おうとするチャップ達に向かって、一言宣言する。

「さあ、お前達の相手は俺だ！」

そして再び…ドラゴンロッドを振り回し、チャップ達を薙ぎ払い始めたのであった。

「どうしたディケイド、それで本気なのか？」

クウガが杉下達をチャップの壁の向こうへとエスコートした頃。

ディケイドはと言うと、アポロガイストを相手に苦戦していた。

傍で見ている夏海にも分かる程、今日のディケイドの攻撃は精彩を欠いている。見ようによっては、体調を崩しているようにも見えるのだが…

そう思っている間にも、ディケイドは何合目かの打ち合いに…負けた。

大げさにも思える程後ろへ吹き飛ばされ、軽く舌打ちをしながらよろりと立ち上がろうとするが、力が入らないのか、がくりとその場で膝を折った。

「士君…！」

「来るなナツミカン！」

心配のあまり駆け寄ろうとする彼女に、ディケイドは厳しい声でそれを止める。

その声の真剣さに、彼女はびくりとその身を震わせ、再び物陰に隠れるようにして小さく蹲る。

先程、仲間だと言ってくれたのは、嘘だったのだろうか。仲間を心配することも、彼は許さないのだろうか。

確かに、自分はユウスケと違って戦う術を持たない。彼の帰る場所を守ると言っても、所詮はただの人。こうやって戦いになってしまったら、傍観者になるしかない。

以前に回った世界：「RXの世界」では、足手纏いにすらなった。だからだろうか。ディケイドが…士がどこか、自分に対してよそよそしい態度をとるのは。

—私は、役立たずなんでしょうか—

そう思わずには居られない程、彼女の心は、今、不安に満ちていた。

…心配だからこそ、来ないで欲しいと言う士の心にすら、気付けない程に。

そんなやり取りを、つまらなそうに見ていたアポロガイストが…これまたつまらなそうに軽く笑うと、仮面についていた銀色の何かを外し、それをディケイドに向けた。

「貴様の命は最後にしようと思っていたが…まあ良い。ここで頂くとしようか」

勝ち誇ったように言ったアポロガイスト。

しかし彼は気付かなかった。

ディケイドと言う仮面の下で、不敵に笑う士に。
そして…

「そいつを待ってたぜ！」

「何!？」

—ATTACK RIDER—ILLUSION—

ドライバーにカードを通した瞬間、ディケイドの姿が四つに分裂し、四方に散ってアポロガイストを攪乱する。

突然なその攻撃に、一瞬だけアポロガイスの動きが止まった、その瞬間。四人のうちの一人が、相手の手から銀色の何か…パーフェクターと呼ばれるそれを、すかさず奪い取った。

「しまった！」

「悪いな。最初から俺の目的はこいつだったのさ」

手の中にあるパーフェクターを奪い取ること…それが、士の目的だった。

自分がこれを奪い返してしまったせいで、死ななくていい命が犠牲になった。これ以上の犠牲を出さないためにも、そして…亡くなった者達に報いるためにも。

「ナツミカン！」

「は、はい!？」

「終わるまでの間、ちょっと預かってろ」

「わ、私ですか!？」

「お前以外に預けられる奴、この場にいるか？」

放り渡された銀色のプレートのようなものと、首だけこちらに向けているディケイドを交互に見やりながら、夏海はその問いに、首を横に振って答えを返した。

「頼りにしてる」

いつもの、どこかぶっきらぼうな…それでいて少しだけ温かみを感じさせる口調で言った士に、今度は首を縦に振って答えを返す。

「私も、少しは信頼されている…そう思っているんですね、士君」

「おのれディケイドおおっ！」

「ここで終わりにしてやる、アポロガイスト！」

怒りにその身を震わせるアポロガイストに宣言し、ディケイドはマゼンダと黒の縞模様の機械を取り出す。

機械の名は「ケータッチ」。かつて、夏海の世界によく似た世界：「ネガの世界」と呼ばれる場所で手に入れた、ディケイドの強化用ツールである。

パネルに描かれた模様は全部で十二。そして、彼はその画面に描かれたマークを順になぞっていく。

— K U U G A A G I T O R Y U K I F A I Z B L A D E
H I B I K I K A B U T O D E N — O K I V A —
— F I N A L K A M E N R I D E — D E D E D E
C A D E —

最後のマークに触れると同時に、ディケイドの姿が更に変わる。その身に纏うは、ライダーの力。マゼンダ基調だった鎧は、銀に

変わり、仮面の目の色が緑からマゼンダに。肩から肩へ、九人の仮面ライダーの顔が描かれたカードがずらりと並び、そんな彼を模したカードが、彼らの頂点に立つかのように、仮面の頭部に収まっている。

ディケイド・コンプリートフォームと呼ばれる姿となり：戦いは、クライマックスへと加速していった。

ディケイドー9…奪還、そしてクライマックスへ（後書き）

こんにちわ。秋月です。

一週間のご無沙汰、いかがお過ごしだったでしょうか。

＊

何か、「ラストスパート」とか言いながらぜんぜんそんな気配もなくて。

むしろ執筆速度がダウンしています。

コレは…あれか？アポロガイストの呪いか？

＊

極力早めに更新したいと思うものの、様々な要因（殆どが私事）が重なり、なかなか執筆できない状況が続いています。

…がんばりまーす。

＊

それでは、次回またお会い致しましょう。

特命係―10―幕引き

「逃げらんねえぞ！観念しろ！」

とあるビルの屋上。そこに逃げ込んだ陽元幽は、特命係の二人に追い詰められていた。

一体、何処で計画が狂ってしまったんだろう。もともともと、人の命を弄んで、周囲の人間が怯える様を見ていたかったのに。

この世界に、ディケイドとか言うのが現れたから？

それとも、この二人に目をつけられたから？

どちらにしろ、彼にとって非常に不愉快な状況であることだけは確かだ。

苛立つ、ムカつく、頭に来る。

今まで、自分は様々な権力を笠に着て自分の敵を消してきた。警察だって、権力の前に平伏することが多かった。それなのに…目の前にいる二人は、こちらの背後は見えていない。

…虎の威をかる狐と言うことわざがあるが、彼らは陽元の後ろにいる虎ではなく、陽元と言う狐そのものにしか目をやっていない。これでは、威など借り様が無いではないか。

ガシャンと、背に転落防止用のフェンスが当たる。

…完全に、追い詰められた。そう分かれると、彼は軽く一つ溜息を吐き出し…

「ああ…あああああっ！」

とても悔しげに叫ぶ陽元。瞳には憎悪にも似た色を浮かべ、顔には最初に出会った時の爽やかさなど微塵も無い。

ただひたすら、苛立たしげに頭を掻き耄り、癩癩を起こした子供

のようにドンドンと足を踏み鳴らす。

「人を殺すことが、いけないことか！？なら、さっさと死刑制度なんてやめちまえよ！」

ギロリと、迫り来る二人の刑事を睨みつけながら叫ぶ陽元。

混乱しているのか冷静なのかは分からないが、彼は苛々とした空気を隠そうともせず、更に言葉を続けた。

「人を殺した罪？今まで人間が絶滅に追い込んだ生物に償ったか？戦争は？姥捨ては？中絶は！？どれも皆、等しく命じゃないか！」
「等しいって分かってて、何で殺すんだよ！」
「等しいから殺すんだろう？命なんて、皆等しく軽いんだよ！」
「デメエ……」

陽元の「命は軽い」と言う発言にカチンと来たのか、亀山はいきり立った様に一步、相手を睨みつけながら、その足を進めた。

人の命は、等しく、重い。

あくまで亀山の主観だ。それを強要する気は無い。だが、重いと思うからこそ、互いに支えあうべきものだと思っている。

…先程、門矢が言っていた「正義」と同じように。

だからこそ、それを軽々しく奪っていった陽元を、許す訳にはいかなかった。

怒りの表情を隠そうとしまいまま、亀山が陽元まで、あと数歩…距離にして十メートル有るか無いかの所まで差し迫った時。

陽元は口の端をゆがめたかと思うと、唐突に持っていた注射器を自分の首筋に突き立て、叫ぶ。

「動くな！」

思いもかけなかった行動だけに、彼に近寄ろうとしていた右京と亀山は、彼の命令通り思わずその場で止まってしまう。

あの注射器の中身は、恐らく彼が殺人に用いた毒物だろう。今までのことを考えれば、確実に死に至る。

「僕だけが特別だなんて思っていない。僕の命だって、きっと軽い」

そう言うと、彼の表情はとても穏やかなものになった。

今まで見たどの表情よりも、穏やかで、安らぎに満ちた表情に。最初に出会った時は、爽やかな人に見えた。次に会った時は、子供っぽい、どこか残忍で我儘な印象を受けた。

自身の欲望のために、決して少なくない人数を殺してきた男だというのに、今の表情はまるで……仏のようだとさえ、思えてしまった。

人がそう言う表情を浮かべる時は、得てして二通りだ。

一つは、他人に対する慈愛を感じた時。

そしてもう一つは……自らの人生を、全うしたと感じた時。

今回は後者だと、右京達が気付くと同時に。陽元はその穏やかな笑みのまま、彼らに向かって言葉を放つ。

「奪えなくなるくらいなら……ここで幕引きにしてやる」

そう言うと、陽元は迷うことなくそのシリンジを押し込もうと、親指に力を込め……

「させるかあああつ！」

中の薬液を、自らの体内に注入するよりも先に、亀山が勢い良く飛び掛り、相手の右腕を注射器から引き剥がし、一拍遅れて来た右京が、首に刺さったままの注射器を引き抜いた。

一步間違えれば大惨事になりかねないところだったが、そこは場数を踏んでいる身、陽元についた傷は、自分で刺した注射針の痕だけであった。

「ふざけんなよこの野郎！逃げようたってそうはさせねえからな！」

「逃げる？僕はただ、死のうとしたただけだ」

「それが逃げてるって言うんだよ！」

「違う！だって、悪の組織に属している怪人は、皆最後には死ぬじゃないか！死んで幕引きになるじゃないか！僕も…僕も…！」

「だけど、アンタは人間だろうがっ！」

未だ自分の下でもがき続ける陽元が発した言葉に対し、亀山が怒ったように一喝する。

その瞬間、陽元はその身をビクリと震わせ、恐る恐ると言った風に、二人の刑事を見やった。

真剣な表情で、自分を「一人の人間」として見ている二人を。

「怪人じゃない、人間なんだよ」

「この世界で、人間として生きている以上は、犯した罪は生きて償う…それが、この世界のルールです」

亀山の言葉を右京が継ぐ。

異なる世界から来たと言う、アポロガイストや門矢達が、どう言った裁きを下すのかは分からないが…少なくとも、今、ここに人間は、この世界で生きている。

フィクションの世界ではなく、現実。

だからこそ、陽元幽は、自分で死ぬことが許されない。それだけの大罪を、犯したのだから。

「…怪人ごっこは、もう終わりだ」

「あ……」

低く、落とすような亀山の言葉に。陽元は今度こそ脱力しきった様子で項垂れ…肩をわなわなと震わせた。

「ああああ、ああああ…うわあああああ…」

ようやく自分の犯した罪の大きさに気付いたのか。

陽元幽と言う名の、一連の事件の犯人の一人は…そのビルの屋上で、子供のように泣きじゃくったと言う。

誰の目も憚らず、ただただ…迷子の、子供のように…

特命係―10―幕引き（後書き）

こんにちわ、秋月です。

いやー：久々の水曜更新。

実験の合間の空き時間って好きさ！（見つかったら怒られるけれど）。

＊

ようやく、陽元幽、逮捕です。

「ひのもと」と打っても出て来ない上、「かくり」なんてもっと出て来ない名前でしたが：

こいつの名前は、アポロガイストを参考にしていました。

アポロⅡ太「陽」

ガイストⅡ「幽」霊

：「元」は適当です。

＊

次回はディケイドサイド。

コンプリートフォームでアポロガイストをぶちのめせ！

＊

それでは、今回はこの辺で。

また次回、お会い致しましょう。

ディケイドー10…この世界での決着

「はあっ！」

ディケイドの気合の声と共に、ギインと言う金属同士がぶつかり合う、嫌な音がする。

人気の無い場所ゆえに、余計にその音が響き渡る。

コンプリートフォームになったことで、その力が底上げされたディケイドに、アポロガイストも押され始めていた。

彼が呼んだ兵士チャップがクウガの足止めをしているとは言え、あまり有利な状況とは言えない。

何より、パーフェクターを再び奪われてしまったことは、彼にとって非常に大きな問題であった。他人の命を奪い、自らの物に変換しなければ、彼の命は一月ひとつきともたない。戦いなどで余計な力を使えば、それだけ寿命も縮まる。

どうするべきか…そう考えた瞬間、アポロガイストの脇をディケイドの武器がかすめた。

「ちいっ」

「考えごとか？随分余裕なんだな」

悔しげに吐き捨てるアポロガイストとは対照的に、ディケイドの方は優位に立つ者特有の、悠然とした声で言い放つ。

戦いにおいて、圧倒的な実力差がある場合ならば、集中していかとも勝てるだろう。それこそ、赤子の手を捻るように。

しかし、今は違う。ディケイドとアポロガイストの力はほぼ同等…むしろ僅かにアポロガイストの方が劣るくらいだ。相手の攻撃に集中していなければ、自分が倒されてしまう。

そう考え直すと、アポロガイストは意識をディケイドの方に集中

させた。

パーフェクターを持っているのは、夏海だ。何の力も持たない小娘が相手ならば、どうにでも出来る…そう考えたのかもしれない。

「大ショッカーの野望のため、ディケイド、ここで消えるのだ！」

「悪いな。消えてやる訳にはいかないんだ」

そう言うと、ディケイドは一枚のカードを取り出し、それを右腰に移動したライドブツカーに読み込ませる。

「ユウスケ、ちょっとくすぐったいぞ」

「へ？」

向こう側で、青い姿…ドラゴンフォームでチャップ達を薙ぎ払うクウガに、一方的に宣言する。瞬間、ライドブツカーはそのカードを認識し…

—FINAL FORM RIDE—KU・KU・KU・KU
GA—

「うおわっ!？」

電子音が人気のない路地裏に響き渡り、クウガは悲鳴にも似た驚愕の声を上げると…その姿が、黒いクワガタムシの様な姿に変わった。

ファイナルフォームライド。その名の通り、他のライダーをファイナルフォームとも呼べる姿に変えてしまうカードである。

クウガの場合、それが今の人間大の巨大クワガタムシ型機械、ゴウラムに似せた姿…クウガゴウラムになるのだ。

どう言った機構で人体の構造を無視しまくったこの姿に変えるの

かは、定かでは無いが。

「蹴散らすなら、その格好の方が都合良いだろ」

―そりゃあ、確かにそうだけど―

思いはするが言葉に出せぬまま、クウガゴウラムは並み居るチャップ達を、今までの比では無い力で薙ぎ払い、倒していく。

見る間に目減りしていくチャップの様子に、アポロガイストは悔しさのあまり奥歯を噛み締めるが…そんな暇を与えるほど、ディケイドはお人よしでは無い。

アポロガイストに再び斬りかかり、油断し、反応が遅れた相手の体を大きく吹き飛ばす。

「ぐうつ」

しこたま壁に打ち付けられ、低い悲鳴がアポロガイストの口から漏れ出す。衝撃の大きさと、一瞬だけアポロガイストの視界は濁り、更に反応を遅らせた。

気付かなかったのだ。ディケイドが最後の仕上げに入った瞬間に。

―FINAL ATTACK RIDE―DE・DE・DE・D
ECADDE―

その音声が響くと共に、ディケイドとアポロガイストの間に、エネルギーで出来たカードが幾つも現れる。

それは、数日前に放たれたのと同じ技。ただし今回はキックではなく、持っているライドブッカー・ソードモードによる斬撃…ディメンションスラッシュと呼ばれる技であることと、前回に比べて威力が桁違いに大きいことを、アポロガイストは悟っていた。

悟ったと言うよりは：思い知らされたと言った方が良いのだろうか。

ディケイドの、エネルギーを纏った剣はしっかりとアポロガイストの体を捕らえ、その身を横薙ぎに斬る。

攻撃の勢いでアポロガイストとの立ち位置は入れ替わり、物陰に隠れていた夏海の視界には、固まったまま動かないアポロガイストの姿と、ライドブッカーを振りぬいた状態で止まっているディケイドの背中しか入らない。

どちらが勝ったのかは一目瞭然な一撃だったが、それでもどちらかが動き出すまでの間と言うのは、永遠にも似た静寂が支配して、夏海には好きになれない時間だった。

しかしその静寂は、長くは続かないことも知っている。

「う：ぐっ」

苦しげに呻き、アポロガイストがその場に膝をつくのど、ディケイドが余裕気にそちらを振り返ったのは本当に同時だった。

そして、無数にいたチャップ達が倒され、クウガゴウラムがクウガ・ドラゴンフォームに戻ったのも。

必殺技を受けながら、それでもまだ生きていることには感心するが、これ以上この男が存在していると、更なる悲劇を生む可能性がある。実際、このアポロガイストと言う男は、この世界で最低でも二人の人間を殺しているのだ。

「終わりにさせてもらうぞ、アポロガイスト」

二人の戦士が、各々の武器を再び構えると：アポロガイストはガイの姿に戻り、その口の端を歪ませた。

戦士二人には、その表情は悔し紛れの苦笑のように見えたが：夏海にだけは、それが不敵な笑みに見えた。

「ここはもはや不利か…」

ガイの眩きと共に、この世界に来てからも何度か見かけた、銀色の帳：異世界との橋、その麓とも言える「何か」が、ディケイド達とガイの間に引き降ろされる。

空間を分け隔てるかのようにして落ちたそれは、慌てて駆け寄ったディケイドとクウガの存在を拒み、ガイの姿を徐々に薄く消していく。

「次の世界でこそ、必ず復讐してやるのだ、ディケイド！」

完全にガイの姿は銀の帳に飲み込まれたが、声だけは負け惜しみのように響いた。

その言葉は、まるでアポロガイストが、ディケイド達の向かう世界を知っているかのようにさえ聞こえた。

「また、逃げられちゃいましたね」

「ああ。だが、次の世界とやらで、また襲ってくるだろ。俺達にとって迷惑な存在だって言うならな」

「ま、パーフェクターも奪い返したことだし、これでとりあえずは被害も出なくなるよな」

不安げな夏海に対して変身を解き、不敵な笑みで言う士と、喜色を前面に押し出したような表情のユウスケが、そう返す。

重くなりそうな空気を、極力軽くするかのよう。

しばらくすると、亀山と杉下が戻ってきた。

戻ってきたのは二人だけだったが、彼ら曰く、もう一人の犯人：陽元幽の身柄は拘束し、捜査一課に引き渡したという。

ああ、こちらも解決したのかと思い、ほっと胸を撫で下ろす夏海。やはり、人間の罪は人間が裁き、償わせる：それが自然なことなのだと、改めて思った。

「あ、俺達この後、花の里に寄ろうと思うんですけど、皆さんはどうします？」

「祝勝会か：悪くないかもな」

亀山の提案に、珍しく上機嫌の士が返し：そして、杉下もどこか朗らかな笑みを浮かべて居酒屋、「花の里」へと歩き出した。

気がつけば既に日は傾いて、定時に上がることの出来る公務員なら帰ってもおかしくない時間。

：「陸の孤島」などと呼ばれる特命係の暇さ加減を、ここで発揮できる辺り、案外彼らは自分の立場を楽しんでいるのかもしれない：などと夏海は思う。

士は、「破壊者」と呼ばれる度に傷ついていると思う。おくびにも出さないが、平気なはずがない。せめて自分が仲間である間は、士を支えていこう。

だけど：と、否定の言葉が上がりかけた夏海の気持ちを再び沈める。

「……私は、士君の相棒になれているのでしょうか：」

「夏海ちゃん？」

思わず声に出していたらしい。隣にいたユウスケが、不思議そうに声をかけた。

先の戦いの中で、自分は士の仲間だと認識できた。そのはずだった。

しかし…本当にそうだろうか。自分の存在は士にとって、ただの便利な下宿先の小娘程度でしかないのでは無いか。

そんな不安が、何故か今、彼女の心に影を落とす。

「ユウスケは良いです。一緒に戦えるんですから。でも、私は……士君が帰ってくるのを待つしか出来ません」

これは、愚痴だと分かってはいるのだが…それでも、前にいる士には聞こえないように、だけど隣にいるユウスケには聞こえる程度の声で、夏海はポツリとぼやいていた。

そんな彼女の、不安にも似た感情に気付いたのか、ユウスケは一瞬きょとんとした表情を浮かべた後…飛び切りの笑顔を、夏海に向けて言葉を紡ぐ。

彼女を安心させるために。そして、彼の知る真実を語るために。

「…夏海ちゃんを相棒だって思ってなかったら、きっと士は、自分の命を分けるようなことはしないと思うよ」

「え…？」

「これさ、士から口止めされてるんだけど…前の世界で、夏海ちゃん、本当は……」

その先は流石に言えなかったのか、ユウスケの言葉が一旦切れる。それだけで、分かる。自身が一度、その命を失ったことを。だが、もしもそうならば…自分はどこにいてるのだろうか。

「だけどその時、士は迷わず自分の命の一部を、夏海ちゃんに分けた。…仲間だと思ってなきゃ、そんなこと出来ないよ、あいつは」

「そう…だと良いです」

「うん。きっとそうだよ」

笑顔とサムズアップを返され、今までの暗い気持ちが嘘のように掻き消える。

自分の、今の命は、士に分け与えられたもの。
士の命の一部。

そんな大切なものを分けてくれたというのなら、きっと仲間だと彼と同じ荷物を担ぐ、相棒なのだと思って良いのかもしれない。そう思うと、彼女も知らず知らずのうちに笑顔になる。

自分はこのまま、信じられる所まで、士を信じようと……そう、心に誓って。

ディケイドー10：この世界での決着（後書き）

お久し振りです。

ようやく後はちょっとした祝勝会（？）とエピローグだけになりました。

＊

この量書くのに一週間強：ありえない、何だ、この遅筆加減。それもこれも、論文なる存在のせいです。

ああ、引きこもって心置きなく小説を打っていたい：（でも右肘の調子が悪い）

＊

そろそろW&a m p；ディケイドの映画もやることですし、この物語も終幕になる：はずです、多分。

何か毎回こんなこと言ってる気がするんですが、書いているとドンドン長くなっていくのは、僕の悪い癖。

それと、すまぬ海東。君の戦闘シーンは無い。

鳴滝さん、あなたの出番も全く考えてません。

キバーラ、先に謝っておこう。：扱いが酷くてごめんね。

＊

それでは、次回またお会い致しましょう。

番外 2..「緊急対策特命係」

「あら、皆さんいらっしやい」

「やあ士」

「遅いぞお薫ちゃん」

「ああ、お帰り夏海」

「花の里」に到着した右京達を出迎えたのは、いつも通りの笑顔を見せるたまきと、あからさまに上機嫌な海東。そして既に一杯引っ掛けていたらしい美和子と、ビールのつまみにスルメイカを齧っている栄次郎の四人だった。

たまきと美和子がいるのはわかる。百歩譲って、栄次郎がいるのも良しとしよう。何しろ、今はお隣さんなのだから。

…だが…ここまで上機嫌な海東は、普段の彼を知る者にとっては、相当気味が悪く映る。喜色満面の海東など、「悪い物でも食べたか」と心配したくなってしまう。

「……海東？」

「何か、随分とご機嫌ですね」

「まあね」

薄ら寒そうな視線を彼に向ける土達をよそに、海東は聞かれてもいないのに楽しそうに語りだした。

「この世界のお宝、特命係の初代プレート…半分だけだけど、ゲットできたんだ。特別に、君達にも見せてあげようと思ってね」

「…お宝って…ああっ!?!それって…!」

「……おやおや」

「ね、言った通りでしょ、大樹君。薫ちゃんならこれを見て絶対驚

くと思ったんだあ」

「右京さんも、驚いていらっしやるみたいですよ」

何故か楽しそうに言う女性陣に対し、特命係の二人は驚いたようにその目を見開いた。

亀山の指の先：そして自慢気に海東が掲げるそこには、白い文字で「緊急対策」と書かれたプラスチック製の黒いプレートがある。

しかも、その先に何かあったらしい。割られたような、歪な形をしていた。

それが何なのかを知っているのは、この世界の：「特命係」の成り立ちを知る者達だけ。士達はそれが何なのかわからず、ぽかんとした表情を見せると：

「これはね、士。そこにいる杉下右京が割ったと言う、初代特命係のプレート：その片割れさ。完全版ならもっと価値は高かったんだけど：これはこれでレア物の一品だ」

おもちゃを買ってもらった子供のように、嬉々としてそのプレートを眺める海東。

普段はあまり感情を表に出さない彼が、ここまで喜ぶとは：彼なりに、相当なお宝なのだろう。士にはその価値はわからないが。

「お前、クリスタルのチェス盤はどうする気だ？」

「そんな物よりはこっちの方の価値が高い。寿司も久々においしかったしね」

回転寿司だろうが、と心の中でのみ突っ込みつつも、士は苦笑いで彼を見つめた。

そんな彼の視線に気付いたのか、海東も軽く口の端を苦笑の形に吊り上げて：

「そんな顔するなよ土。僕は今回、結構楽しめたんだ」

それだけ言うと、彼はそのプレートを持って立ち上がり…

「それじゃあ、僕は一足お先に失礼するよ」

「あら、もう行かれるんですか？」

きょんとした顔で問いかけるたまきに、海東は軽く頷く。飄々とした、いつもの…何を考えているか、いま一つ分かり難い顔で。

「僕はお宝にしか興味が無いからね。次のお宝のある場所へ向かうだけさ」

それだけ言うと、彼は軽く手を振って…あっさりとその場から、姿を消した。

刑事の傍に、いたくなかったのかもしれない。

何しろ彼は、「怪盗」なのだから…

＊

警察庁に宛がわれた自室の中で。

小野田は自分の椅子に深く腰掛けながら、何かを見つめていた。その表情は、逆光になってよくわからない。笑っているようにも見えるし、泣き出しそうにも見える。

「海東君も、詰めが甘いと言うか」

小野田の手元にあるのは、前の部分が割れた、黒いプラスチック製のプレート。そこに書かれているのは、白い「特命係」の文字。

「ま、良いですけどね」

そのプレートを、大事そうに箱にしまいながら、彼にしては珍しく、心から湧き上がる笑みを顔に浮かべていた。

思い出し笑いに近いのかもしれない。心底楽しそうな、そんな笑みだ。

「でもまさか、『寿司のお宝…ネタは頂くよ』って言って、銀舍利だけこっちに残されるとは、思わなかったなあ……」

皿を元に戻してしまう自分も自分だが、他人の寿司のネタだけを奪う彼もまた、充分に変な人間だ。あれは演技なのか、それとも素なのか。どちらにしても、今の年齢で寿司ネタの取り合いをするとは思わなかった。

「孫とだって、寿司ネタの取り合いなんかしませんよ」

自分以外、誰もいない部屋の中で一人そう言いながら、今度は焼き鳥に誘おうか、と考え…そしてふと思う。

彼は、「通りすがりの仮面ライダー」だ。寿司屋では確か、「異なる世界を旅して回っている」と言っていた。比喻ではなく、本当に異なる世界を回っているのだとしたら、もう二度と会えないかもしれない。

「…人生なんて、そんな物でしょう？」

何故か残念に思っている自分に言い聞かせ、ふと彼は箱の中にしまいこまれたプレートを見やる。

そう言えば、彼はトレジャーハンターだと言っていた。狙った獲

物を必ず物にする、スナイパーだとも。それなら、きっと…彼はこの「残りの半分」を口実に、この世界にまたやってくるかもしれない。

いや。「かも」ではない。「絶対」来るだろう。ならば…小野田は待つだけだ。あの若者が、この「もう半分」を奪いに来るのを。

―さて、その時はどうやってはぐらかしましょうか―

思いつつ、また笑う。

あの、自分の子供よりも若い青年をからかうのが、楽しいのかもしれない。彼は、転んでもただでは起きない。だが、起きたらやっぱりどこか螺子が飛んでいる。

そんな、見かけの冷静さとは裏腹なお茶目さを見せてくれたあの青年が、彼は好きなのだろう。

「だから、次に会うまで、死なないで下さいよ？君は私よりも若いんですから、長生きしなくちゃ」

―じゃなきゃ、私が楽しめないじゃない―

誰にと言う訳でもなく。

小野田はそう言うとき、窓の外から見える景色を、いつもの、何を考えているのか読み取れない顔で見下ろす。

…これを以って、小野田公顕は、普段の…自分など可愛い部類に入る、狸達のひしめく日常へと、帰って行ったのであった。

番外２・・「緊急対策特命係」（後書き）

皆さんこんにちわ。

年末に色々あり、今年もよろしくお願い申し上げますとしか言えなくなつた秋月です。

＊

一月ぶり位の更新になります。

今回は再びメインは海東と小野田。「緊急対策特命係」のプレート
の行く先を描いてみました。

：今回も短いですね。

士も右京も出てますが、今回の立ち位置はやっぱり番外編でしょう。
主役がほとんど絡まないし。

＊

さて、本気でそろそろ最終話にしないとなあ、と思いつつ。
次回の更新が何時になるか、全く分かったものじゃありません。
すみません、それは個人的な理由からです。

＊

それでは皆様。気長にお付き合いくださいますよう、よろしく願
い致します。

エピローグ

「次の世界、ですか」

一応の解決から一夜明け。この世界を去る、と言った門矢達に向かって、右京はどこか納得したようにそう呟いた。

名残惜しくはあるが、アポロガイストを取り逃がしてしまった以上、彼はそれを追い、倒す義務のような物があるのだろう。

それに…この世界は、彼らが存在するには、少々窮屈な世界だろう。

「門矢先生」

「何だ？」

「これからも、頑張って闘って下さい」

「…何？」

写真館に戻ろうとする士達に、右京は静かにそう言った。

あまりに、彼らしからぬ言葉に、一瞬亀山もその目を見張る。

「勿論、争い事を良しとするつもりはありません。むしろ、争い事など無い方が良くに決まっています」

「なら…何故、『戦え』なんて言うんだ？」

「僕が言っているのは、『戦い』では無く『闘い』…精神的な面でのことです」

争い事の意味での「戦い」ではない。

おそらく、きっと…「己の世界を持たない」と言っていた目の前の青年は、「自身と闘う時」が来るのだらうと思った。人に疎まれ、理解されない…それでも彼には「闘って」欲しい。「理不尽な世界」

を破壊するために。

その意味を汲んだのか、亀山もああ、と納得の声を上げる。

「闘い」とは、何も争うことだけではないのだと、彼も知っているから。目に見えない「理不尽」や「圧力」、そして「己の欲望」に立ち向かうこともまた、「闘い」と呼べる。

杉下右京と共にいて、そう言った物と何度も「闘って」来たのだから。

「俺達も、俺達なりの『闘い』をしますから。陸の孤島：特命係で、ね」

「…ああ、そうだな」

そう返した士の目元がふと緩む。おそらくは、右京や亀山の言う「戦いではない闘い」の意味を理解したからだだろう。

それだけ言うと、士は軽く手を振り光写真館の中へと戻っていく。夏海とユウスケも、深々とお辞儀を一つして、士の後を追うようにその昔ながらの写真館の中へと姿を消し：「光写真館」は、まるで最初から存在などしていなかったかのように、その場から消え失せた。

全てが解決した訳ではなく、むしろここからが大変であると：そう、この世界に言い聞かせるかのように。

「それにしても…もらったコレ、歪んでますね」

「歪んでいますねえ」

士から焼き増ししてもらった写真を見ながら、亀山は苦笑気味に、右京はいつも通りの口調でそう呟いた。

一体いつの間に撮られたのか。二人並んだ姿に、そこにあるはずの無い「特命係」のプレートが写りこんだ写真。

歪み、色も何故かわわっているのに、不思議と温かみを感じるそ

の写真。

「けど俺、こう言うの、嫌いじゃないです」

「僕も、嫌いではありません。味があって良いと思いますよ」

「です、ね」

写真の中の二人と、同じ笑顔を浮かべながら。

二人は互いの顔を見あって、再び日常へ…都心の雑踏の中へと、紛れて行った。

＊

「うん、この写真は士君が撮ったにしては良く撮れてる。額に入れて飾っておこう」

そう呟いた栄次郎の手にある写真に写っているのは。

左に右京、右に亀山が並んだ姿と、背後に「特命係」の黒いプレート。二人の全身が入っているのに、写真の上の方には二人の笑顔が大きく映し出されている。

「相棒…か」

「いいコンビだったよな、あの二人」

「そうですね。いつかまた…お会いしたいです」

心に暖かな気持ちを抱え、ほう、と夏海が吐き出すように言葉を紡ぐ。

きつと、今回のこの世界。名前を付けるなら「相棒の世界」とでも呼ぶべきか。

私は、士君の相棒です。例え、戦う力が無くたって。士君が暴走したら、私が止めれば良いんです。

…それが、相棒って物なんですよね、士君：
どっかりとソファに腰を下ろす士を見つめながら、夏海は柔らかな笑顔を浮かべて心の中で思う。ほんの束の間の平和をかみ締めるように。

「つてちよつとおおー！なあって私の出番がここだけなのよー！！」

「あ、キバーラ」

「いたのか、白蝙蝠」

「あーん！！存在忘れられてるしい。あんた達なんて、次の世界で痛い目を見りゃ良いのよ！えいっこのっ！」

「わっ、ちよっ！！何するんだよ！？」

八つ当たり気味にユウスケに体当たりを食らわせるキバーラに気圧されたのか、ユウスケは思わずその場によるめき…じやらりと背景ロールの昇降用の鎖を引く。

そうして、降ろされたロールに描かれていたのは……

密林に潜む、赤い目をした仮面ライダーの姿だった。

…「アマゾンの世界」への、旅立ちである…

エピソードのエピソード

「ありませんねえ」

某月某日、杉下右京は、朝から何やら探している。本の間や机の下などを捜しているところを見ると、どうやら紙のような物だと推測される。

しかし珍しいこともある物だ。失せ物などしそうに無いこの男が、何を探すと言うのだろうか？

「おはようございます、杉下警部」

「おはようございます、神戸君」

いつも思うのだが、この杉下右京なる男は、一体いつ登庁しているのだろうか。現在、午前九時五分前である。

「…何を、探していらっしゃるんです？」

「写真です。特徴的な写真ですから、捨てることは無いと思うのですがねえ…」

そう言っただけ彼は再びごそごそとあたりを引っ掻き回している。

ふと気がつくと、俺の足元に一葉の写真が落ちている。

「ひょっとして、これじゃありませんか？」

「おや、そんなところにありましたか」

拾いながら言った俺に、どこか安堵の色すら浮かべて彼は言う。そんなに大切な写真なのだろうか。思いながら、俺はその写真を確認するように見やる。

写っているのは今と対して変わりの無い杉下右京と、カーキ色のジャンパーの男性。おそらく、俺の前任の亀山巡査部長だろう。見た感じは、熱血漢、体育会系、直情型で人情家、と言う印象を受ける。

屋外で撮った物だろうと思うのだが、どういう訳か「特命係」のプレートが写りこんでいる。

そもそも写真そのものがピンボケし、ブレている。

俺なら、真っ先に捨てそうな、そんな出来損ないの写真だ。それを探すとは。やはり杉下右京という男、読めない。

「これ、写ってるのは杉下警部と亀山巡査部長ですよ」

「ええ。随分と、興味深い事件の時に撮って頂いた物です」

「ピンボケしてますし、随分と腕の悪い撮り手だったみたいです。証拠写真なんかには向かないな」

言いながら、俺はその写真を杉下右京に返却する。

言われた方は、どこか苦笑気味に俺の顔を見ている。

それにしても、「興味深い事件」か。興味がわからない訳でもないが、いまひとつ踏み込めない何かがあるような気がする。

とにかく、これ以上追求するのはやめよう。俺には俺の仕事がある。……暇なりに。まずは、角田課長のコーヒーを淹れることから始めよう。無かったら色々と煩そうだ。

「これを撮って下さった彼は、きちんと自分の世界を見つけられたのでしょうかねえ……」

ふと、そんな言葉が聞こえた気がしたが……振り返った時には、既にいつも通り、余裕綽々の笑みと共に紅茶をすする杉下警部の姿が。……俺はいつか、先程の写真の元となった事件を知る日が来るのだろうか。

来なければ良いと思う反面、なぜか知りたいたいと思ってしまう自分がいることに驚くばかりである。

エピソードのエピソード（後書き）

とりあえず、ここまでお付き合い頂きました皆様方に、深い感謝の意を表したく思います。

今回にて、「相棒&仮面ライダーディケイド 傍迷惑な殺人」は終幕となります。本当にありがとうございました。

＊

思えば様々な要因から、このエピソードを更新することが非常に遅くなりました。それも非常に短い文章であるにも関わらず、です。最後の最後、「エピソードのエピソード」：これは、珍しく、一人称(?)で書いています。

むしろ、神戸さんのP C日記（報告書）形式に近いかもしれません。

＊

途中で、「ホワイトタワー」なる架空のドラマを作り上げ、米沢さんに、「その弁護士がはまり役」みたいなことを言わせましたが：実はコレ、及川氏をリスペクトした物です。

「ホワイトタワー」Ⅱ「白い○塔」のつもりでしたが：一体どれ程の方に気付いていたただけたのやら：

＊

そんな考えから、今回最後にこの「エピソードのエピソード」を放り込みました。

もしも続編を作るなら、今度は亀山さんではなく、神戸さんを絡ませたい、と言う考えもあった。

＊

それでは最後にもう一度。本当に、ありがとうございました。いつかまた、お会いできる日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893h/>

相棒&仮面ライダーディケイド 傍迷惑な殺人

2010年10月8日12時48分発行